

---

# 仮面ライダーディケイド～紅蓮の破壊者～

ジュンチェ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド〜紅蓮の破壊者〜

### 【Nコード】

N5171W

### 【作者名】

ジュンチエ

### 【あらすじ】

世界の破壊者と同じ力をもつ男、西門 四季。ライダーや様々な戦士たちの入り乱れる世界でその瞳は何を見る？『全てを破壊し、物語を紡げ!!』

## 序章（前書き）

どうも、作者のジュンチエです…。初の投稿作品となりますがよろしく願っています。

## 序章

何処かの廃墟のなつた街…

何人もの戦士の猛者達が一人の紅き戦士を取り囲んでいた…。

「紅き破壊者、貴様をここで倒す！」

「できるかな？仮面ライダーブレイド？」

戦士達の猛者の一人、青き鎧に身を包んだ仮面ライダーブレイドが威勢よく声を挙げる。スピードのような顔に赤い複眼が特徴だ…。

「ウェイ！！！」

「ふん！！！」

『FINAL FORM RIDE BLADE』

「ぐっ！？」

自らの武器で斬りかかろうとしたブレイドが巨大な剣『ブレイドブレード』に変形させられてしまう…。

「ブレイド！！！」

赤いボディに龍を模した鉄仮面の戦士、仮面ライダー龍騎が救助に向かおうとするが…

『FINAL ATTACK RIDE B , B , BLADE』

「!?!?ぐあアアア!?!」

ブレイドブレードの攻撃をまともに受け爆発してしまう。

「!よくも!?!」

宙に浮いていた白装束の女性が自分の杖の先端部を紅き戦士に向ける。

「デスパイン…」

桜色のエネルギーが収束させるが…

「ふん!?!」

「きゃあ!?!」

紅き戦士はブレイドブレードを投げつけ、女性を叩き落とす。

「時空管理局のエース・オブ・エース高町なのはも大したことないな…」

そう呟くとカードを装填する…。

「消える…」

『FINAL ATTACK RIDE DECADE  
BLOOD』

紅き戦士は銃を構えた。そして、銃口にエネルギーが収束されると真つ赤な砲撃が二人を消し飛ばした。

「な、なのは！？貴様！！」

「てめえ…」

「！！」

金髪の黒い衣装を纏った女性が金色の刃の鎌を構え、黄色の を描いたような複眼が特徴の仮面ライダーファイズがアクセルフォームに変わり、赤い複眼に白いライン、そして胸の装甲が展開し肩に収まる。

「いくぞ…」

『clock up』

赤い装甲に青い複眼、そして何より天を指すかのような角が印象的なライダー、仮面ライダーカブトが攻撃を仕掛ける。

「ソニックフォーム！！」

『start up』

女性とファイズもそれに続き、やがて三者は見えなくなる。

「速さには速さだ…」

『ATTACK RIDE CLOCK UP』

そして、紅き戦士も見えなくなる…。

そして、数秒後…

「きゃあ！」

「ぐあ！？」

「ちっ！」

攻撃を仕掛けた三人がボロクソになって地面に放り出される。

「終わりだ…」

紅き戦士は何事も無かったように地面に着地するとバックルにカドを装填する。

『FINAL ATTACK RIDE DE DE DECADE BLOOD』

「「「ぐあアアアアアアアアアア！！」「」「」

そして、紅き戦士の体が炎のように光りその場を包みこむと戦士たちの断末魔がこだました…。





## 人物紹介（前書き）

四季「お前らの出番はここまでだ！」

なのは・フェイト「ええ！？」「」

## 人物紹介

西門 四季（仮面ライダーディケイド・ブラット）

年齢などは謎。長い黒い髪を後ろで纏めている。普段は黒に赤にのライン、背中に金色の鷲のエンブレムのついた革ジャンを着ている。（しかし、世界が変わるたび衣装が変化する）顔立ちもそう悪い訳では無いが女にはまるで縁が無い。趣味は写真を撮ることと絵を描くこと（しかし、人物画のレベルは最悪である）。性格は細かい事は気にしない。

仮面ライダーディケイド・ブラット

身長192センチ

パンチ力4t

キック力8t

別名『紅蓮の破壊者』。ほぼ、ディケイドと同スペックだが、ボディの色がマゼンタではなくワインレッドで複眼はフラットなイエローである。そして、意味があるかは謎だが白いスカーフがついている。昭和ライダー以外なら変身が可能。ライダー系以外の能力なら変身無しで引き出せる。（しかし、彼自身の能力の本質はあくまでも破壊である。）さらに、他のライダーに変身した状態でもある程度、自身の基礎能力は使える。（例としてアタックライド・スラッシュなど...）

ブラック・ディケイドライバー

ディケイド・ブラットの变身ツール。外見はディケイドライバーの白い部分を黒くし、刻まれているエンブレムは金色である。四季曰くかなり悪趣味。

ブラック・ディケイダー

マシンディケイダーのマゼンタの部分をワインレッド、白い部分を黒くしたような外見。四季曰く、嫌いじゃないけど悪趣味。

キルバット

キバット三世に酷似しているが瞳は蒼く、ボディは銀色である。自称『誇り高きキバット族』なのだが綺麗、そして可愛い女性には目が無く例え人妻であろうとあの手この手でスキンシップを試みるが最終的には子供に捕まり哀れな末路をたどることもしばしば…  
基本、情報収集・戦闘サポート・マスコットである。  
ある秘密があるようだ…

西門 治

年齢は謎。カフェ『スプリング』を経営する老人。白髪を後ろに纏めている。四季たちの活動拠点である『スプリング』はそれぞれの世界の住人が訪れ、意外と繁盛しているようだ。普段は優しいがキレると魑魅魍魎だらうが重火器を用いてお仕置きする危ないジイサン。たまにカウンターでショットガンを磨いていたりするが怒らせなければ問題ない。

## 人物紹介（後書き）

なのは「いくら何でもあんまりだよ…」

四季「大丈夫、別の作品に出すらしいから。」

フェイト「ホント!?!」

四季「主役じゃないけどな!」

フェイト「出番あるだけ良いけど…」

四季「なにになに…（台本を見る）お二人の出番は序盤無いってぞ。」

なのは「そんな!」

四季「お前はしばらく登場しないらしい。」

フェイト「ウン…」

## 旅人（前書き）

四季「この小説って昔、作者がモバゲーでやってた小説を本にできただよな。」

作者「中々、好調に進んでただけで強制非公開となりあえなく…」

四季「あらら…」

作者「ちなみに本は士たち（仮面ライダーディケイド）との出逢いの話もあったんだけど都合上カット。」

キルバット『それじゃ、始まるぞ！』

四季「細かいことは気にするな！！！」

## 旅人

「また、あの夢か…」

とある殺風景の部屋で一人の青年が目を覚ます。長い髪は女性をおもわせるが体型は完全に男である。

「やれやれだぜ…」

青年の名は西門 四季。性格は細かいことは気にしない。それゆえ、面倒に巻き込まれたこともあったが…

(破壊者なんてまっぴらだ…)

四季は寝間着を脱ぎ紅いシャツを着ると金色の鷲のエンブレムが印刷されたジャケットを着る。

「今日もバツチリだ！」

鏡の前に立ち自分のファッションを確認する。そして、ふと脇の棚の上に置いてあった写真を見る。そこには浅黒いミルクタンクを背負った男性の写真と後は若い男女三人と老人が一人映っている写真があった。

(伊達さん元気かな……夏海ちゃんまたあえるかな…)

懐かしそうに写真を見る四季。そして、髪をゴムで纏める。

(さて、行きますか…。)





思い出すだけで恐ろしい…。そんな事を思いながら壁に垂れ下がっている鳥の巣箱のオブジェに手を突っ込む。

「オラ！キルバット起きろ！！」

そして、何かをひきづりだすと勢いよく反対側の壁に叩きつける。

『ぐはあ！？』

そのまま壁に叩きつけられた何かはづりおちていく…。

『き、貴様……………』

それはコウモリのもようであった。しかし、蒼い目に銀色のボディはけっしてコウモリのそれではない。

彼の名はキルバット。キバット族というのに分類されるのだらしい。

『解るか四季？基本コウモリは基本、夜行性なんだぞ！』

「うるせえ！てめえは夜はエロマンガを見てるだけだろ！！」

『うるさい！自分のコレクションで楽しんで何が悪い！！』

「黙れ変態コウモリ！！」

『変態コウモリだと！？いいか四季！私は誇り高きキバット…』

「おっと手が滑った…」

四季はマッチをキルバットのオブジェの巣にマッチを入れる。

火のついた状態で…

『私のコレクションがああああああ！？』

あっという間にオブジェは丸焼きになり、キルバットのコレクション（エロマンガ等…）も灰になる。

「二人とも良い加減にして外見てきたら？」

治は呆れながら二人（？）に言う。

「そうだな。逝くぞキルバット！」

『あつ待てゴラ！？てか字がおかしい！！』

そして二人は外に出る。そして、二人は外を見た。

大きな風車にどこか懐かしい風景の街。爽やかな風が吹き抜ける…。

『1111は…風都…』

「ヤングマスターは

仮面ライダーWの世界…。」

旅人（後書き）

次回…

本格始動！

第一弾

仮面ライダーWVS武装錬金篇

来訪者（前書き）

四季「さて、WVS武装錬金篇スタート！でも、俺の変身はもう少し先…」

なのは「私も出番ほしいよー!」

フェイト「諦めよう…この小説じゃ無理だよ…。」

なのは（？）「なら、私がレギュラーにさせて貰いましょう。」

なのは・フェイト「!」

## 来訪者

「くっ……」

少女は荒れ果てた廃墟の広がる場所で目を覚ました。おかつは頭にセーラー服のこの少女の名は津村 斗貴子。まだ、高校生だが立派な戦士の一員でもある。

「ここは……」

そして、ボロボロの服に一帶の荒れ果てた様子……。そして、そこら中に転がっている他の戦士らの骸。

「一体……これは……」

辺りを見渡しても景色は変わらない。最早、これは闘い……ではなく、戦争の後だ。

「！」

斗貴子は動く人影に気付いた……。それは戦士達の屍を踏みながらこちらに向かってくる。

「……」

警戒する斗貴子。そして、その人影の全体像が見えてくる……。

白いラインが入った血のように紅い鎧。

バーコードのような顔

つり上がった凶悪な炎のような複眼

血がこびりついている黒いスカーフ

右手に、血の滴り落ちる黒い剣が握られている

彼女はすぐさま臨戦体制に入ろうとした

しかし…

『エクストリーム』！！

電子音声がどこから鳴り響くと紅い戦士の後ろに一人の戦士が立っていた…。

右側がメタリックな緑で左側は赤、真ん中はクリスタルを思わせるかのようなラインが入っている。そして、青い複眼は車のライトのように発光しており二本のつのがそれぞれ複眼の脇についている…。

彼の戦士の名は仮面ライダー<sup>ダブル</sup>Wサイクロン・アクセル・エクストリーム

二人で一人の憎しみの戦士。

「あああああああ！！」

「！」

それに呼応するように次々と屍の山の中から戦士が立ち上がる。

「うおおおおおおお！！」

ギユイン、ギユイン、ギユイン、ギユイン、ギユイン、ギユイン

激しい駆動音と共に姿をかえる赤い戦士。その鎧は次第に闇のように真っ黒に染まり金色のラインが入ると刺々しくなり、二又に別れた角も四本になる。そして、赤い複眼も漆黒に染まる。

23

仮面ライダークウガ・アルティメットフォーム

優しき心を失った「黒き闇」「凄まじき戦士」。その瞳に映るのは漆黒の闇と倒すべき敵…。

「うおおおおおおお！！」

『プテラ・トリケラ・ティラノ！！プ・ト・ティラノザウルス！

』！





「カズキイイイイイ!!」  
彼女は少年の名を叫んだが彼にその声は届かなかった…。

「……はああああああああ!!」「……」  
戦士達は紅き異形に突っ込んでいく…。多勢に無勢だが確実に一人ずつ裁いていく。

「はああああああ!!」

『エクストリーム・マキシマムドライブ』!!

『スキヤニングチャージ』!!

戦士達は必殺技の体制をとる…。

『FINAL ATTACK RIDE DECADE BLOOD』

紅き戦士の剣にも焔のような光を持った刀身になり、常時より太くなる。こちらにも全力で受けて立つつもりのような…。

そして、ほぼ一瞬だったろう…戦士達はぶつかり合いとてつもない爆発を起こし見えなくなった…。

「カズキ、カズキ、カズキイイイイイ!!」

その爆発の中でも少女の虚しい叫びは響いていた…。

「どうしたの斗貴子さん？」

「え？」

斗貴子は横にある自分を心配そうにのぞきこむ顔に驚く…。

「カズキ…？」

「そうだけど…？」

「一体どうなっている？」

「大丈夫？顔色悪いよ。」

自分の目の前にいるのは他ならないカズキ本人であり彼女の愛しい恋人である。

（なら…さっきのは…）

夢だろう。斗貴子は我ながらなんと恐ろしい夢をみてしまったものだと思う。

「すまない…問題ないよ。」

カズキをだきよせる斗貴子。カズキは驚いた顔をするが以外と満更でも無さそうだ…。

「ゴホン、ゴホン」

すると、咳払いが聞こえる。

「お二人さんイチャつくのは構わないがここは車の中だぞ？」

「!」

彼女は気づいていなかった。いや、忘れていた…と言うべきだろう。今、彼女達は軽ワゴン車に乗っており当然、カズキと彼女は高校生なので車の免許など持っていない。となると車を運転する第三者がいるわけであり…

「!?!」

かくなり恥ずかしいところを見られてしまった訳である。しかも…

「斗貴子さんの寝顔…可愛いかったな…。」

「!?!」

自分の彼氏にもかくなり恥ずかしいところを見られてしまったよ  
うだ…。

「!、@ @ @ @ @!」

「落ち着け、斗貴子。」

顔を真っ赤にして暴走する斗貴子を宿める運転手。

「さうて、そろそろつくぞ…」

そして、彼女が落ち着いたところで目的地が見えてくる。

「風都だ…。」

数分後…

「風都キタアアアアアアアアアアアアアアアア!」

ノリノリの少年が一人…。カズキである。

「コラ、騒ぐんじゃない!」

注意する斗貴子だが…

「風都キタアアアアアアアアアアアアアアアア!」

「!?!?」

運転手の男も同じように叫ぶ。いい年の親父なので周囲からは勿論、かなりいた〜い目で見られる。

「ブラボー！一緒にやろう！」

「ああ、いいだろう！！」

「風都キタアア……」

「いい加減にしろ！」

ボカ、ボカ

とうとうブチ切れ制裁をかます斗貴子。

「ごめんなさい……」

「一応、俺上司なんだけど……」

バカ二人は反省（？）し、土下座する。

「解ればよろしい……」

（あれ？俺、上司だよね……？）

周囲の人は部下に尻に敷かれた上司ほど哀れなモノは無いと思ったり、子供に『見ちゃダメ』と言って去っていく……。

（先が思いやられる……）

頭を悩ませる斗貴子。しかし…

「マツタタヨ…レンキンノセンシ…」

「!?!」

若い男が突然、絡んできた。しかし、問題はそこではない。

(コイツ…私達の正体を知っている?)

本来なら一般人が知る由も無い事を知っていたのだ。

「サツソク…」

『ホッパ』!!

「シンデクレ…」

来訪者（後書き）

キルバット『嫌だ！！男だけの旅なんて！！』

四季「レギュラー…あと三人？面子増えんだったらしいよ？」

キルバット『マジ！？カモン、プリティガール！！』

四季「女とは一言も言っていないんだが…。」



**襲撃のD・二人で一人の仮面ライダー（前書き）**

カズキ「着いてそうそうにこんな目に…」

パピヨン（蝶・変態）「気にするな。私の活躍を…」

斗貴子「オマエの出番は無い!!」（マジで!?!）

武装錬金のメンバーは本編終了後、1ヶ月後という設定です。

## 襲撃のD・二人で一人の仮面ライダー

これまでの『仮面ライダーディケイド』紅蓮の破壊者』は

ブレイド「嘘だドンドコドーン!!」

なのは「頭、冷やそうか…」

オーズ『ラブー・ラブー・ラブー』!!

伊達「あ、後藤ちゃん。おでんある?」

モモタロス「俺、参上!!」

????「ウホツいい男!」

真木「やああああめええええろおおおお!!やああああめええええろおおおお!!」

鳴滝「おのれ、ディケイドオオ!」

フェイト「出番、出番、出番、出番、出番、出番、出番、出番、出番、出番、出番」

四季「全然、違うじゃねえか!?好き放題やりやがって!てか、全く関係ない奴混じってんじゃねえか!!」

本編…

『ホッパ―』！！

一行の前に現れた謎の男…

男はUSBメモリらしきものを首筋に差すとメモリは体内に侵入していく。すると、男の体は飛蝗を模した異形『ホッパードーパント』へと姿を変える。

「「「！！！！」」」

身構えるカズキ達。周りの人々は突然の異形の出現に悲鳴をあげながら去っていく…。

「レンキンノセンシ…クロス…」

「くそ…」

カズキも自らの力『武装錬金』を使おうとするがしかし、人目のつく場所での使用はマズイし何より最悪の場合、一般人にも被害が出てしまう。

「カズキ、ここは一旦場所を変えよう！」

「わかつ…」

斗貴子は指示を出しカズキもそれに従おうとしたが…

「オソイヨ……」

「！」

既にホッパーDの骨をへし折るほどの威力の飛び蹴りが目の前に近付いていた。

ドコツ！！

「ガバアツ！！」

そのまま蹴り飛ばされ壁にめり込むカズキ。

「チツ…ウケナガシタカ…」

残念そうな声を出すホッパーD。どうやら、思ったほどダメージを与えなかったようだ…。

「マアイイ…ツギハ…」

「オンナダ…」

ダンッ

斗貴子に標的を変えたホッパーD。その大地を蹴った脚が彼女を襲う…

ドコッ

「ゲヘ!？」

ことはなかった。何処からか飛んできた古めかしいデザインの本が異形の頭を直撃。ホッパーDはそのままバランスを崩し地面に落ち

る。

「やれやれ…か弱いレディをいたぶるとは…」

本が飛んできた方向には黒髪の青年が一人。ラフな格好で歳は二十歳前後だろうか…。

「キサマ…ナニモノダ…!？」

「それはコレを見れば解るんじゃないかな？」

そう言つて青年は男が先程取り出したUSBメモリに似たような緑色のメモリを取り出す。

『サイクロン』!!

青年がメモリのスイッチを押すと電子音声が鳴り響く。すると、青年の腹部に赤い複雑な形をしたベルトが現れる。

「キサマ…マサカ…!？」

「そう、そのまさかだよ!!」

異形の怯える様に驚く斗貴子ら一行。そして、青年の正体に一気に関心が高まる。

「変身！」

青年がメモリをベルトのスロットに差し込むとメモリはどこかへ消え、青年は倒れる。

「……」

「……」

「……」

「……」

沈黙する一同……

暫くたつても何も起こらない。

「フザケルナアアア!!」

とうとうホッパーDはシビレを切らし青年に襲いかかる。

「危ない!!」

「シネエエ!!」

カズキの叫び虚しく、異形が飛躍し青年の頭に着地しようとした……  
その時……





「『さあ、お前の罪を数えろ！』」

「ヒツイイ…『仮面ライダー』…」

「仮面ライダー？」

怪人の怯えた声の中の単語の中に気になる斗貴子。

「ウオオオオオオオオ！！」

ホッパーDはもはや自棄になったのかWに突っ込んでいく。

「はあっ！」

しかし、それを華麗にかわしラッシュを叩きこむW。

「コノッ！」

ホッパーDは得意の跳躍力で離脱を試みるが…

「『させるか（ないよ）！』」

『サイクロン・トリガー』！！

Wはドライバーから左側のメモリを入れ換えると左側が青くなり、射撃武装である『トリガーマグナム』が追加される。

「はあっ！！」

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダ！！

「グアッ！？」

ホッパーDはWの放つトリガーマグナムの弾丸により叩き落とされる。

「グウツ…！」

それでもなお逃走をはかる。

「逃がさないっていつてんでしょう…！」

『ルナ・メタル』！！

再びドライバーからメモリを入れ換えるW。今度は左右どちらも入れ替える。すると右側が黄色、左側は鉄のような銀色になりトリガーマグナムが消失し背中に棒状の武器『メタルシャフト』が設置される。

「『はあつ…！』」

「グヘツ！？」

Wがメタルシャフトを振るとメタルシャフトは鞭のように伸び、ホッパーDに巻き付く。

「それっ…！」

WはそのままホッパーDを空中に放り投げる。

『ヒート・メタル』！！

今度は右側のメモリを入れ替えるW。同時に右側が赤色に変わる。

『決めるよ!』

『メタル・マキシマムドライブ』!!

Wはドライバーの右側のメモリを抜くとメタルシャフトのスロットに挿入する。

「『W・メタルブランディング!』!」

そして、落下してきたホッパーDに炎を纏ったフルスイングを直撃させる。

「グアアアアアアアアアアアアアアアア!？」

直撃されたホッパーDはそのまま彼方へ飛んでいく。

「ホームラン…てね…。」

Wは怪人の飛んでいった先を手をかざし見つめる。

「すっ……凄いや!」

「かつ……カツコイイ…!」

斗貴子は驚愕していた。自分達が手を出しかねていた相手を突然、現れた謎の戦士が完全に圧倒していたからだ。カズキはただ見とれていただけのようだ…

『さてっ……後は…』

Wはカズキ達へ向くと声をかける。

「君達…怪我は無い？」

一瞬だけ警戒したカズキ達だったがどうやら敵ではなさそうなので警戒を解く。

「あっ！はい！！大丈夫です。」

「そう…なら良かった…」

カズキの言葉に安堵の声をだすW…。その時…。

ババババン！！

「ぐあぁ！？」

カズキの言葉に安堵の声をだすW…。その時…。

ババババン！！

「『ぐああ!?!』」

どこからか放たれた雷撃がWを襲う。

「なっ!?!」

ブラボーが雷撃により起きた煙の向こうに異形の影を3つ見た。

2つは緑色の虫を模した異形。螻蛄の怪人、『カマキリヤミー』とその親玉である虫系幹部グリード『ウヴァ』。その体はクワガタ、螻蛄、飛蝗の意匠が見られる。

もう1つは赤い巨体にオリオン座が模してある怪人、『オリオンゾディアーツ』。

「新手だと…!?!」

異形達はゆっくりと距離を詰めてくる…。

「貴様らには恨みは無いが…死んでもおう…。」

ウヴァが身体に雷撃を纏いながら怪人を引き連れ突っ込んでくる。

(ま…マズイ!?!)

「斗貴子、カズキ!?!」

「!?!?!」

ブラボーはとうとう危険と判断。二人は一瞬で全てを理解し、自らの力を解放しようとする。

「武装錬……」

その時だった…。

『オリヤッ！！』

ガンガンガン！！

「ぐお！？」

「……！？」

何やら得体の知れない小さな飛行物体が異形に突撃し、バランスを崩させる。

ブオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

ドカツ×3

「ぐは!?!」

今度は一台の黒いバイクが怪人達を弾き飛ばす。

「ストラ〜イクってね。」

そして、バイクから一人の青年が降りてくる。その青年は四季であった…。

「き…: 貴様は!?!」

「よ〜うウヴァ。また『コアメダル』獲りたいか?」

四季は懐に手を突っ込むと黒がメインに金色の装飾、何より赤い寶石らしきモノが目を惹く『ブラックデイケイドライバー』を取りだし腹にあてる。すると、バックルからベルトが伸び、四季に巻き付く。

「いくぜ…!」

右手で一枚のカードを持ち、そして、バックルの両サイドのハンドルを展開。

「変身!?!」

右腕を顔の前でもってくるようなポーズを取るとカードをバツクルに装填する。

『KAMEN RIDE...』

『DECADE BLOOD...!!』





紅きRの実力・その力は破壊(前書き)

カウント・ザ・カード!!

現在、四季の使えないカードは…

クウガ〜オーズまでの平成主役ライダー

カブトの世界のライダー

アクセル

ギルス

ダークライダーの方々

オーデイン

四季「これ使えないのきついで…。」

紅きRの実力・その力は破壊

『KAMEN RIDE …』

『DECADE BLOOD』!!

ブラックデイケイドライバーにカードを装填した四季は足元から黒い装甲に包まれた黄色の複眼がついた鎧が精製される。そして、空から七枚の深紅の板が飛来し、頭に突き刺さる。すると、装甲の一部がワインレッドと白に染まる。さらに、その体は炎を纏う…。

「そんなハッター…」

「よせ…!」

オリオンゾディアーツがウヴァの静止を聞かず突っ込むが…

「はあ!」

「ふ!?」

その前に四季は炎を振り払い、凄まじい衝撃波でオリオンゾディアーツを弾き飛ばす。

『あれは…』

炎を払った四季の姿は変わっていた。ワインレッドと黒に白いライ

ンの十字の入った鎧…。板の刺さってたいた顔はバーコードのようであり、板だったものは黒い角になっている。そして、真ん中の角の上には紫色の宝石が輝く…。

「いくぜ…。」

白いスカーフをなびかせ、ここに仮面ライダーディケイド・ブラッドが降臨した。

「新しい…仮面ライダー？」

『カードで変身とは…興味深い。』

驚くW。

「オラア…！」

ドカツ…！

オリオンゾディアーツに殴りかかるディケイドB。カマキリヤミーも応援しようとするが自分の腕の鎌では図体のでかいオリオンゾディアーツの援護は難しい。何とか斬りかかった所を軽く蹴りであしらわれる。

「おのれ…。」

「邪魔だ…。」

『ATTACK RIDE BLAST』



フォーゼが姿を現した。

「宇宙…じゃなかった。風都キター!!!」

両方の腕を振り上げ叫ぶDBフォーゼ。雄叫びの内容は多分さっきのアホ二人とは関係無い…。

「舐めるな!」

雄叫びの隙をつき、オリオンゾディアーツは勢いよく突進するが…

『ATTACK RIDE ROCKET』

「!、ぬお!?!」

DBフォーゼは素早くカードを装填、右腕にオレンジ色のロケットモジュールを出現させ、オリオンゾディアーツをかわし地上の怪人三体に滑空するように攻撃を仕掛ける。

「くくくああ!?!」「」

「次はコレ。」

『FINAL ATTACK RIDE FO FO FOUZE』

DBフォーゼはさらに新しいカードを装填。すると左足にドリルモジュールが装備され、ライダーキックの体勢に入る。

「ソイヤアアアアアアアアアアアアア!?!」

D O O O O O O O N ! !

「くくくああアア!!」「くく」

必殺技の直撃を受けオリオンゾディアーツは爆発し、残った怪人二体も銀色のメダルを撒き散らしながら吹き飛ぶ。

「ふう…やれやれ…。」

デイケイドBの姿に戻り地面に着地する四季。その視線は爆発の炎の先に向けられている。

「やった…?」

「まだまだ…。」

敵の撃破を予想するカズキだがブラボーは否定。それに呼応するかのように爆発から巨大な影が現れる。

「げ…。」

その影の正体は暴走したカマキリヤミー。外見は超巨大カマキリそのものだ。流星にデイケイドBも呻き声を漏らす。

『ギイイイ!!』

ビュン!!

「わああ!?!」

巨大な鎌を振り回すカマキリヤミー。動きは緩慢だが残念なことに相手の方がリーチでは勝っており迂闊に近づけない。

『四季!!!』

その時、苦戦するデイケイドBを援護すべくキルバットが飛来。鎌をかわし、カマキリヤミーの足に噛みつく。

『ギイイイ!?!』

驚いたカマキリヤミーは鎌を振り回し、地面に突き刺さってしまう。

『今だ!!!』

「ナイス!キルバット!!!」

その隙にデイケイドBはライドブツカーからカードを取り出す。

「後は専門の人に任せる…。」

『KAMEN RIDE…』

「伊達さん…力を借りる…。」

『BIRTH』



『カポーン』!!』

バックルに装填するとデイケイドBは薄い緑色の球体に包まれ鉄のような装甲が形成、装着されていく。顔はU字のバイザーが特徴のマスクに変化する。

「さて、稼ぎますか。」

デイケイドBは『仮面ライダーバース』の姿と力を借りたDBバースに変身した。

『ギィィィ!!』

「おいさー!」

『ATACK RIDE KYATAPIRA REG DORIL  
L ARM SLASH』

カマキリヤミーの攻撃を回避しカードを三枚装填するDBバース。すると両足に機動力を上げるキャタピラレッグ、右腕にドリルアーム、左手にはソードモードに変形したライドブッカードを構える。

「オリヤアアアアアアアアアアアアアアアア!」

素早くカマキリヤミーの懐に入りこむとドリルアームで腹を抉り、ライドブッカードで足を切り裂くDBバース。

『ギイイイ!?!』

カマキリヤミーは耐え兼ねて銀色のメダルを撒き散らしながら倒れこんでくるがDBバースはその前に離脱。トドメを刺すべくバツクルに必殺技のカード『ファイナルアタックライドカード』を装填する。

『FINAL ATTACK RIDE B B BIRTH』

『セルバースト』

カード装填後、DBバースの胸に巨大な砲身『ブレストキャノン』が装着されエネルギーが収束。極限までチャージされた途端ブレストキャノンが真つ赤なエネルギーの竜巻のような砲撃を放つ。

『ギ、ギイイイイ!?!』

最早、ろくに動けないカマキリヤミーはただの的でしかなく虚しい断末魔をあげながらメダルを撒き散らし爆発した。

「さて、後1人…?」

残るウヴァを撃破すべく辺りを見渡すDBバースだが既に離脱したようで姿が見えなかった。

「ま、いつか。」

ディケイドBの姿に戻る四季。

「凄い…」

「なんて力だ…」

カズキとブラボーは圧倒的な力に戦慄を覚える。

しかし…

「ああ…」

ただ1人…斗貴子は体を震わせている。

「ああアア!!」

彼女は一瞬、ディケイドBを悪夢の悪魔と重ね合わせると意識が遠退く…。

「おい、お前！」

「斗貴子さん！」

ディケイドBとカズキが何とか受け止めたのと同時に彼女は意識を手放した…。

紅きRの実力・その力は破壊（後書き）

ディケイド・ブラット、カマキリヤミー撃破後…

カラカラ…

転がっていく緑のメダル…

???『このままではすまさん…』

不気味な言葉だけ残すと無数の異形の映る銀色のオーロラへ姿を消した…。

Wの正体・それぞれの事情 前編（前書き）

今回短い…

そして、デイケイドおなじみのあの人が現れたようです…。

カズキ「斗貴子さああん！！しっかりしてえええ！！」

Wの正体・それぞれの事情 前編

「ああ…」

斗貴子は再び悪夢の中にいた…。悪魔に立ち向かっていった戦士達は全て倒され、カズキは左手で首を締め上げられていた…。

「…」

「があ…!」

悪魔は無言で彼の首を締め上げ続ける…。カズキの苦しむ声など聞こえないかのように…

「やめる…」

斗貴子は微かな声を絞りだすが悪魔は容赦しない…

スッ…

空いた右手を後ろに引くと…

グシヤア

「ぐはあ！…！」

「！…！」

勢いに乗せて彼の胸を貫いた。

「…！」

そして、悪魔の手に握られている六角形の物体…。斗貴子はそれを知っていた。

かつて自分が一度死んだ彼に与え、彼を平凡な高校生から運命を大きく狂わせてしまったモノ…。

それは彼の『心臓』の役割を果たしていた…。

それが無くなるのは『死』を意味すること…

ビキッ…

今、それにヒビが入り…

「やめろおおおおおおお！！」

ガシャン

彼女の目の前でソレは砕かれた…。

「ああ…」

あまりのショックに地に手をつく斗貴子。  
そんな彼女のことなど気にせず悪魔は興味がなくなったかのように  
カズキの骸を投げ捨てる。



ズシヤ

「ひっ!?!」

それは斗貴子の目の前に転がってきた…。

「カズキ、カズキ…」

愛しき少年の名を呼ぶ斗貴子。しかし、胸に大穴があき既に死体となつた彼に応える術はなかつた…。

「奴は『破壊者』だ。」

「！」

突然、聞こえた声に振り向くとメガネを掛けた中年の男が立っている…。

見かけはボロいコートに帽子を被っている外見はホームレスのようだが彼の纏う空気はあまりにも異様さが感じられる…。

「私の名は『鳴滝』。預言者だ。そして、警告しておこう…。奴を止めるなら今しか無い。」

鳴滝と名乗る男が喋りだした途端、意識が徐々に遠退く斗貴子。

「どこやら時間のようだ…。いずれ君が私と志を共にするならいずれまたあつたろう…。その時まで…」

彼女は鳴滝の話最後まで言い終わると同時に目を覚ましていくのであった…。

「あっ！！斗貴子さん気がついた？」

斗貴子はソファーに寝かせられており、隣ではカズキが心配そうに付き添っていた…。

「やあ…目覚めたようだね。」

そして、部屋の隅には先ほどの青年が壁に寄りかかり本を読んでいた…。

「自己紹介まだだったね。僕の名前は『フィリップ・ライト』。この『鳴海探偵事務所』で探偵…といっても大したことはしてないけどね…。ま、よろしく。」

「あつ…津村斗貴子です…。どうも…」

斗貴子も失礼ではあつてはいけないと挨拶を返す…。

「フィリップ…あつ！起きたわね。」

今度は髪長い黒いソフト帽を被った女性が出てくる。中々、スタイルが良い…。

「私の名前は『左舷 翔子』。フィリップと同じく探偵をこの事務所で行っているわ。」

ここで斗貴子はある疑問を持つ…

「探偵事務所…？」

なぜ自分とカズキは何故、そんなところにいるのか…？

「あ…覚えてない？あんた気絶して…それを私たちが運んできたんだけど…？」

「斗貴子さん！翔子さんたちは『仮面ライダー』なんだよ！！」

「仮面…ライダー…？」

突然、カズキの言い出した謎の単語に首を傾げる斗貴子。

「本来ならあんまり関係ない時出したくないけど…これを見れば解るかな？」

翔子は懐から黒いUSBメモリらしきモノを取り出しスイッチを押す。

『ジョーカー』！！

「！」

斗貴子はそれと響いた電子音声に聞き覚えがあった…。

「まあ、これで解つ…ちょっと身構えないで！怪人ドパーになりやしないから！！」

思わずホッパードーパントを思いだし身構える斗貴子。

「落ち着きたまえ…僕たちは君らの一応、『命の恩人』なんだから…」

「フィリップ、間違っ  
てないから『一応』いら  
ない。」  
斗貴子を宥めるフィ  
リップ。翔子は一部訂  
正をしたが…

「やれやれ…仕方ない。君たちにはこの街（風都）や色々な事情が話す必要がありそうだね…。」

そう言つとフィリップは風都の一般的には知られていない影の事情について語りだした…。

Wの正体・それぞれの事情 前編（後書き）

キルバット『探偵事務所に可愛いマスコットはいかがですかお姉さん  
ああん！！』

翔子「足りてる。」

フアング『クワツ（お呼びじゃねんだよ！！）』

キルバット『orn』

四季「失せる。変態コウモリ！！」

『プット・テイラアアノ・ヒッサアアアツ』！！

キルバット『！！おおおおおおおおおおおおおおおお  
おおお！！』

Wの正体・それぞれの事情 後編（前書き）

四季「嫌なフラグがたった気が…」

仕方ないディケイドの宿命だ。



## Wの正体・それぞれの事情 後編

風都…

文字通り『風』にちなんだ場所、名物が沢山ある。どこか懐かしい街並みは観光客にも人気であり特に目玉は『風都タワー』と呼ばれる巨大な風車である。

これだけなら観光地…で済むだろう…。

しかし、風都にはもうひとつの一般的には知られていない事情があった…。

ガイアメモリ…

地球の記憶がそれぞれに内包されており、使用者を怪人ドールにかえる悪魔のアイテム。メモリは『実在するモノ』、『概念』など様々な種類がありどれも危険な代物である。そして、それらは『売人』を通してメモリを欲する人々に『販売』される。

「で、あんなたちを襲ったのはホッパーパンツ、『飛蝗の記憶』

のメモリのドーパントね。」

そのままだ…

斗貴子はそう思った…。

この時カズキはあることを疑問に思った。

「はい、質問！」

「はい、何でしょう？」

「話の割にはずいぶんと平和そうなのですが…何故ですか？」

カズキは最もな質問をする。

「ふふ…よくぞ聞いてくれましたわね…。」

翔子は帽子を深く被り顔を少し背ける…。フィリップはこの時、彼女の口元がニヤリとするのを確認した。

「それは私、『仮面ライダー』のお陰よ！」

「『仮面ライダー？』」

二人は首を傾げる。

「翔子、それを言うなら『僕たち』…だろ。ここからは僕が説明しよう…！」

今度は語り手がフィリップに代わり説明を始める。

## 仮面ライダー

風都の都市伝説として有名なモノの一つ。内容としては影で暴れまわる怪人を何処からか颯爽とバイクで現れる仮面の戦士のこと。怪人を倒すと現れた時のようにどこかへ去ってしまうとのこと…。

実際の仮面ライダーはドーパントと同じく『ガイアメモリ』を使用する戦士の総称、翔子曰く『人々の希望』なのらしい…。それは置いて、ライダーとドーパントの違いは主に2つある。

一つ…ライダーの使うメモリは純正であること。

二つ…ドーパントは直に体にメモリを射し込むのに対しライダーは変身ツールである『ドライバー』を使用する事。これでメモリの中毒作用を中和できる。

「大体、こんなモノだけど解ったかな？」

「じゃあさっき助けてくれたのは…」

「ああ…一応『僕たち』さ。」

そう、先程カズキたちを助けたのは翔子らが変身した仮面ライダー  
…『仮面ライダーW<sup>ダブル</sup>』だったのだ…。

「さてと…それじゃ…」

「君たちについても話してくれないかい？」

「「…！」」

あわよくば避けてはくれないかと思っていた二人だがやはり、フィ  
リップと翔子も探偵、見逃す訳もない…。

「話してもらおうよ…『武装錬金』や『錬金術』について…」

「…何のことでしょう…」

「とぼけても無駄よ。調べはついてるんだから。」

斗貴子も何とか切り抜けようとしたが失敗に終わりついに…

「わかりました…お話します…。」

「斗貴子さん！」

斗貴子を止めようとしたカズキだがその場の空気に押されそのまま黙ってしまふ…。

「こつちも探偵、秘密は守るわ。」

翔子の言葉を一応信じ、斗貴子は自分の知ることについて語りだした…。

「恐らく信じ難いでしょうがこれから言うことは私の知る限りの真実です…。」

『錬金術』と呼ばれる技術があった…。

そして、それによって産み出された存在があった…。

ホムンクルス…

人を喰らう錬金術の化け物。現代の通常の兵器は録に通用せず生命  
力も高い。人類は『錬金戦団』遙か昔の時代から皮肉にも同じ錬金  
術の産物である『核鉄<sup>カクガネ</sup>』を自らの闘争本能で武装化した『武装錬金  
で戦ってきた…。

そして、その戦いに進展があつたのはついこの間のこと…

ホムンクルスを率いる蝶野爆爵が倒されたのだ。

しかし、その際『ヴィクター』と呼ばれるイレギュラーの戦士が復  
活。彼の他の生物の生命力を吸収する力や高い戦闘能力に世界の危  
機に陥るがヴィクター自身、力を制御しきれていなかったという事  
実が発覚すると度重なる戦闘を経て和解、そして彼を人間に戻すこ  
とに成功。

この際、『錬金戦団』の腐敗が明かされた。

これを機会に『核鉄』とその研究が凍結された訳だが…

「それに従わない奴がいた…という訳ね…。」

「その通りです…。」

いざ止めると言われても『闘う側』からしてみれば良いかもしれな  
いが『研究する側』からしてみればどうだろう？少なくとも全員「  
わかりましたやめます」などとは言わないだろう…。

結局、これが内輪揉めに発展しある科学者が強行手段を取った…。

それは…

『核鉄の強奪』

その研究者はあまりの不满に核鉄を無断で持ち出したのである…。

総数：26個

急遽、大事になる前に確保しようと調査が開始されその研究者がこの『風都』にいと断定された。

そして、派遣されたのがカズキらであったのだ。

「へえ〜似てるわね…『錬金の戦士』と『仮面ライダー』って…」

翔子は思った…。ホムンクルスと同じ錬金術の力で闘う『錬金の戦士』。ドーパントと同じ『ガイアメモリ』の力で倒す『仮面ライダー』…。皮肉じみたモノを感じる…。

「大体そちらの事情は把握できた…。出来ればもうひとつお願いがあるんだが…」

「『武装錬金』を見せてくれないかい？」

「「へ？」」

予想外の質問をぶつけるフィリップ。彼の目は純粋な子供のように輝いている…。

「ちよつとフィリップ！」

「いいじゃないか。僕らの『W』も見せたじゃないか。」

「「W？」」

「ああ…そう言えば言っただけじゃなかったわね。風都の仮面ライダーは1人じゃないわよ。（まあ、Wも2人で1人だけどね。）」

「「ええ！？」」

これには驚くカズキと斗貴子。



そんなこんなで数分後…

とうとうカズキと斗貴子はフィリップの押しに負け、今は事務所の屋上にいる…。ここならば通りほど人目につくことはない。

（どうしてもやらなければダメなのだろうか…。）

乗り気0の斗貴子。

ワクワク…

テンションMax1000のフィリップとカズキ…

（やれやれ…）

それを呆れた顔で見る翔子。

「それじゃ…いくよー!」

カズキの合図と共に武装錬金を展開する。

「武装錬金!!」

カズキには柄からオレンジ色の帯が伸びた突撃槍『サンライト・ハート+』が握られ、斗貴子には脚のパーツを中心に幾つもの細長いアームが伸び、その先端には刃が装着される。これこそが彼女の武装錬金『バルキリースカート』だ。

「うおおおおおおおおおお!! 実に興味深い!!」

興奮し、テンションMaxを通り越しもはや『エクストオリイイイイイイイム!!』な状態になるフィリップ。

バルキリースカートが刺さるのを気にせず接近するフィリップ。斗貴子も当たらないようにアームを動かすが何分フィリップの動きが速すぎたため何本か当たってしまった。

「ふふ…私も変身しようかしら…。フィリップ!」

翔子も何故か血が騒いでしまい『Wドライバー』を腰に巻き付ける。すると、フィリップにも同様に『Wドライバー』が出現する。

「了解。」

『サイクロン』！！

『ジョーカー』！！

「「変身！！」」

翔子、フィリップ、それぞれのメモリをWドライバーに挿入。フィリップのメモリは翔子のWドライバーの右側のスロットに転送され、翔子は自分のメモリを左側のスロットへ押し込む。

『サイクロン・ジョーカー』！！

スロットを両サイドへ弾くと木枯らしが発生。翔子の体に細かい欠片が纏まっていき鎧を形成。同時にフィリップは力無く倒れる。

「『さあ、お前の罪を数えろ！！』」

右手を前に出しお決まりの台詞とポーズをとると再び仮面ライダーWサイクロンジョーカーが降臨した。

「（ピンポーン！）」

カズキが何かを閃いたようだ。

「斗貴子さん俺たちも決めポーズやろう！」

「え？」

戸惑う斗貴子を置いてカズキはサンライト・ハート+を振り回すと  
まるで歌舞伎のようにかまえる。

「全力全開!!」

「『え?』」

Wは一瞬固まった。

「あれ?俺何か不味いことしました?」

「いや…知り合いに同じ台詞を言った奴が…」

Wは同じ台詞を言った友人を思い出す。

「そうなんですか…じゃあ次斗貴子さん!」

「え!?わ、私!?!」

斗貴子も仕方なく構え…

「ハラワタをぶちまける!」

「『…』」

と決め台詞を言ってみたもののWには受けが良くなかったのか硬直してしまっ…。

そんな阿呆な事をしていると…

「た、大変です!!」

1人の女性が慌てた様子でやってくる。髪は栗色で瞳は蒼い。

「どうしたのシュテル？」

「レ、レヴィと王様が!!」

Wの正体・それぞれの事情 後編（後書き）

「……へーくよん!」

「……?」どうしたのなの?風邪?

「……?」にゃはは……誰か噂してるかも……」

怒れるS・星光と雷刃と闇の王（前書き）

四季「見る人みればタイトルで誰出るか解る。」

キルバット『女子！！女子！！女子！！女子！！』

## 怒れるS・星光と雷刃と闇の王

カフェ『スプリング』…

ゴゴゴゴ…

ガクガクガクガク…

今ここには4人の人物がいた…。

文字通り鬼の形相で後ろでダグバビツクリのオーラを出している四季。

それに怯えるシアンに近い青い髪をしたツインテールの女性…。

その隣にはふてぶてしい態度をとっているがかなり焦っているのがバレバレのボブの女性。

その様子を困った様子で見るオーナー、治。



事の始まりは数十分前…

「ま、こんな所か。」

怪人三体との戦闘と一通り風都の探検が終わりカフェ『スプリング』の前までやってきた四季。

「お！繁盛してるね。」

スプリングは店の中が大きな窓から見える。オーナー、治は忙しそうに行ったり来たりしている…。

「さて、俺も手伝う…んん？」

店に向かおうとする四季の目に二人の女性が目に留まる。二人はメニューの中でもちよっと奮発しないと食べれない『アルティメットパフェセット』を食べていた…。

そして、完食しツインテールの女性のほうが財布を見ると徐々に顔が青ざめていく…。

ボブの女性もツインテールの女性を罵倒するような仕草をすると二人は話し合いを始めた…。

「これは…まさか…」

四季の思惑が的中したように二人は姿勢を低くし、カウンターを抜ける。オーナーは余りの忙しさに気づく様子も無い。

ガラン、ガラン…

そして二人はドアから出る。

「ふはは！…これが『節約』という奴だ！…」

「何か違うと思うけどすごいよ王様！…」

高笑いするボブの女性をツインテールの女性が褒め称える。そして、二人は立ち去ろうとしたが…

「お客様…それは『犯罪』ですよ…」。

「「ひっ！？」」

二人は後ろから忍びよっていた四季に気がついていなかった…。

「代金まだ払ってもらってないんですが…」

「「ハハ…ナンノコトデシヨウ…」」

「じゃあその口元のクリームは何だ？」

「「あつ」「

二人にはアルティメットパフェに使われていたクリームがついていた…。もはやこれは動かぬ証拠となり…

「さて…O H A N A S H I しましょうか…」

「「い、イヤアアアアアアアアアアアアアアアア！」「」

二人は確保された。この時、四季の後ろにアルティメットクウガ（ブラックアイ）らしきモノが見えたという…。

そして現在に至る。

他の客は余りの居心地の悪さに代金を払ってとっとと退散している。

「えぐつ…許して…」

「ああん!？」

「ひいひいひいひい！！！」

ツインテールの女性は涙目＋上目遣いで許しを乞うが怒れる四季にはそんなモノは通用しない。鬼の睨みで返り討ちにする…。

「この『塵芥』ごときが…！！！」

「あ？」

「いえ…何でもありません…。」

ボブの女性も四季には歯が立たない…。悔しそうに罵るのが精一杯だ。

「さうで、レヴィとロードつつたか？何で食い逃げなんかしたのかな？」

「つつ…」

四季は笑顔になった…。目を除いて…。

（あつつ……どうしよう…。このままだと『絶望が僕たちのゴール』だよ…。）

（くそ…シュテル早く助けに来い！！！）

ガラン、ガラン…

「「!!」」

二人がそれぞれの思いが届いたのかドアを開けたのは…

「ハア―イ」

ゾクッ

プリズムビツカーを装備したさぞお怒りの翔子だった…。  
二人は震え上がり抱き合う。

「あんたら…」

『サイクロンマキシマムドライブ』!!

「金持っていないなら…」

『ビートマキシマムドライブ』!!

「店に入るな…」

『ルナマキシマムドライブ』！！

「あれほど…」

『ジヨーカーマキシマムドライブ』！！

「言ったでしょうがああ！！」

『プリズムマキシマムドライブ』！！

「「「「めんなアアアアアアアアアアい！！」」」

数秒後…

「「「…」

プスッ

「これで少しは懲りたかしら。」

翔子のプリズムビツカーに五本のメモリをスロットしたマキシマムを食らい、黒焦げになる二人…。流石の四季も哀れみを覚える…。

一方…

「ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！」

ゴチン、ゴチン、ゴチン、ゴチン、ゴチン、ゴチン、ゴチン…

後から追いついたシユテルと呼ばれた女性はオーナーに頭を打ち付けながら土下座していた…。オーナーも顔をあげるように言っているが止まらない…。

そこへ…

ガラン、ガラン

「それくらいにしてやったらどうだ？」

「！隼人！！」

青いジャケットに青みがあった髪の長身の男とさらに他のメンバーも入ってくる。

(翔子さん…容赦無い…斗貴子さんみたいだ…)

「カズキ、今凄い失礼なこと考えたろ。」

「うえい！？（何故わかった！？）」

「まあ、ここは一つ穏便に…。」

それはカズキと斗貴子と何故か先程とは服装が違い白装束のブラボ  
ーであった…。

「これが『シャイニングパフェ』か。非常に興味深い…！！」

「！！フィリップ、いつの間に!？」

そして、いつからいたのかフィリップが『シャイニングパフェ』を  
頬張っている。

「！これは…。苺とクリームと強調しつつも互いに潰さない。さら  
にコーンがさらに違った味わいを魅せる…。まるで『タトバコンボ  
』や『番組放送禁止』のようだ。これは『アルティメットパフェ』  
のビターチョコと違ってまた良い…。」

そんな美食レポートをするフィリップの横にはもう一つパフェの器  
が…

「斗貴子さん、『番組放送禁止』てなに？」

「バルキリースカート…！」



「ギャアア!!」

カズキはただ純粹に質問をしただけが『番組放送禁止』と伏せられる内容だ。それを斗貴子に質問するのは不味かつただろう。

「ブラボーさん、隼人。あんたらどうしてここに？」

翔子はフィリップにタトバ・ダイナミック・3をかけながら隼人に質問する。

「まあ、それは…」

「色々あつて…」

そう言つて二人は先程の出来事について語りだした…。

約一時間前…

「さて…どうしたものか…」

ブラボーはカズキらを一旦鳴海探偵事務所に預け、風都の街を散策していた…。昔、とある任務の時間き込みしているのがブラブラしている…と思われて今のようになり『ブラボー』と呼ばれるようになった事を思い出す…。その任務の事はあまり思い出したくは無いが…。

(まさにこれが『ブラブラ』という奴だな…。)

そんな事を思っていると…

「キヤアアアアアア！！」

「！」

突如、悲鳴が響きわたる。ブラボーは急いで駆けつけてみると…

「なっ！？」

彼の目に飛び込んできたのは…

「俺？」

そこには白装束で長い襟と白いカウボーイの帽子で顔を隠した大男がいたのだから…。いや、ブラボーが驚いたのはそこでは無い。その姿は自らの武装錬金『シルバースキン』と余りにも…いや、瓜二

つだった…。

「何だかよく解らんが…『武装錬金』!!」

ブラボーはまず自分の偽物を止める事を優先し、自らの武装錬金、『シルバースキン』を発動させる。すると、ブラボーは相手と同じ白装束の格好に白いカウボーイの帽子を被る。

「とっつ…!!」

間髪いれず自らの偽物に殴りかかるブラボー。偽物も少したじろくが大したダメージは無さそうだ。

「貴様！何者だ!!」

ブラボーが構えながら問うが偽物は構わずブラボーに攻撃を仕掛ける…。

「くっ…仕方ない。」

偽物の攻撃を掻い潜ると腹部にラッシュを叩きこむブラボー。偽物はぶっ飛ばされ肩膝をつく…。しかし…

「防御力までコピーしてるとは…」

偽物は何事もなかったかのように立ち上がる。元々ブラボーの『シルバースキン』は防御に特化している…。つまり…

「半端な攻撃は通じない…！」

『その通り』

「！」

突如、偽物が喋りだす…。重苦しい嫌な声だ。

『しかし、全部同じだと思っでは困るよ…そうだよな？ステインガ  
ー君？』

『うんうん、そうだね？コーウェン君？』

今度は偽物から新しい声が聞こえる。腹話術だろうか…？

『思い知れ！！我々の力を…！！』

「！」

二つの声がダブった瞬間、偽物の両腕から黒い沢山の目玉がついた  
触手が放たれる。その先には牙のような刃がキラリと光る。  
これはブラボーは危険と判断。素早く飛び退き回避する。

『中々やるね。そうだよな？コーウェン君？』

『そうだね？ステインガー君？』

『だが、これで終わりだ…！！』

偽物は左手をブラボーに向けるとそれは爬虫類の頭らしきモノに変形。それは、ブラボーに向かって汚物を吐き飛ばす。

「！なんだ！？」

間一髪で避けるブラボーであったが汚物は地面に当たる…

「！」

しかし、それは膨らんでいき…

ドオオオオン

「ぐあー！」

爆発を起こした。さらに生臭い悪臭が漂う。

「ちっ…」

ブラボーが体勢を建て直した時には偽物の姿は無かった…。

「奴は…どっへ…」

辺りを見渡しているよ…

「見つけたぞ…！」

「！」

そこに隼人が駆けつけた。

「随分、好き放題やってくれたようだな…」

『アクセル』！！

隼人はバイクのハンドルを模したドライバー『アクセルドライバー』を取り出すと腰に巻きつける。そして、赤い『A』とついたガイアメモリ『アクセルメモリ』を取り出しスイッチを押す。

「ちょっと待っ…」

「変…身…！」

『アクセセル』！！

ブラボーの静止も聞かず隼人はアクセセルメモリをアクセセルドライバ  
ーに挿入。ハンドルを回すと車のメーターの表紙らしき円が展開さ  
れると彼に深紅の装甲が形成。顔は青いバイザーに『A』をもした  
銀のラインが付き背中にはバイクのタイヤらしきモノを背負う。こ  
うして隼人は『仮面ライダーアクセセル』に変身を遂げた…。

「さあ、振り切るぞ…！」

「やるしかないのか…！」

怒れるS・星光と雷刃と闇の王（後書き）

次回、

ブラボーvsアクセル



仕組まれたB・加速VS防人(前書き)

四季「今回は出番なし。」

キルバット『そんな？』

「……」

## 仕組まれたB・加速vs防人

ガン！！ガン！！ガン！！ガン！！

アクセルは得意の機動性の高い戦い方を利用しブラボーと肉弾戦を繰り広げていた…。

現状はアクセルが有利でありブラボーは必死にアクセルの繰り出すパンチやキックを受け流している。

「どうした？この程度か？」

(くっ！)

ブラボーとて反撃の機会は何っといれど明らかに自分は偽物と勘違いされているのは間違いないし、何より迂闊に手をだせばこちらの懐を叩かれ兼ねない。

ガン！！ガン！！ガン！！ガン！！

「待ってくれ！！話を…」

「なら『メモリブレイク』してからだ！」

ガン！！ガン！！ガン！！ガン！！

「くっ！」

苦し紛れに説得を試みるブラボーだがアクセルは拒否。アクセルのラッシュは止まらない。

(なら……)

「仕方ない!!」

ドコッ

「何!？」

ブラボーはアクセルの僅かな隙をつき重いパンチを放つ。もろに受けたアクセルは転倒こそしないものの距離を片手をつく。

「中々やるな…なら…」

アクセルは右手にエンジンブレードを握り再びブラボーへ襲いかかる。

『エンジン・エレクトリック』!!

「!？」

アクセルはエンジンブレードの機械部分を折り展開すると『E』と書かれた『エンジンメモリ』をスロットし元に戻す。すると刀身から雷撃が放たれる。

「はあっ!!」

『エンジン・スチーム』!!

「ちっ!?!」

今度は刀身からスチームが放たれブラボーを襲い彼の動きを怯ませる。

「これで終わりだ。」

『アクセルマキシマムドライブ』!!

アクセルはその隙にアクセルドライバーのハンドルをひねり出力をあげる。

「仕方がない!!」

ブラボーも距離をとり構えをとる。

「はあ!!」

「とっ!!」

そして、アクセルの赤いライダーキックとブラボーの青いライダーキックがぶつかり合う。

シュタツ

着地する両者…。

「…」

アクセルの肩から火花が散り…

「…」

ブラボーの肩からはシルバースキンが焼け焦げていた…。

「やるな…」

「そちらこそ…」

互いに実力を認め合うアクセルとブラボー。  
そして、再び戦うべく構えたその時…

「楽しそうですね……」

「「……！」」

突如、二人の間に銀色のオーロラが通り抜け1人の少女が割って入る。

外見は17という所だろうか…紫と青のオッドアイで服装はかつては白かったようだが今は黒くくすんでボロボロで何やら金色やら銀色のチェーンが垂れ下がっている。

「貴様…何者だ！」

アクセルはただの少女では無いと判断し、警戒する。

「私の名前は『アインハルト・ストラトス』、またの名を『霸王』。そして……」

「仮面ライダーサビー…」

少女が名乗り終わると一匹の機械仕掛けの蜂『サビーゼクター』が飛来する。

「変身…。」

『henshin』

サビーゼクターはアインハルトの右腕のブレスレットに装着されるとアインハルトの体にヒビイロカネの装甲が形成される…。

『change W A S P』

そして彼女はスズメバチを模したかのようなライダー『仮面ライダー』

「サビー・ライダーフォーム」に変身した…。

「カードじゃない!? フィリップの言っていたライダーじゃないのか!」

「『紅蓮の破壊者』の事ですか? 彼も私が倒します…。でもまず…」

「あなた方には消してもらいます。クロックアップ。」

『clock up』

サビーはベルトの右側のスイッチを叩くと姿が消える。

「どこ…グフ!?!」

「なっ…がつ!?!」

次の瞬間、アクセルとブラボーは中を舞っていた…。さらに、追い討ちをかけるように衝撃が襲う。

ドカ、ドカ、ドカ、ドカ…



『clock over』

「ぐはあ!？」

「がはあ!！」

電子音声と共に二人の間に降り立つサビー。同時に二人も地面に叩きつけられる。この時、ブラボーはある決心をした…。

「やあ…仮面ライダーさんよ…ここは一つ共同戦線といかないかい？」

「む…?」

ブラボーの提案に暫く考えるアクセル。その間にもサビーはジリジリと近づいてくる…。

「仕方ない…今は貴様を信じる!！」

ボロボロになりながらも立ち上がるアクセルとブラボー…。アクセルはエンジンブレードを構え、ブラボーはそれに並び立つ。

「今さら何しようと思駄です。ライダーステイング。」

『rider stinging』

「霸王・地獄拳!！」

サビーゼクターに電撃を纏わせながら近づくとサビー。

『エンジンマキシマムドライブ!!』

アクセルはエンジンブレードにまたエンジンメモリをスロットし必殺技『エーススラッシャー』の構えをとる。

「はあああああああ!!」

サビーとアクセルの必殺技がぶつかりあう。しかし、徐々にエンジンブレードの赤い閃光が押されていく…。

「私の…勝ちです。」

「どっかな?」

「!?!」

押されるアクセルの言葉に戸惑うサビー。その瞬間、アクセルの後ろからブラボーが飛び上がり…

「レディを殴るのは好きじゃないが…」

バキッ!!

思いきりサビーを殴りとばした…。

威力も先程のアクセルのそれより上でサビーは壁にめり込んでいる…。

「がはあ!」

これにはサビーは呻き声をあげる。

『必殺…ブラボー・ライダーパンチ…』

ちなみにブラボーは決めポーズを決めてたりする…。

「くっ…まだ…」

まだ立ち上がるうとするザビーだが…

「トマホオオオクランサー!!」

ガン!!

ザビーの首スレスレに斧が飛来し突き刺さる。それに続き沢山の斧が飛来し彼女を拘束するように壁に刺さる。

「ふん…ガキが…」

斧が飛んできた方向には深紅のライダーがいた…。薄汚れた赤いマントをなびかせ装甲のデザインは騎士のそれを思わせるが至るところが痛んでいる。そして、何より目を惹くのは金色の十字架のような展開したパーツの中に輝く緑色の複眼…。それは小さく禍々しい瞳があった…。

「運が悪かったな。この『流 竜馬』様を通りすぎた時にドンパチやっつてるとはよ…。」

深紅のライダーはゆっくりとザビーに歩みよる…。それはまさに悪魔が近づいてくるようだ…。

「くっ!!」



最早、立ち上がる事さえままならないザビー。しかし…

「オラ！」

ガンー！！

「ぐぶうー！」

深紅のライダーは容赦なく蹴りを放つ。そして、とうとうザビーの変身は解除されアインハルトの姿に戻ってしまい地面を転がる。

「…」

それでも深紅のライダーは止まらない。ボロボロの彼女の首を片手で締め上げる。

「おい！やめろ！」

「あ？」

ブラボーは止めようと叫ぶが深紅のライダーは機嫌の悪そうに声をだす。

「おいおい、コイツはお前らを襲ったんだぜ？何故情けをかける？それに勝ったのは俺だ。コイツの命は文字通り俺の手にある。」

「貴方に慈悲は無いのか！」

「心も身体も脆い奴にかける慈悲は無ええー！！」

ブラボーの言葉に耳を貸さず彼女の首をへし折ろうとしたその時…

「今、俺の妹を笑ったな？」

バシッ

突如、深紅のライダーの手が弾かれアインハルトが解放され一瞬でその姿が消え深紅のライダーも跳ね飛ばされる。

『clock over』

そして、現れたライダーが2人。バツタを模したライダー『仮面ライダーパンチホッパー』と『仮面ライダーキックホッパー』属に言う地獄兄弟だ。

「に…兄さん…」

「無理して喋るな妹よ。」

今、アインハルトはキックホッパーの腕に抱かれている…。どうやら彼女も彼らの兄弟の妹…のようだ…。

「ふん…また楽しめそうなのが来たぜ…。」

深紅のライダーは立ち上がり仮面の下で凶悪な笑みを浮かべる。そう、戦いを楽しんでいるのだ…。

「おい！その白いの（ブラボー）！四季に伝えろ！！ちょっとこいつらと遊んでくるから美味しい飯用意して待ってるてな！！」



この後、何とかアクセルとブラボーは逃げ切りカフェ『スプリング』に駆けつけたのである…。

仕組まれたB・加速vs防人（後書き）

キルバット『アインちゃんどうしたあああああああ！？』

四季「う、嘘だろ…こっちのアインハルトは地獄兄弟なんだよ！？」

フィリップ「検索したよ！作者がバースさんの活動報告を見て思いつきでやったらしい。」

四季・キルバット『「思いつきかよ！？」』

**Fの能力・検索する真実（前書き）**

四季「今回は戦闘なし。」

キルバット「平和が何より。」

## Fの能力・検索する真実

カフェ『スプリング』…

「と、まあ、そんな所だ。」

一連の流れを説明した隼人とブラボー。

(深紅のライダー…話を聞く限り竜馬の『ゲットイクサ』だろう…  
しかし、何故、地獄兄弟が…?)

物思いにふける四季…。

彼も地獄兄弟とは拳を交えたこともある。しかし、ザビーの少女については知らないし何よりアクセルとブラボーを襲った訳が解らない。

「あの〜僕達帰っていい？」

ここで暫くダウンしていたツインテールの女性が話した。

「ダメだ『キーード・クラッシャー』!!」

「僕は『雷刃の襲撃者』レヴィイ・ザ・スラッシャーていう名前だよ!!」

『そつだ四季!!レディの名前はちゃんと呼ぶんだ!』

いつの間にならキルバットがレヴィイの豊満な胸に抱かれて鼻の下(?)を伸ばしきっている…。

「ほう…キルバット…お前はそつち側か？」

『背に腹は変えられんならぬ、胸には変えられんならぬ!!ムハハハ!!』

しかし、この決断が彼の命運を分けた…。

『エンジン・スチーム』!!

「『ギヤアあああああ!?!』」

隣にいたボブの女性がエンジンブレードのスチームで二人をグリルした…。  
その時、彼女は少々貧相な胸に手を当て目に涙を浮かべていたという…。

「そんな貴方にバストアップゲッツ!!」

そんな事をしてるとどこから沸いてきたのか黒いタキシード姿の黒いソフト帽を被った男が現れる…。

「わっ!?!何この人!?!」

この男の登場には四季、キルバット、オーナー以外全員驚く。

「ええ…私は…」

「コイツの名前は商あきない 喜助。太刀の悪い強欲変態商人だ。」

四季が男を簡単に説明する。その途端、全員男と距離をとったのは言うまでも無い。

「ノンノン…私は清く美しい『超時空商協会実働専務』兼、『リア充撲滅ライダー委員会会長』兼、『ロリコンライダー協会会長』の商 喜助でございます。以後、お見知りおきを。」

『因みにコイツの販売するモノは殆どボッタクリだ。』

全く…と言うよりさらに悪化した自己紹介をする喜助。キルバットがさらに重要な項目を追加する。そして、カズキに目をつけると…

「ハア〜イ！そのボーイ！！」

「え、俺？」

「本来ならばっ飛ばして殺りたい所だけでも営業時間だからしょうがないですね。」

そう言うと懐から喜助はハートの形をした栓のピンクの小瓶を取り出す。

「こちらウチの新商品なんですがね、この『ムラムラバースト君』を使えば貴方の彼女をメラメラしてムラムラして『うっひょー！！』てなって『や・ら・な・い・か・？』てなって『ハッスル』して童貞卒業間違いなしです。どうですか〜？今ならお得プライスです。」

「えっ…ええと…」

「「「やめんか！！この悪徳商人！！」」」

とうとう四季、翔子、斗貴子がライダーキックを繰り出し成敗した  
…。

「まあ…手掛かりも得られたことだし…」

翔子はボロボロのフィリップを叩き起こす。

「フィリップ、検索を始めるわよ！」

「翔子まってくれ！！この店には『サバイブピラフ』という奴が…」

「プトティラ・アルティメット・スリー逝ってみる？」

「それでは検索を始めよう…」

半ば脅す形の翔子…。

「あの…何をしようとしているのですか？」

ブラボーが翔子に質問する。

「ああ、コイツの頭の中は『地球の本棚』と『次元の本棚』、それと『夜天の本棚』って言うのになんて、今してるのは『地球の本棚』からキーワードで情報を絞りだすことね。」



「そう言うこと。」

フィリップは目を瞑ると彼の意識は真っ白で本棚が延々と並ぶ空間にあった…。

「フィリップ、キーワードは2つ。『ステインガー』『コーウエン』」

「了解。キーワード『ステインガー』『コーウエン』。」

すると空間の中の本棚が動き数が減っていく…。

「まだ残っているね。」

「なら、キーワード追加。『核鉄<sup>かくがね</sup>』、『ガイアメモリ』。」

翔子がキーワードを追加するとさらに本棚が消え一冊の本がフィリップの手元にくる。

「T2コア計画？」

しかし、その本は嚴重に鎖で巻かれ閲覧することは出来ない。辛うじてフィリップは背表紙を読めたが…

「ダメだ翔子！閲覧できない！！」

「それは困ったわね…」

「なら、キーワードを替えてみてはどうでしょう？例えば『協力者』とか…」

「成る程…キーワード変更『協力者』！」

ブラボアの機転により何冊かの閲覧可能な本が残る。

「もう少し絞ってみるか…キーワード『風都』。」

すると一冊の本が手元にくる。

「ビンゴ…『早乙女…賢』？」

フィリップは早速、本を開き閲覧を始め、暫くすると意識を現実に戻す。

「皆…ステインガーとコーウェンとその協力者について分かった。」

そして、フィリップは閲覧した内容について語りだす…。

早乙女 賢

ステインガー、コーウェンと同期であり更には違法研究に彼らと共に携わっている。一時は妻子ができたことに身を引くが妻が亡くなると同時に再び違法研究を再開する。

娘の名前は『ミチル』で現在、大学生だが突如、行方不明になる。

「彼は現在、風都理系大学で教授をしているようだ…。恐らく違法研究の事が明るみに出ていないからだろう…。上手くいけばステインガーとコーウェンを確保できる可能性が高い…」

「よし、なら早速…」

「待ちまかたまえ…君は先程の事を忘れたのかい？」

はやまるカズキを静止するフィリップ

。

「今、迂闊に動けば返り討ち、最悪の場合取り逃がす場合もある。それに君らを待ち伏せしたたした件でも敵がドーパントと何らかの關係がある可能性が高い…。」

そこで、直接、大学に乗り込むグループと外で警戒組に別れることになった。

直接、乗り込むのは翔子と隼人。翔子は聞き込み、隼人はそのまま早乙女を訪ねる。

そして、警戒組にはカズキ、ブラボー、斗貴子、そして、四季が回るようになった。翔子は例のアホ2人の事もあるので遠慮したが、「どうせなら多いほうが良い」と言って参加したのだ。これは翔子からも喜んだが斗貴子は複雑そうな表情をしていた…。

そして、作戦の実行は今日の戦闘のこともあるので翌日に持ち越された…。

**Fの能力・検索する真実（後書き）**

今回はオリジナルドーパントが登場。

カフェ『スプリング』メニュー

・サバイブピラフ

火を通しパサツとした黄金色のご飯に絶妙にマッチする特製ピラフ。さらに、塩コショウが食欲をそそる。

四季も挑戦するも本人曰く『パサツ』が表現出来ないのだから！

疑念のT・黄昏と激突 前編（前書き）

ロード「今回はもう散々だ！」

レヴィ「つかれたよ〜！」

今回は四季の過去に少し触れます。

## 疑念のT・黄昏と激突 前編

「はあ…」

時は夕刻…

斗貴子は鳴海探偵事務所の窓に寄りかかり外を眺めていた…。夕日を背にした巨大な風車『風都タワー』が非常に絵になる。

カズキは奥で何やらフィリップと話しているようだ…。余計な事を話さなければ良いが…

因みになぜ2人が事務所にいるか、と言うと彼らは元々宿を探す予定だったが翔子は『纏まっていたほうが行動しやすい』と言われブラボーは遠慮したものの四季が例の3人（シュテル、レヴィ、ロード）を連行したためちようと寝床が空いているとのお世話になることになったのだ…。

「はあ…」

だが、彼女は今は溜め息ばかり…

夢の悪魔と酷似した『仮面ライダーディケイド・ブラット』。

悪夢の続き…

メモリの戦士と怪人…

スティングァー、コーウェンの狙い…

T2コア計画…

( 解らないことばかりだ… )

T2コア計画は恐らく『核鉄』を使った悪事のことだろう…。『核』  
という字からそれは判断できるが『T2』は何を意味するのか…  
翔子に訊ねると『心当たりがある』とのことで彼女は自らの師なる  
人物と連絡をとると言っていた…。

( 今は…考えてもどうしようも無いか… )

斗貴子はそう思つとまた夕日をただ、ぼつと眺めていた…。

カフェ 『スプリング』…

「お客様〜！注文は何になさいますか〜？」



「塵か…お客様、ご、ご注文を…」

「御待たせいたしました。『ハードボイルド・コーヒー』です。」

今、食い逃げ2人とシュテルは働いていた…。

「身体で払えとは言われたけど…」

「くっ…これはこれで屈辱なり…」

数時間前…

「さーて、お前らはどうしてやろうか…。」

あわよくば逃げれると思っていた2人だが四季はそこまで甘くは無かった。

『四季〜！こつこつのは身体で払って貰うのが一番だぞ〜！』

「「ええ！？」」

「どつぞ煮るなり焼くなり…」

「「そんな！！」」

キルバットがとんでもない発言をし挙げ句の果てに翔子にまで見捨てられた食い逃げ2人。

「それじゃ…遠慮なく…」

「お、王様…」

「れ、レヴィ…」

「ま、待って下さい!!」

四季の前にシュテルが立ち塞がる。

「シュテル!!」

「おお…!!シュテル、私がお前が助けしてくれると信じていたぞ!!」

希望の光をみた2人。

「確かにこの2人は『バカ』『アホ』『残念』の最悪コンビですが、  
これでも私の大事な家族です。どうか2人に手を出すなら私の身で  
ご勘弁を…。」

「「シユテル、そんな事思ってたの!?!」」

「当前だろ…!?!」と思った四季。

「なら…!?!」

「…!?!」

「「シユテルウウウウウウウウウウ!?!」」

シユテルが覚悟し目をつむった…

「ほい。」

四季は黒い使い古されたエプロンを出した。

「「「え?」」」

困惑する3人。

「きっちり、代金分は働いて貰うぜ。」

「「「…」」」

そして、現在3人は必死に働いているのである。しかも、皆それなりに美人なため噂を聞き付けた客で繁盛している。

「いや、あの髪短いシュテルって娘、中々良いね。このままウチで働いてもらいたいよ。」

「確かにオーナー、それは同感だ。だが食い逃げ2人、レヴィは良いが…あのロードって奴、表情固いな。」

オーナーと共に調理を担当する四季。オーナーはフライパンで野菜を炒め、四季は食材を切る。

それでも四季は食い逃げ2人への注意は怠らない。  
特にもうひとりの食い逃げ犯、『闇の王』ロード・ライアー・チェはかなり注意している。

午後6時…

「さて、今日はこれくらいで勘弁してやる。」

「「むぎゅ〜」「」

仕事も一段落ついたので食い逃げ2人を解放する四季。

「おのれ！このままでは済まさん！！」

ボブの髪を逆立てるロード。負け犬の遠吠えという奴だ。しかし…

「王様！！何をしているんですか！？まだ片付けが残ってます！！」

店からシュテルが出てくる。

「いや、良いよ。後、俺やるから。疲れたる？」

「いえいえ、仕事はきっちり最後までやる物。さあ、行きますよ！」

「や、やめ…シュテル、勘弁してくれえええ！！！！！！！！！！」

ロードは悲痛な叫びをあげながらシュテルにひきづられていった…。

「あの…これって僕もいった方が良いのかな？」

別に強制された訳ではないがレヴィもついていく。

約一時間後…

「ぶっ…」

「…（反応が無いただの屍のようだ）」「」

カフェ『スプリング』ではやり遂げた感Maxのシュテルと絶望にゴールしたレヴィとロードの姿があった…。

「いやいや、皆よく働いてくれたね。晩ご飯にしようか。」

オーナーは3人をテーブルに座らせるとオムライスを三人分持つてくる。

「わあーい、オムライスだ！！」

「おお…なんと卵の輝きがまぶしい…」

レヴィとロードは喜んで飛び付こうとする。

「あの…良いんですか？」

シュテルは遠慮しているようだ…。

「いや、遠慮しないでいいよお食べ。」

「そうですが…なら…」

「「頂きます！！」」

ガツガツ…

「あ！こらレヴィ、王様！！行儀が悪いです。」

早速がつつく2人を叱るシュテル。その姿は母のよう…



「四季!!！」

「四季さん!!！」

「四季!!！」

「塵芥!?!」

4人の声が響いたが四季はそのまま意識を手放した…。

カフェ『スプリング』二階、四季の部屋

突然、倒れた四季は今は自室のベッドに寝ている。  
その隣にはオーナーとシュテルが座っている…。キルバットも心配  
そうに飛び回っている。

「四季さん…どうされたんでしょう…?」

シュテルはオーナーに問う。

「多分…無くした記憶の断片に近づいたのかな…」

「え?」



「四季はね…私の子供では無いんだよ…」

時は12年前…

その日は雨だった…

そして、カフェ『スプリング』の前に1人の少年が倒れていた…。少年はちょうど買い出し帰りのオーナーに保護された…。

「お名前は？」

「…」

「お父さんとお母さんは？」

「…」

「どこから来たの？」

「…」

その少年に話を聞いてみても反応を示さない…まるで…

からっぽだった…

「これは参ったな。」

困ったオーナーはとりあえず温かいココアをだした…すると…

少年は笑顔になった…

そして、後少年は記憶喪失だと判明。録に喋らなかったのはそのためだった…。それに身元も解らないということでオーナーが引き取ることになった…。

引き取る当日

「…」

「お前…名前が無いんだってね？」

「…」

「良ければおじさんがつけても良いかな？」

「…？」

「そつだな…お前の名前は『四季』！西門 四季！！」

「…！！」

「四季折々の表情豊かで魅力のある人になるように。てね。」

「四季…」

「そつお前は四季…！！」

「四季…！！」

この時、少年の西門 四季の時間が動きだしたのである…。

「そんな過去が…」

四季の過去に驚くシユテル。

「昔はよくあつたんだよ。その度、あんなふうに頭痛に襲われて…  
恐らくあの子は拒絶してるのかもしれない…『過去を取り戻す』事  
を…」

「聞いたことがあります…記憶喪失の人が以前の記憶を取り戻すと無くした後の記憶を無くすと…」

四季の過去は解らないが記憶を失うとなれば相当の事だろう。それに今の記憶を失ってまで思い出したいモノではないだろう…。

「さあ、もうお休み。四季は私が見ておくから。」

オーナーは一旦3人を事務所に帰すことにした…。  
シュテルは不安そうにしていたが仕方なくレヴィ、ロードを引き連れ帰路についた…。

疑念のT・黄昏と激突 前編（後書き）

帰宅後：

翔子「お前らの寢床は無え！！」

シュテル・レヴィ・ロード

「「「ええ！？」「」」

疑念のT・黄昏と激突 後編（前書き）

四季「良いことがあねば悪いこともある。」

キルバット『ちよつとヤダなそれ。』

疑念のT・黄昏と激突 後編

『くっ………』

『諦める…お前らに未来は無い…』

「お、俺…?」

四季は知らぬ間に何処かの荒野に立っていた…。

目の前にはスカーフが黒く目付きの悪い仮面ライダーディケイド・ブラッド。

そして、赤い珠のついた杖に寄りかかって立ち上がる白い服の女性…。

『貴方に…私達の…未来は渡さない!!』

『俺の未来を奪ったお前らが未来を掴む資格は無い!!』

ディケイドBは黒い紅いラインの入った銃を取り出すとカードを装填する。

『RIRIKAL RIDE…』

『さあ!! 踊れ!!』

『FATE』

すると金髪の黒い服を着た女性が召喚される…。

『な…なのは？』

『フェイトちゃん！？』

フェイトと呼ばれた金髪の女性は白い女性と知り合いのようだ…。

『俺と同じ苦しみを味わいながら死んでいけ…』

『えっ？体が勝手に…？』

フェイトの体はその主の言うことを聞かず金色の刃の鎌を構えると白い女性に斬りかかる。

『や、やめて！？フェイトちゃん！』

『な、なのは逃げて…！』

ザシユ

しかし、フェイトの鎌は女性を捉え真っ赤に染まる。  
「！」



『!』

フェイトは鎌を刺した状態のまま硬直する。しかし、女性は血に濡れた手でフェイトの頬を撫でる……。

『フェイトちゃん…これからも…ずっと…友達だよ…』

『FINAL ATTACK RIDE DECADE BLOOD』

ドゴオオン

「!」

2人は組み合いながら紅い閃光に吞まれ消え失せた。

「てんめええええ!!」

四季もこれには怒り狂いディケイドBへ変身をするが…

「!?!」

気がつくとその黒いスカーフのディケイドBの姿は無く、なぜか自分の手にはガンモードに変形したライドブツカーが握られている…。

『お前が殺した…』

『お前が壊した…』

『お前が破壊した…』

何処からか声が響き辺りから異形が立ち上がる…。

「ち、違う!!俺じゃない!!俺じゃない!!!」

「!?!」

四季は目を覚ますとそこが朝で自室であることを知る…。  
悪夢のためか汗で服は濡れている。

「そついや…俺…昨日倒れ…!？」

ここで四季は自分の身体に触れる生暖かいモノに気づいた…それは…

「すー…すー…」

「!？」

自らのベッドに突っ伏し眠っているシュテルであった…。しかも、朝でお目覚めの『彼の息子』の位置に近い位置に顔がある…。

( やばい…迂闊に動けないぜ!?)

実は四季、一応それなりの歳なのだが今まで女性に縁が無かった…。  
実際、彼は旅で並行世界を転々としているので出逢いがあっても発  
展することなど無かった…。

そんな彼がこんな状況であり、彼の息子は天を指しているのは必然  
的だろう…。

( どうつする?どうつする?俺!?)

ライドブツカーからカードをとりだしどこぞのクウガの中の人ネタ  
に走る四季…。相当焦っている。

因みに選択肢は…

・放置

・起こす

・寝る

・襲う 「却下だ!!」

「仕方ない起こすか。」

『起こす』の選択肢をチヨイスする四季。ここでキルバットが『いっつけええ!!童貞卒業!!』と書かれたカンペを出してきたがもれなく枕で叩き落とした。

「おい、起きろ。」

「起きてます。」

「!?!」

何と彼女はとつくに目を覚ましていた。

「い、いつから起きてた？」

「貴方がカードをいじっていた時です。」

「なぜ寝たふりをしていた？」

「『襲う』を選択したらボコッて警察につきだして慰謝料をたんまり請求できると思ひまして…」

(こ、コイツ…)

この女…油断出来ない。四季はそう思った。

「さて、冗談はさておき気分はいかがですか？」

「ああ、問題無い…」

「なら何故屈んでいるのですか？」

「男の事情だ。」

四季は女性に流石にモッコリとした股間を見せる訳にはいかず『くの字に身体を曲げている。』

(ん？そう言えば…)

四季はシュテルに顔を近づける…。

「な、何でしょう?」

ジー…

かなり顔を近い位置に置く四季…。

(コイツ…似ている?)

彼は夢の中の白い女性を思いだした。彼女はとシュテルと違いワインテイルだったが髪を短くするとかなりシュテルと似ている…。

「あ…あの…/」

「あ!!すまねえ…」

余りにも自らの顔を見つめられ顔を赤らめ目をそらすシュテル…。  
四季も思わず謝ってしまう。

「確か…あなた…えっと…」

「シュテル・ザ・テストラクター星光の殲滅者です。シュテルとお呼び下さい。」

「んじゃシュテル、お前何でここに…」

「あの…それには深い訳が…」

昨晚…

鳴海探偵事務所前…

「お前らの寢床は無え！」

「『ええ！？』」

カズキらを泊めるとのことです。シュテル、レヴィ、ロードを締め出した翔子。その脇でフィリップがしくしくと泣いており事務所の奥からは『助けてくれ！』と隼人の悲鳴が聞こえる。

（仕方ない…）

ここで三人＋アルファはカフェ『スプリング』にUターン。そしてシュテルが再度オーナーに土下座。

オーナーはやむなくシュテルが四季に一晩付き添うことを条件に彼女らを泊めたのだ。

（オーナーマジ、良い人）

四季は自分がオーナーに拾われたことを心の底から感謝した。そこへ…

「ヤッホー！朝ですよー！！」

ハイテンションのレヴィが入ってきて一瞬固まると…

「失礼しました…」

ドアを閉めた…

「王様！！シュテルが！！シュテルが！！」

「ちょ！？レヴィ違うわよー！！」

シュテルがその後を追う。

「ハッハッハッハッハッ！！」

四季はそれを笑いながら見ていた。

時は過ぎ…

午前10時24分



風都大学近く…

そこにはカズキ、斗貴子、ブラボーと何故かイキイキしている翔子と精根まで吸い付くされたような隼人とすでに全快の四季がいた。

「隼人だっけか？大丈夫か？」

「一応…問題ない…」

四季も気遣って声をかけるがマトモな反応は帰ってこない…。しかし、翔子は構わず話だす。

「ええ、今回の作戦はステインガー、コーウエンの確保。まず第一段階としてドクター早乙女から情報を聞き出すこと。なお、早乙女は表だった経歴は無いから今回はスルー。万が一ドーパントとの遭遇、ステインガーらが逃走を図った場合に備えてメンバーを3つに分けます。」

翔子・隼人ペア  
大学へ

カズキ・ブラボーペア  
見廻り

四季・斗貴子ペア  
同じく見廻り

数分後…

「斗貴子さん…大丈夫かな…」

「どうしたカズキ？斗貴子が心配か？」

カズキ・ブラボーペア

見廻りといっても普通に話している。

「んん…そうなんだけど…」

「けど？」

「何か『危ない』っていうか…何か…」

「危ない？斗貴子がか？」

ウンウンと首を振るカズキ。しかし、首を傾げる…。

「何でかな…斗貴子さんの身が危ないっていうより斗貴子さん自体が危ない気がするんだ…。」

「？」

このカズキの不安が後に的中するのはそう遅くは無かった…。

斗貴子・四季ペア

「…」

「…」

こちらはどちらも無言…。

( 気まずー！！ )

四季は心で叫ぶが誰にも届かない…。  
仕方ないので脳内で例のカードネタをする四季。

・そのまま 現状維持

・話しかける 話題どうする

結局…

黙ることにした四季。何故なら彼女から殺気を感じとったのだ…。

「四季さん…でしたよね？」

「あ？ああ、そうだけど…」

何か気に触る事をしただろうか？風呂はさっき入ってきたから体臭は無いだろうし特に何もした覚えは…

（まさか…口臭！？）

レディが嫌う男性の原因の典型的な例を思い付く四季。しかし…

「『紅蓮の破壊者』ってご存知ですか？」

「…どうしてそれを？」

「答えて下さい。貴方は『紅蓮の破壊者』なのですか？」

斗貴子は明らかに殺気のレベルを本当に殺意のレベルまであげてい  
く…

「だったら…？」

「貴方をいや、貴様をここで倒す！！」

斗貴子はとうとうバルキリースカートを起動させる。

「これは面倒なことになったな…」

四季もブラックディケイドライバーを取りだし腹に当てるとベルト  
の形態にする。

「やるしかないか…変身！！」

『KAMEN RIDE DECADE BLOOD』

疑念のT・黄昏と激突 後編（後書き）

シユテルら閉めだされた夜

翔子「さくってウフフ…」ワキワキ…

隼人「落ち着け翔子！！俺達まだ式もまだ…」 壁に追い詰められてる

翔子「良いじゃない バースさんとこのなのはちゃんはまだ妊娠してるのし…丁度良いじゃない」

隼人「丁度良いってなんだ！？うわ…ちょ…」 服を剥がされる

翔子「さて…絞りだしてもらおうよ？」ワキワキ…

隼人「絶望が俺のゴールだああ！！うおおおお！！？」

商「おおっとここから先は大人の世界ですよ。」

**激闘するD・現れた黒幕（前書き）**

今回はディケイド・ブラットvs斗貴子!!

そしてオリジナルライダー登場!

さらにあの娘がライダーに…!!?

## 激闘するD・現れた黒幕

斗貴子と四季が激突した同時刻…

風都大学…

待合室で隼人は早乙女と会うのを待っていた…。翔子は探偵なので刑事の隼人と一緒とはこれはいかんという訳なので外で聞き込みをしている…。

（早乙女賢…一体どんな男なのだろうか…）

隼人も刑事としてもライダーとしても様々な人間を見てきた…。その中には狂気に満ちた奴や身に覚えのない災難や不幸で犯罪に手を染める者もいた…。

今回、早乙女はどんな奴なのか…隼人は今までの経験上、見た目は普通で誰からでも人当たりの良い人間で恐らく誰しもが彼を犯罪者とは疑わない…そんな人間だろうと予測した…。

しかし…

「貴様か…私と面会したい輩とは…」

待合室に入ってきたのは白衣を着た老人…肌は精気を感じさせず髪と髭は白髪と灰色が混じり伸び放題…

まるで世捨て人だ…



「お時間を取らせて申し訳ありません。風都警察署特殊犯罪科の迅竜隼人です…。」

イメージとは余りにも違いこれには驚く隼人。失礼の無いよう慌て繕う。

「ふん…その刑事が儂に何のようじゃ？」

「単刀直入に申します。…貴方はステインガーとコーウェンに関わっていますね？」

一瞬…早乙女の動きが止まった…。

しばらくして静かに喋りだす…

「貴様…どこでそれを聞いたかは知らんがこれ以上関わらんことだ…他の2人は儂のように甘くは無い…」

「…ということとは認めるのですね？」

「ふん、逮捕したくば礼状と証拠を揃えてくるのだな…」

そう言うと早乙女はその場から立ち去る。

隼人も続いて外へ出る…

「あの…」

すると1人の学生に呼び止められた…。

「刑事さんでしたよね？」

「何だ？」

学生はおどおどしながら話し出す…

「さ、早乙女先生は…わ、悪い人じゃないです…ぼ、僕が追試でレポート纏める時も手伝ってくれて…あんな外見ですけど根は優しいんです！ぶっきらぼうな所もあるし、皆嫌がるけど良い人何です…」

「言いたいことはそれだけか？」

「へ？」

隼人は学生に向けて冷たく言い放つ。

「どんな奴だつて根は良い…こんな筈では無い…なんて外見の奴は腐るほどいる。だから俺たち警察は捜査し真実を暴かないといけない…。」

「で、でも…」

「確かに人格も大事だ。だがなそれだけでは容疑者にならない理由が無い…。」

「そ、そんな…」

「安心しろ…まだ決まった訳じゃない。罪が無ければ疑いは晴れる

さ…」

隼人はそう言うと学生を残し立ち去っていった…。だが彼は知っている…。早乙女はステインガーらに自ら関わっている発言をし、警告してきた…。恐らく間違いなく黒だろ…。隼人はやるせない気持ちのまま翔子と合流すべくその場を後にした…。

「…情けない」

学生はただ一人そこに取り残され余りの悔しさに立ち尽くしていた…

そこへ…

「早乙女を助けたのかい？」

「！」

白衣を着た小太りの2人の男が現れた…。一人は浅黒い肌でサングラスをかけておりやけに顔がでかい。もう一人はサングラスの男より背が小さいが肌は青白く人のソレとは思えない…。そしてこちらもやけに顔がでかい。

「こういう時はコレが一番だ。そうだよねステインガー君？」

サングラスの男が青白い男性に話しかける。

「うんうん、そうだねコーウェン君？」

「ええ…？え？」

青白い男性もそれに答える。学生は突然現れた2人に腰を抜かしている。

『アイスエイジ』！！

「ちよつと！？」

サングラスの男は学生の腕をとると懐から『E』と表記されたガイアメモリを取り出すとその腕に突きさした…。

一方、斗貴子・四季ペア

「バルキリースカート!!」

「うお!? ちよ!? 危な!」

四季の変身したディケイド・ブラットは苦戦を強いられていた…。何故なら相手は武装を抜けば生身の人間…迂闊に攻撃すれば勢い余って殺してしまうかもしれない。流石にそれは後々面倒である…。

「答える!! 貴様は何なんだ!!」

「だから、ただの仮面ライダーだつってんだろぅが!!」

「ふざけるな!!」

そしてこのやり取りも先程から続いている。

「くそ…こういう時はクウガに…」

ライドブッカーからカードを取り出すディケイドB…。しかし、そのカードの絵は白くピンボケしていた…。

「あ！やべ！？」

「うおおオオオ！！！」

仮面の下でミスに気づく表情をする四季。その隙を見逃さずバルキリースカートの刃がディケイドBを襲う。

「ぐああああ！？」

とうとうディケイドBも弾き飛ばされてしまう…。

「まともに答える気が無いならここで失せろ！！！」

斗貴子は止めを差すべくバルキリースカートの刃をアームから外し自ら持つ。このほうが威力が高いのだ。

「舐めんじゃねえええ！！！」

『ATTACK RIDE SLASH』

ディケイドBも負けじと立ち上がりカードをバツクルに装填すると逆手にライドブッカー・ソードモードを持つ。すると刀身が紅く光を帯びる。

「おらあー!!」

バキン!!

「な!?折れ…!?」

常時より素早く威力のあるライドブツカーの剣はバルキリースカートを刃ごと粉々にし斗貴子を吹き飛ばす。

「これで終わりだ!!」

『FINAL ATTACK RIDE DE DE DECADE BLOOD』

完全に頭に血が昇ったデイケイドBは必殺技発動カードをバツクルに装填。すると斗貴子目掛けて一直線に紅いバーコード模したような線の円の行列が延びる…。

「そいやアアアアアアアアアアア!!」

続いてデイケイドBは飛び上がるとライダーキックの体勢をとる。そして、円を突き抜けると突き抜けた円はデイケイドBの右足に纏われそれが重なりドリルのようになる。これがデイケイドBの必殺技『ディメンション・オブ・ブラット』だ。

「!!!」

斗貴子は回避不能と思いい目をつむるが…

『霸王・地獄拳!』』

ドカッ!!

「ぐはあ!?!」

「!?!?!」

突如、2人の間に黒いオーロラが出現。その中から飛び出した黄色い閃光がディケイドBを叩き落とす。

「兄貴…ここにもいたよライダーが…」

「そつだな弟よ…」

そのオーロラから仮面ライダーザビー、仮面ライダーパンチホッパー、仮面ライダーキックホッパーが現れる。

「くそ…このタイミングで地獄兄弟か…しかも1人増えてやがる…」

ディケイドBは片方の膝をつく。流石に手練れ3人を斗貴子の後に連戦とは非常にづらい…



(インビシブル…ダメだ斗貴子が逃げられない。でも今使えるカードじゃ『クロックアップ』に…)

『クロックアップ』

彼ら3人のライダーの最も恐ろしい能力…

凄まじい速さで移動し超高速戦闘を可能にする能力…。動きが速い者に追い付き逆に遅い者には嵐のような攻撃を食らわせることを可能にする恐ろしい力…。

そして今、デイケイドBは彼らのスピードに対抗する手段は無い。

「くっ…」

斗貴子も無事なバルキリースカートの刃を構える。それに気付いたザビー。

「貴方…私を笑ったわね？」

「え？」

「もっと笑いなさいよ…!!」

ザビーが斗貴子に襲いかかる。

「やべえ!!」

ディケイドBは斗貴子を援護しようとするが…

「貴様の相手は…」

「俺達だよ」

その前にキックホッパーとパンチホッパーが立ち塞がる。

「ライダーステイング!!」

『Raider stinging』

(まずい…やられる)

斗貴子にザビーの腕が…

バシッ

当たらなかった…。  
ザビーの腕は気がつくとは何者の手が押さえていた…。そしていつの間にか割って入るかのように銀色のオーロラが出現し、腕もそこから伸びていた…。

「ガキが…甘いんだよ!！」

ガン!!

「うっ!」

腕の主はザビーを蹴り飛ばすとその姿を現す。

紅いマフラー…

黒い髪に凶暴そうな目…

羽織ったロングコートは黒ずんでいる…

そして何より凶暴さを模したような笑みが本人の荒々しさを象徴している…

「りよ…竜馬!！」

「よう…四季!楽しそうじゃねえか…」

ディケイドBは男の名を叫ぶ。竜馬と呼ばれた男はまるで遊びに混じるかのような表情を浮かべる。

「俺も混ぜ…」

カラカラカラ…

「ああん？」

すると竜馬の出してきたオーロラから無色のメダルが転がって彼の足に当たる。

「ああ…ちょっと、ちょっと…」

それを追うようにオレンジ色の髪の少女が現れる。

「遅せえぞ！！ティアナ！！」

「うっさい！！あなたが速すぎるんでしょバカ！！」

「？誰…？」

ティアナと呼ばれた少女は竜馬が拾ったメダルを受けとる。ディケイドBはこちらは面識は無いようだ…。

「まあ、良いいくぜティアナ！！」

「あんたが仕切るな！！」

竜馬はメリケンらしき物を右手につけ左手に当てる。同時に彼の顔

に緑色のラインが目元まで延びる。ティアナはカプセルのついたよ  
うなベルトを巻き付ける。

「変身!!」

『フイストオン!!』

『カポーン』

「チエエエンジ・フォームワン!!」

竜馬は先日ブラボーとアクセルを助けた深紅のライダー『仮面ライ  
ダーゲットイクサ』に変身し雄叫びをあげる。ティアナには装甲が  
形成され『仮面ライダーバース』に変身し、バイザーがオレンジ色  
に輝く。

「あんたいちいちそれ言わないといけないの？」

「良いだろ、こっちのほう気合いが入る。」

バースはゲットイクサに呆れたような声を出すがゲットイクサは気  
にしていないようだ。

「いくぜ…」

そして第2ラウンドが幕を開けた…

**激闘するD・現れた黒幕（後書き）**

ティアナがバースの小説もそのうち書く予定です。  
まあ、彼女が主演ではありませんが…

ティアナ「私がバースだ!!」

**最強のR・策略の影（前書き）**

ティアナバースと原作のバースの違い

・バイザーの色

原作 赤

ティアナ オレンジ

## 最強のR・策略の影

「いくぜ…」

紅いマントをなびかせるゲットイクサ。バースバスターを構えるバース。

「邪魔しないで下さい。私達の狙いは紅蓮の破壊者です。」

「うるせえ！！楽しそうだから混ぜろ！！」

ザビーの警告を無視し突っ込むゲットイクサ。

「ああ！！ちよつと…！！？」

バースも援護射撃の体勢に入る。

「トマホーク！！」

ガンガン！！

「当たれ！！」

バンバンバンバン！！

「ぐああああ！！！！」

ゲットイクサの取り出した斤の攻撃を受けるザビー。バースは射撃でパンチホッパーの動きを抑える。



「クロックアップ!!」

「オープンゲット!!」

『オー・ブン・ゲット』

キックホッパーがクロックアップを使おうとした瞬間、ゲットイクサはマントや腕の装甲を弾きとばしキックホッパーを怯ます。

「速さには速さだ!」

『ライ・ガー・ドリル』

更にベルトにフェッスルを装填。その姿は赤から青に変わり展開していた顔の十字架も狭まりバイザーに近い形になる。そして複眼も緑から黄色に変化する。

『チエエエンジ・フォームツー!!』

そして左腕に金色のドリルが形成されゲットイクサ・フォーム2に変身する。

「そんな物!クロックアップ!!」

「クロックアップ!!」

『clock up』

劣勢を逆転すべくクロックアップするキックホッパーとザビー。そ

して、2人は超高速の空間、スローモーションの空間に入る。この中ならゲットイクサの動きも鈍い…

「おらあ!!」

ガンガン!!

「何!?!」

筈だった…。

この超高速の空間でも常時と同じように攻撃を繰り返すゲットイクサ。彼もまたフォーム2の特殊能力『超加速』で彼らの動きについできたのだ…。しかし、竜馬自身の感覚が強化されている訳ではなくあくまでも彼の感覚で攻撃をしている…。

(今、手応えがあつたな…)

仮面の下で凶暴そうな笑みを浮かべる竜馬。子供が見たら絶対泣く。

「オラオラオラ!!」

そして自分の感覚を頼りに攻撃を繰り返すゲットイクサ。

「アイツも相変わらずね。」

『ブレストキャノン』

半ば呆れたようなバース。そしてメダルを取り出しベルトに装填すると胸に巨大な砲身『ブレストキャノン』が装備される。

『clock over』

「ぐああああ!!」「」

「今だ!! ティアナ!!」

2人をクロックアップから引きずりだすゲットイクサ。

「シュート!!」

『セルバースト』

同時に赤い砲撃がザビー、パンチホッパー、キックホッパーを襲う。

ドオオオン!!

「」「」ぐああああ!!」「」

3人は纏めて吹き飛ばされザビーは元の少女の姿、アインハルトに戻ってしまふ…。

「な！？アインハルトちゃん！？」

驚いたような声をだすバース。

「くっ！！」

しかし、アインハルトはホッパー達と黒いオーロラの先に消えていった…。

「ティアナ！！あのガキ知り合いか？」

竜馬が変身を解き、ティアナに話かける。

「ええ…でも私の世界じゃ普通に過ごしてたし別の並行世界のアインハルトちゃんかしら…」

こちらにも変身を解除するティアナ…。

「はん…地獄兄弟に入るくらいだ…余程のことがあたらんだろう。」

竜馬は適当に推測するとデイケイドBの元へいき、ティアナは斗貴子の元へ行く。

「おい、四季！派手にやられたな！！」

「うるせえ…」

得意げな顔する竜馬に変身を解除し悔しそうな顔をする四季…。

「大丈夫ですか？」

「ああ、済まない。」

ティアナは斗貴子に肩を貸す。

「やれやれ…まず礼を…」

竜馬がここで何かに気づく。

「あーあ…そりゃ使いモンならねえな。」

「え？」

竜馬が指差しをした先は斗貴子の足元…そこには六角形の物体が砕けていた…。これこそ彼女の武器であるバルキリースカートの元でもある『核鉄<sup>カクガネ</sup>』であった…。ディケイドBの攻撃を受けすぎて壊れてしまったのだらう…。

「そんな…」

斗貴子はその場に座りこんでしまった…。

一方その頃…

『ヒート・トリガー』！！

『エンジン・スチーム』！！

大学の広場でWとアクセルがドーパントとの戦闘を繰り広げていた…。

相手は『アイスエイジ・ドーパント』、氷雪系の能力を使いこなし、刺々しい外見が特徴だ。勿論、氷雪系は高熱に弱いわけであり、

『ぐわあああー！』

「ちよろい、ちよろい。」

「手応えが無い。」

一方的にライダー達が優勢に戦闘を進めていた…。

その様子を大学の屋上から見る2人の人影…。

「ああ…やっぱりダメだ。そうだよな？ ステインガー君？」

「うんうん、そうだよな？ コーウェン君？」

二人は白衣のポケットから黒いガイアメモリを取り出す。しかし、その接続部分は赤い。

『『インベーター』』！！

そしてスイッチを押すとメモリの接続部分や所々から小さな触手と目玉が現れる。

「「見せてやろう我らの力を…！！」」

そのメモリを首に差し込むと2人は黒い異形となり姿を消した…。

「さ〜てグリルにしてあげる。」

Wは物騒なことを言いながらトリガーマグナムに『ヒートメモリ』をスロットしようとする。

『待て翔子！ここは隼人に任せよう。』

「何だよフィリップ？」

『君がヒートトリガーでマキシマムをやると犯人焼き殺すかここいらが焼け野になる。』

「何ですってええええ！？」

フィリップの発言にブチ切れる翔子。

グチャグチャグチュ...

「」  
「」  
「」

その時アイスエイジDに異変を襲う。

『があアアアアアアアアアアアアアアアアア！！』



『アイスエイジ・ビーストモード』！！

生の肉を引き裂いたときのような音と共に身体は刺々しくなり、身体も黒ずんでいく…。更に腕に氷の巨大な爪が生成され胸に爬虫類のような目玉がギョロギョロと覗いている。しかも3つ。

『中々だね。そうだよな？ステインガー君？』

『うんうん、そうだよな？コーウェン君？』

そして異形からは明らかに別の人物の声が聞こえる。

「な、何なのよコイツ…」

『わ、解らないけど…』

「まずそうだな…」

Wとアクセルは警戒する。

『これでも食らえ！』

アイスエイジDは爪を向けるとライダー達に向かい射出。

『おっと…！』

「ぬお!？」

紙一重でそれをかわすとアクセルは懐に入りエンジンブレードできりつける。

ガン!!

『その程度か?』

ビキビキ…

「なっ!？」

しかし刃は通らず凍りはじめた…。

「隼人!」

『ヒート・マキシマムドライブ』!!

Wはアクセルを救出すべく『ヒートメモリ』をトリガーマグナムにスロットし巨大な火の玉を放つ。

『あち!?!』

「くっ!？」

掠めこそはしたものの空に向かう火の玉。それでも解凍には十分でアクセルは距離をとることに成功する。

「やってくれたな！！威力が足りないなら最大の力で振り切るまでだ！！」

『エンジンマキシマムドライブ』！！

アクセルはエンジンブレードにエンジンメモリをスロットし、

『アクセルマキシマムドライブ』！！

さらにアクセルドライバーのハンドルを捻り『ツインマキシマム』を発動させる。

「はああああああ！！」

ズカン！！

『ぐわああああ！！』

凄まじい光を纏ったエンジンブレードを振り抜くとアイスエイジDは凄まじい爆発を起こした…。

『結構痛かったねステインガー君？』

『そうだね？コーウエン君？』

「何！？」

それでもアイスエイジDは健在だった…。

しかし…

「うおおおおおおおおおおおおお！！」

ガン！！

「ぐわあああ！！！」

そこへサンライトイエローの閃光が突っ込みアイスエイジDを弾き飛ばす。

「大丈夫ですか？」

それはサンライトハート+を構えたカズキであった…。

「やれやれ…今度はこっちが助けられたわね…。」

『これで貸し借りは無しだね。』

安堵の声を出すW。アイスエイジDもノックアウトしたようだ…。

「まあこれで一件落…」

『エターナルマキシマムドライブ』！！

**Eの襲撃・その名は永遠（前書き）**

まさかのあのライダーが登場！？

なにコレ...！？

## Eの襲撃・その名は永遠

『エターナルマキシマムドライブ』!!

「『わああああ!?!』」

電子音声と共にライダー達の悲鳴が響きわたる。すると彼らの身体は一瞬電撃がはしるとWは地に着きですアクセルは先程の技の反動のためか変身が解除され隼人の姿に戻ってしまう…。

「な!?! 一体何が!?!」

カズキが辺りを見渡すと白い異形が1人…

鋭い並んだ三本角

『を模した黄色い複眼

腕、手首、足首に炎を模した模様

そしてWの左側の欠けたベルトをしているその姿は…



「仮面ライダー？」

まさに仮面ライダーであった。

しかし、右手に握られているナイフと威圧感は決して友好的には感じられない…。

『ナスカマキシマムドライブ』！！

「！！！」

そのライダーはメモリをナイフにスロットするとその姿は一瞬で消え…

ドカッ

「『ぐあー！？』」

バキッ

「ぐうー！」

いつの間にかカズキの後ろに回り込みWとカズキをけり飛ばした。

その拍子でWも翔子の姿に戻ってしまう。

「…」

さらにまだ動けるカズキの元へ向かう白い異形…。その手にナイフが鈍く輝く…。

「くっ…」

カズキも負けじとサンライト・ハート+を構えるが…

「カズキ!!」

「ブ、ブラボー！」

その間にシルバースキンを発動させたブラボーが割って入る。

「はあ！」

ズダダダダダ…

そして白い異形と目にも止まらぬ速さで肉弾戦を開始する。

(コイツ…動きは速い…だが…)

ガンッ

「！」

ブラボーは一瞬の間をつきナイフを弾き…

(腕は素人だ！)

正拳突きを見舞い異形を跳ね飛ばす…。

「やった！」

思わず声をだすカズキだが…

「…」

ブラボーは驚愕して目を見開いていた…。なぜなら異形に正拳は実は受け止められ威力を軽減されていたからだ…。いや、ブラボーが驚いていたのはそこでは無い。その時、異形の手に握られていたモノ…それは…

「核鉄…！」  
かくがね

その六角形の物体は自分たちが風都に来た理由そのもの…

つまり…

(コイツが…犯人！！)

だがここでさらに驚愕する事態が起こった…。  
核鉄が変形を始めたのである…。

「ま、まさか…」

ブラボーに嫌な予感がよぎる…

「『武装…錬金』。」

異形がそう呟くと核鉄は六角形の形から真つ二つに割れその間に長方形の何かが生製される……。恐らく異形の武装錬金だろう……。

「……」

そして異形はベルトからメモリを抜き取ると……

ジャキン！！

「！！」

核鉄に射し込んだ。

『エターナルカクガネドライブ』！！

バチチチ！！

「ぐああああ!?!」

すると今度はカズキとブラボーに衝撃が走る。同時にサンライト・ハート+は核鉄に戻ってしまう…。

「…」

異形は効果を確認すると弾かれたナイフを拾い新しいメモリをスロットする。

『ユニコーンマキシマムドライブ』！！

異形は切っ先を片手をつくブラボーに向ける。同時にナイフに緑色のドリルのように光が纏う。

「ふん!」

ズガッ！！

「ぐわあああああ!!」

勢いにのせナイフでブラボーを突く異形。すると、ブラボースキンはまるでガラスが割れるかのように砕け散った…。

「…」

異形はぶっ飛ばされたブラボーを見送ると攻撃の矛先をカズキに向ける…

が…

「やめる!」

彼の前に立ちふさがる少女…。

「斗貴子…さん？」

それは斗貴子であった…。

「やめる…カズキに手を出すな…」

「斗貴子さん…ダメだ」

なんと彼女はカズキの盾となろうとしていた…。

(決めたじゃないか…君が死ぬ時…私が死ぬ時…)

斗貴子はかつて決めた決心を思いつかべ目をつむる…

「…」

しかし異形は斗貴子とカズキに手をあげようとはしなかった…。

「出ていけ…」

「え？」



異形が静かに重苦しい声で喋りだす…。

「この街から出ていけ…その若い命…早く散らしたくなければな…」

「トマホーク・ランサー…！」

それと同時にかなりの数の斤が飛来する。

「!?!」

思わず怯む異形。その隙に…

「レスキューキター…！」

デイケイドBが変身したDBフォーゼが飛来。ロケットモジュールを展開しカズキを抱え救出する。

『クレーンアーム』

次にカッターウィングを展開したバースが飛来しブラボーを左腕のクレーンアームに巻き付け救出。

「翔子！隼人！」

さらにWサイクロンジョーカーをもした装甲車が到着。車体が真つ二つに割れるとそこからフィリップが降りてくる…。そして彼は翔子を回収する。

「なっ…」

突然の出来事に立ち尽くす斗貴子。

「馬鹿野郎！！何ボサツとしてやがる！！」

その彼女の前にゲットイクサが舞い降りる。

「食らえ！」

ゲットイクサはガトリングガンを二丁取り出すと盛大に乱射を始める。すると爆発で起きた煙が煙幕代わりとなり、それが晴れた時にはその場に異形と倒れたアイスエイジDしかいなかった…。

「ふん…逃げたか…」

異形はアイスエイジDに近づく…

「いい加減でてこいステインガー、コーウェン!!！」

異形の言葉に応じアイスエイジDの身体から黒い影が踊り出る…。

ぐちゃぐちゃ…

気色の悪い音をたてながらそれは2体の怪人…いや怪物の姿となる。

「すまない早乙女…助かった。そうだよな？ステインガー君？」

「ウンウン、助かったね？コーウェン君？」

それと同時にアイスエイジDの身体が人間のモノに戻る…それは早乙女を庇おうとしていた学生であった…。

「…」

異形はそれを一瞥すると怪物と共にその場を後にした…。

鳴海探偵事務所…

ここでは何とか逃れた翔子達がいた…。  
しかし全員ボロボロで隼人とブラボーは病院に搬送されるなどの有り様であり…

さらに…

「メモリが…使えない。」

翔子らの所持するメモリの力が失われていたのだ…。何度もスイッチを押す翔子だが反応はない。これではWやアクセルに変身できな

い。

しかも…

「…」

「斗貴子ちゃん…」

斗貴子も核鉄を失い戦う術を無くしていた。

まさに最悪の状態だった…。

**Eの襲撃・その名は永遠（後書き）**

その頃…

カフェ『スプリング』…

四季「おい、商…」

商「何でしょう?」

四季「買いたいブツがある。」

商「これですか?」 トランクを開ける

四季「ほお…言わずとも…って奴か…額はこれくらいありゃ足りるか?」

商「コアメダル4枚にセルメダル40枚…商談成立ですね」

四季「ついでに配達も頼めるか?」

商「勿論ですとも これからも超時空商協会を御贖<sup>しんご</sup>贖<sup>め</sup>に…。」



運命のJ・切り札はいつも共に（前書き）

斗貴子「そろそろ私らはお役目御免か…」

カズキ「残念…」



## 運命のJ・切り札はいつも共に

翔子らのメモリが使えないことについて検索を開始したフィリップ  
…。  
数分後、ある程度集めた情報を翔子とフィリップが話します…。

「敵の正体がわかった。例の白いのは『エターナル』。『エターナルメモリ』を使用したいわばシステムは僕たちライダーと同様な存在さ…。」

この世界のライダー…つまりWやアクセルはドライバーに純正のガイアメモリをスロットし力を制御している存在である。（翔子いわく街の人々の希望であるべきも条件とのこと…）

「コイツの能力は厄介で他のメモリを制御できるということさ。文字通り『永遠』に能力を奪うことも可能なわけだ…。」

「じゃ、じゃあ…。」

顔をこわばらせるカズキ。彼も同様にエターナルに能力を封じられた身だからだ。

「いや、君は心配する必要は無いと思うよ。あくまでも『メモリ』での話だからね。」

「よかつた〜。」

「でも『メモリ』と『核鉄』<sup>かくがね</sup>の併合した使用者とは…興味深い。」

ほっとするカズキ。フィリップは敵の能力にかなり興味を持ったようだ…。

「恐らく…奴の『武装錬金』でしょうね…。」

斗貴子が自分の推測を述べる…。

武装錬金とは人によって千差万別の能力と形態をとる。しかし、元になる『核鉄』は全て一緒なのだ。（一部例外あり）つまり、エターナルも元が人ならば発動条件に必須な『闘争本能』があるわけでありその結果、『ガイアメモリを扱える武装錬金』になっても不思議ではない。

「そして、もうひとつ…」

今度は翔子が話だす…。

「私の師匠経由の情報だけど『特殊なメモリ』の存在もわかったわ。そして、それが何者かに奪われたことも…」

「え?」

翔子は師匠なる人物からの情報を話す…。

時は数ヶ月ほど前…

風都郊外…

白い服の中年ぐらいの男がいた。翔子らの師匠『鳴海宗吉』である。彼は『T2ガイアメモリ』の取引を追っていた…。これこそが翔子のいう『特殊なメモリ』である。

宗吉は物陰に隠れ様子を伺う…。彼の視線の先には黒ずくめの男が3人…。開けた場所で突っ立っている。どうやら何かを待っているようだ…。

ブン、ブン、ブン、ブン、ブン、ブン、ブン、ブン、ブン、ブン、…

暫くするとヘリコプターがこちらへ飛んでくる。

ヘリは男たちの真上でホバリングすると徐々に高度を下げる…。

その時…

「何者だ！」

『バード！！』

男のうち1人がメモリを首に差し鳥の異形、バードドーパントへ変身する。

この時、宗吉は自分の存在がバレたのかと思ったが…

『フン！！』

ズカン！！

バードDは宗吉がいる所とは関係無い所に火の玉を放った。

『グギヤアア！？』

すると物陰から倒れる異形…。爬虫類のようだが黒い肌に身体の至るところに気色の悪い目玉がついている。

「我々のデータに無いドーパントだな…。」

黒ずくめの男の1人が異形に近づく…そして触れようとした時…

ザシュ！！ザシュザシュザシュザシュザシュザシュザシュザシュザシュザシュザシュザシュ！！

ポタタ…

男は一瞬、何が起きたか解らなかった…。気づいたら彼の胸には黒い槍が幾つも突き刺さり血が滝のように流れていた…。

『な、何！？』

バードDは一瞬呆気をとられるが再び攻撃をしようとするが異形の体は液化化しバードDや残った男を囲む壁のようになる。

「ひ、ひい！？何だよコイツは！？」

バン！バン！バン！バン！

残った男はドーパントになるメモリを所持していないのか手持ちの銃を闇雲に撃ちまくるが異形に効果は無い…。

ぐちゃぐちゃ…

異形の壁は全ての目を獲物に向け…

ぐちゃ…

「『ぎゃ』」

まるでハエをティッシュで包みこみ潰すがごとく地上の残った2人を葬った…。

「ひ、ひい…！？」

へりも急いで上昇を開始し異形の手の届かない高度にまで上がる…。

「…ふ」

「息つくへりのパイロット…」

『どこを見ているのかな？ スティンガー君？』

『うんうん。 コーウェン君？』

「…」

しかし、あまりにも…運命は残酷だった…。

ザシュ！！グシャグシャ！！ザシュ！！ザシュ！！グシャグシャ！！

「うわあああああああああああ！？」

パイロットの断末魔が響き渡らせながらへりは墜落した…。

「で、そのあと師匠が墜落現場を見てみたら惨殺された焼けこげた複数の死体があったそうよ…。恐らく師匠は『T2メモリ』が襲撃者に奪われたとみてるわ…。」

「そして『T2メモリ』の中には僕たちのメモリより強力なメモリ『エターナルメモリ』があるという情報もあるし、さっきのことから襲撃者と『エターナル』は協力関係と見て間違いないね。」



翔子が話終わるとフィリップはそれから考えられる結果を纏めた。

「じゃあ…奴を倒すには…」

カズキは恐る恐る口にする…。

「絶望的かもしれないけど…ガイアメモリと武装錬金以外の力で倒すしかない…。」

それは自分たちには無理同然だった…。

「！そうだ！！四季さんなら…」

「待てカズキ！！！」

四季のデイケイド・ブラッドならと考えスプリングに向かおうとするカズキを斗貴子が止める…。

「アイツは…信用できない！！！」

未だ彼女は悪夢のことが気がかりだった…。

それに、本来なら破壊できるはずのない核鉄を破壊したデイケイド  
Bは能力においても非常に警戒すべきところがあった…。

「で、でもそうしないと…」

「しかし…！」

「しかし何だ？」

「…！」

2人が言い争っているといつの間にか四季が事務所の壁に寄りかか  
っていた…。

「ずいぶんとまあ、面倒なことになってんのにつまらんことで人の  
力を借りないとはな…。どうせ鳴滝に俺が『破壊者』だの『悪魔』

だの言われたんだろ？」

「！」

「凶星か。」

四季は溜め息をつく。

「確かに信用できねえだろうな…。突然現れた妙な怪人相手にタイミング良く登場してぶちのめし、しかも訳分からん力を使うしな。」

「…」

「俺だつてどうしてこの力が使えるかは解らない。どうして旅する羽目になったのかも解らない。けどな…手が届く命があるのに見ないフリできるか？自分は関係ないと逃げるか？確かにそろも賢明な選択だ。だが俺は『後悔しない生き方』をしたいんじゃない。後悔しても良い生き方』をしたいんだよ…。お前らも同じじゃねえか？」

「…」

「斗貴子、お前に言っておく…確かに俺は『悪魔』かもしれねえ…。いずれお前の大事なモノを壊すかもしれねえ…。だけどよ、あるかどうか分からんことに突っ掛かってエターナルどもを放っておくのか…？奴らの好き放題やらせて良いのか…？」

「そんな…つもりは…」

「お前だって弱い奴らを理不尽から護る…それはライダーも俺も関係ねえだろ！！だから俺は戦う…。例え『悪魔』でもな…。」

四季は自分の思いを斗貴子にぶつけた。斗貴子は思った…。自分は何を気にしていたのだろう…。彼女は弱き者を守る筈の『戦士』であつた…自分でもそうだと思つていた…。しかし、『愛する存在』カズキを失うことを恐れて、そのことで心を揺さぶられいつの間にか『戦士としての自分』を見失つていた…。そして『戦士の力（武装錬金）』も失つてしまった…。

「私は…私は…」

「斗貴子さん…」

カズキは泣き崩れる彼女をだきよせた…。

「まあ分から良い…それに…」

ドガアアアアーン!!

「何だ!？」

突如、響く爆音。

咄嗟に翔子は窓の影に回りこみ様子を伺う…。

『グアア…』

『グオオ…』

事務所の前には2体のドーパント…

T・レックスの大顎を模したT・レックスドーパント…

そして燃え盛るマグマのようなマグマドーパント…

どちらもドーパントのレベルでは大したことでは無いが生身の人間に到底相手は無理である。

「くっ…」

それでも翔子は飛び出す…。それが彼女のライダーとしての本能であつた…。

『ギヤア！！』

ドカッ

「ぐふっ…！」

しかしドーパントに敵うわけなく彼女は軽くあしらわれ壁に叩きつけられる…。

（諦めない…死ぬその瞬間まで信じるモノのため…戦う…それが仮面ライダーだから…！！）

翔子は痛む体を抑えながら立ち上がる…その時…

ガチャ

「？」

何かが翔子の手に収まる……。それを見ると翔子はニヤリと笑みを浮かべた……。

「切り札は……いつも私と共にあるようね……。」

彼女はWドライバーの左側が欠けたドライバー『ロストドライバー』を懐から取りだしベルトの形態にする。

『ジョーカー!!』

「変身。」

翔子は手の握ったモノのスイッチを押しドライバーにスロットし右腕を顔の前にくるポーズをとると左手でロストドライバーを弾く!!

『ジョーカー!!』

W同様に変身をとげる翔子……しかし、現れたのは……

「仮面ライダー…ジョーカー!!」



運命のJ・切り札はいつも共に（後書き）

剣崎「ジョーカー…だと!？」

四季「いや、あんた関係ない。」

感想、お待ちしてます。

## ジョーカー・片割れのW（前書き）

キルバット『翔子がとうとうジョーカーに変身！しかし、その実力は！？』

レヴィ「しかし、四季に放たれる2人の刺客…」

ロード「そしてラストと次回はコラボじゃああ…！刮目せよ…！」

という訳で…

はじまります…

## ジョーカー・片割れのW

「仮面ライダー…ジョーカー…！」

翔子はWに似たライダー『仮面ライダージョーカー』に変身した…。しかし、左右の色は紫色に近い黒に統一されている。しかし、使用者のメモリは一本で銀色の2つに分けるラインもスカーフも無い…共通すると言えば赤い複眼と銀色の『W』を模した角だけだ…。

「ジョーカー…!？」

斗貴子も先程までメモリは使えないはずなのに変身した翔子の姿に驚く。

「フフ…彼女は『切り札』の資格者だからね…。当然かな？」

フィリップは口元に笑みを浮かべる。

「ど、どういふ事ですか!？」

カズキもフィリップに問う。

「言ったよね？エターナルを倒すとしたら『メモリと武装錬金以外の力』で倒さなければいけない…。だけどこれは方法の一つに過ぎ

ない…。」

「？」

「つまりまだ方法がある…ということさ。」

エターナルの力は確かにメモリの力を奪うことができる。しかし、それは同じ特殊なメモリ『T2ガイアメモリ』には通用はしない。

「翔子は『T2ジョーカーメモリ』、一発逆転の『切り札』を手に入れた訳さ。」

「なるほど。」

「カズキ、意味わかってないだろ。」

フィリップのかなり抽象的な説明に形だけ頷くカズキ…。それに斗貴子はさりげなくツッコミを入れる。

「いくわよ!」

そんな3人を放置し戦い始めるジョーカー。

ドカツ、ボカボカ!!

キレのあるパンチやキックが次々とドーパント達を襲う。

『ゲルル…』

バシユ！！

マグマDも負けじと溶岩の弾丸を放つが…

「何の！！！」

ジョーカーは紙一重でそれをかわし強烈な一撃を叩き込む！！

「決めるわよ。」

『ジョーカー！！マキシマムドライブ！！』

マグマDが怯んだ隙にベルトの右側のマキシマムスロットにT2ジョーカーメモリをスロットするジョーカー。

「ライダー…キック！！！」

ジョーカーは一旦マグマDを蹴りとばし距離をとると右足に紫色の炎を纏わせる…。

「ハアア…！！！」

そして勢いをつけ駆け出し…

ダッー！

飛び上がると回転をかけたライダーキックをマグマDに決める。

『グギヤア！？』

ドガガアアアーン！！

そしてマグマDは断末魔を挙げると盛大な爆発を起こす…。

『グルル…』

T・レックスDも警戒する体勢をとる…。

「おおっとー俺を忘れてもらっちゃ困る…」

四季も加勢すべくブラックデイケイドライバーを装着するが…

ズズ…

「なっ!?!」

突如、出現した黒いオーロラに飲みこまれてしまった…。

「四季さん!?!」

四季の消失に驚くジョーカー。

『グア!?!』

「ちっ!?!」

それを隙とみたT・レックスDは大顎で食らいつこうとする。

「邪魔よ!?!」

『ジョーカー!?!マキシマムドライブ!?!』

「ジョーカー…フィンガー…！」

ジョーカーは再びメモリをマキシマムスロットへスロット。今度は右手にエネルギーが集中し紫の炎が灯る…。

『グギャアアア…！』

「はああアアア…！」

そして両者、共に走りだし…

「はあ…！」

ドカッ…！

『ギャ…！？』

ジョーカーが一瞬の隙でT-レックスDの上顎を蹴りあげ…

「食らえ…！」



紫の炎を纏う右手をT・レックスDの口につっ込んだ…。

「『…』」

両者…一瞬の沈黙を置き…

ドガアアアン！！

T・レックスDは爆発しながら弾き飛ばされた…。

「ぶっ…」

敵がいなくなり頭だけ変身を解除するジョーカー…。すると解放されたかのように翔子の髪が舞う…。

「翔子さん！！」

安全と判断したのかカズキ達も翔子に駆け寄ってくる…。

「皆、ケガない？」

翔子は余裕の笑みを浮かべながら聞く…しかしその顔はフィリップと共に曇る…。

「マズイことになったわね…。」

ジョーカーの出現で戦力増強を期待したのもつかの間…

四季が姿を消したことに危ぶみを感じる翔子であった…。

その頃…

四季は黒いオーロラに飲まれ妙な世界に飛ばされてしまった…。

「くそ…鳴滝の仕業か…？」

この事態の犯人と思われる人物の名前を予想する四季。  
辺りを見ると一見、ビルの廃校された学校の校庭のようだ…。

「さて…誰が出てくる…。」

ブラックデイケイドライバーを装着する四季…。同時に目の前に黒いオーロラが現れそこからコートを着たホームレスのような中年の男が現れた…。それは斗貴子の悪夢に現れた男と同じであった…。

「よう…これはこれは鳴滝さん。今回はどんなご用件で？」

明らかにバカにした喋り方をする四季。『鳴滝』と言われた男は歪んだ笑みを浮かべる…。

「フフ…今日はお祝いに来たのさ…。貴様の旅が今ここで終わるということにな…。」

「そう言って何回目だ？」

「フン…まあ良い。貴様も先程の戦いで消耗しているだろう…今度こそ貴様は終わ…!！」



をとり…

四季を見ると…

「イケメン発見!！」

ゾクッ

その途端、四季に寒気が走る…。

「うんうん!！写真どおり良い男!！嫌いじゃないわ!！」

(マズイ…色んな意味でマズイ…。)

四季は本能的に生命と貞操の危機を感じた…。

「私が抱き締めてあげる?」

『ルナ!！!』

オカマは懐から黄色い『L』と書かれたガイアメモリを取りだし放り投げる。

するとメモリはオカマの額に刺さり、

『キタ：キタキタキタキタキタキター！！』

体内に浸入するとオカマを金色と長い鞭のような二本の腕を持ったルナドーパントに変えた。

「やっぱりか！！」

『K A M E N R I D E D E C A D E B L O O D』

四季もディケイド・ブラットに変身し応戦の態勢をとる。

『いくわよおお〜！！』

早速突っ込もうとするルナDだが…

「京水イイイイイイイ！！」

ドカツ！！

『痛い！！』

突如、後ろから蹴られ転倒する。

「な、なんだ…？」

デイケイドBも状況を掴めないようだ…。

『く、クイント…！！』

蹴ったのはルナDだったオカマが来ていた同様のジャケットを着たクイントと呼ばれた女性…。髪は淡い紫で外見は一応若く見えるが…恐らく相当歳くってる…デイケイドBはそう感じた…。

「おい、なんか今凄い失礼なこと考えたでしょ。」

「ウウン…ソナコトナイデス…。」

完全に棒読みのディケイドB。

「それより京水…！とつとと行くわよ…！」

『あ！待って…！イケメンイケメンイケメンイケメンイケメンイケメンイケメン…！』

無理矢理ルナDを引きずっていきこうとするクイント…。ディケイドBは一安心かと思っただが…

247

「ま、待ってくれ…！」

「あ？」

鳴滝がそれを引き留める。

「た、頼む…！これで戦ってくれないか…？」



そう言つて彼がおもむるににだしたのは金色に輝く謎のクーポン券。  
クイントはそれを見るや否や…

「乗った!!」

鳴滝から券を奪いとり…

『アクセル!!』

アクセルドライバーを装着し、アクセルメモリを取りだしスイッチ  
を押す。

「変…身!!」

『アクセル!!』

彼女はアクセルドライバーにメモリをスロットしハンドルを捻る…。  
すると黒い装甲が形成されていき…

「仮面ライダー…ダークアクセル!!」

バイザーにシャッターが装着されてるなど違いがあるがアクセルと色違いの黒いライダー『仮面ライダーダークアクセル』へと変身を遂げる。

「ダークアクセルだと!?!」

自らの知識にない仮面ライダーの登場に焦るディケイドB。

「はっ!」

その際にダークアクセルは距離を詰める。

「何!?!」

ボカボカ…!!

そして鮮やかに拳のラッシュを決められる。

「ぐああ!?!」

のけ反るディケイドB。

「京水！！抑えて！！」

『わかったわ！！』

ダークアクセルがルナDに指示をだし、ルナDが腕を伸ばしディケイドBを締め上げる…。

「ぐ、くそ！！」

ディケイドBも必死でもがくが脱出もままならない。

「さて…決めるわよ。」

『ユニコーン！！』

『ユニコーン！！マキシマムドライブ！！』

そしてダークアクセルはトドメをさすべくアクセルメモリを引き抜きドライバにユニコーンメモリをスロットする。

「ユニコーン・ナツクル！！」

するとダークアクセルの右手がドリルを象った緑の光が現れる…。

「ああ…あれはマズイ。あれはマズイ。」

確実に身の危険を感じるデイケイドB…。ライドブツカーに手を伸ばそうにも腕ごと締め上げられているためカードが取り出せない。腕を振りほどこうにもやはり連戦のためか思ったより力がでない…。

(マジかよ…)

デイケイドBがダメージを覚悟した…その時…

『ダブルスキヤニングチャージ!!』

『ロケット・オン』

「はああ!!」「はああ!!」

ザシュ！！

ドカツ！！

『アアアア！？切れちゃった！？』

「！」

「何！？」

突如、2つの影がルナDの腕を切り裂きダークアクセルに体当たりする。

「どっやら…間に合ったようだな…。」

「竜馬さんに話は聞いたよ！」

それら2つの影はディケイドBの前に立つとライダーであることが分かる…。

「火野さんと…如月…？」

1人は上下『赤』『黄』『緑』の三色ライダー…

そして、もう1人はオニギ…ではなくロケット頭の白いライダー…

「残念ながら人違いだ。俺の名前は『織斑唯』、またの名前を『仮面ライダーオーズ』。」

「ぼくは『松永昴』！『仮面ライダーフォーゼ』！！異世界&am  
p;助っ人キター！！」

## ジョーカー・片割れのW（後書き）

四季「なんとピンチに十河さんの『ISS』インフィニット・ストラトス」壊すものと守るもの』からオーズこと斑目唯とフォーゼと松永昴が駆けつけてくれたぞ！」

唯「しかし、戦闘は次回だ。よろしくな。」

十河さんコラボありがとうございます。

助太刀（前書き）

・ジャンクシヨン

ロケットドリルキックをするフォーゼ…。

トラクローを構えるオーズ…。

炎の中をブラックデイケイダーで駆け抜けるデイケイドB…。

3人は一カ所に集まりポーズをとる…。

今回はコラボ！！

『仮面ライダーディケイド〜紅蓮の破壊者〜』

このあとすぐ！！



## 助太刀

「俺の名前は『織斑唯』、またの名前を『仮面ライダーオーズ』。」

「ぼくは『松永昴』！『仮面ライダーフォーゼ』！！異世界&a m  
p:助っ人キター！！」

ピンチのデイケイドBの前に現れた上下三色のライダー『仮面ライダーオーズ』とロケット頭の宇宙飛行士ライダー『仮面ライダーフォーゼ』。2人はダークアクセルとルナDの前に割って入る。

『何よあんたたち！？』

不快そうな声をあげるルナD。腕を鞭のように振るい乱入者を打ち払おうとする…。

しかし、オーズとフォーゼはそれをかわしオーズはルナDと、フォ

ーゼはダークアクセルと向かい合う。

「タイムン張らせてもらおうよ!!」

「フフ…容赦しないわよ?お嬢ちゃん。」

フォーゼと取っ組み合いを始めるダークアクセル。ダークアクセルはアクセルと違い、エンジンブレードは装備していないがその分肉弾戦には非常に強い。

しかも、変身者であるクイント自身の生身でも高い格闘能力と相まってそのスキルは非常に高い。

「はっ!たあ!」

ボカ!!ドカ!!

「っ!」

しかしフォーゼとて負けてはいない。

得意の蹴り技で渡り合う…。

「中々やるわねお嬢ちゃん。」

「そちらこそ…。」

互いの拳と蹴りが激しくぶつかり合うダークアクセルとフォーゼ。

だが徐々にパワーで勝るダークアクセルがフォーゼを押し始める…。

(まずいな…近接だと勝ち目が薄い…なら…！)

ガン…！

『ガトリング・オン』

ダークアクセルと距離をとるフォーゼ。そして、ベルトのスイッチを押すと左足にガトリングが装備される。

「はっ！」

ズダダダダダ…！

盛大にガトリングを射つフォーゼ…

「甘い!!」

しかし、ダークアクセルは空中に舞うように飛び上がり一気に距離を詰める。

「!!」

ズダ!!ボカボカバキッ!!ドカ!!

「ぐああ!!」

そのままダークアクセルの拳と鋭い蹴りがフォーゼを襲う。

「おい!!」

『よそ見してるんじゃないわよ!!』

オースも手助けしようにもルナDの鞭のような腕を防ぐだけで精一杯。。

『フフ…剣一本だと足りないかしら?』

今、オーズの手に行っている武器のは黒に青いラインの入った剣『メダジャリバー』。オーズ専用の武器であり先程ルナDの腕を切り飛ばしたのもコレである。

しかし、今は勢いが足りないためか切り払うどころが受け流すだけである。

「なら二刀流だ！」

オーズは腕をかわし地面に腕を突っ込むと肉食恐竜の頭を模した斤『メダガブリュー』をとりだし二刀流の構えをとると、腕をなぎはらい距離を詰める。

「はあっ！」

ガンガン!!

『あっ!! いやん!!』

懐に入ったオーズはそのままルナDを滅多切りにすると蹴り飛ばす。

「ぼくも負けてられないね。」

『シールド・オン』

一時、劣勢になりかけたフォーゼだったが勢いを取り戻すべくベルトのスイッチを押す。  
すると左腕に白い盾が装備される。

ドカツ

『！』

その盾でダークアクセルの勢いをとめる。

(竜馬さんに言われた…蹴り技だけじゃなく上半身…いや…全身を活かした技!!)

フォーゼはそのまま抱きつくような体勢になりダークアクセルを持ち上げる。

「え？ちよ!？」

「うおおおおおおおおおおおおおおお!！」

ダークアクセルを抱えたまま回転を始めるフォーゼ…。徐々にその

スピードは上がっていき周囲に木枯らしが発生するまでの勢いを  
け…

「オリアアアアア！！」

「ええええ！？」

ダークアクセルを投げ飛ばす。

「今だ！」

『ランチャー・オン』

新しくスイッチを押し右足にランチャーを装備するフォーゼ…さら  
に…

『ガトリング ランチャー』

『リミット・ブレイク』

ベルトのハンドルを握り威力を最大限まで上げ、ランチャーとガト  
リングを放つ。

ドガンー!!

「うわアアアア!!」

その弾丸が直撃し爆発に飲まれるダークアクセル。こちらの戦いはフォーゼの勝利したようだ。

一方…

『中々強いよね!!嫌いじゃないわ!!』

「くっ!!」

オーズは僅かな隙を突かれルナDの腕に絞めあげられていた…。

『私が…抱きしめてあげる?』

ジリジリと距離を詰められるオーズ。仕方なく両手の武器を捨てただ自由のきく腕でベルトに入っている三枚のメダルのうち真ん中の



黄色のメダルを緑のメダルに入れ替え円盤状のスキヤナーをベルトにかざしスキャンする。

『タカ！！カマキリ！！バッタ！！』

すると電子音声が鳴りオーズの目の前に縦に並んだ赤、緑、緑の3つの幻影が浮かび一つになりオーズの胸の上下三色の模様の部分に重なる真ん中が緑に変わりオーズの腕パーツも緑になり両腕に『カマキリソード』がセットされる。

「はっ！！」

ザシユ

『アアア！？また切れちゃった！？』

「悪いがそつちの趣味は無いんでね。」

『スキヤニングチャージ！！』

もう一度ベルトにスキヤナーをかざすオーズ。すると両手のカマキ

リソードにエネルギーが溜まり緑色に光る。

「これで終わりだアア!!」

そしてルナDを十字に切り裂かれ…

『アクセル!!アップデート!!』

『ダークブースター!!』

「せいや!!」

ドカツ

「ぐっ!?!」

なかった…。

オーズは倒したはずのダークアクセルに弾き飛ばされていた…。

「ブースターは苦手なんだけど…」

今のダークアクセルの形態は『ダークブースター』。機械的な装甲が胸に追加され背中タイヤ部分がブースターに変わり飛行が可能になる。

「京水!!!ここは退くわよ!!!」

『わかったわ…。』

だがダークアクセルBは戦闘を続行せず黒いオーロラへと去っていった…。

「お嬢ちゃん、機会があったらまた戦いましょう。」

そう一言残して…。

「おのれええ!!!」

悔しそうな声をだす鳴滝。その表情は激しく歪んでいる。

「次こそは……」

「よっ?」

「!」

すると後ろにはライドブツカーをガンモードにして構えたディケイドBがいた…。彼とてオーズとフォージェが戦っている間呆けて見ていた訳では無い。戦いの中に紛れて鳴滝の背後に回っていたのだ…。

「失せろ…そして俺の旅の邪魔をするな。」

「おのれええ!!」

ディケイドBに背を向け鳴滝は苦渋の顔をつかべ銀色のオーロラに去っていった…。

「良いのか？逃がして？」

戦いを終えたオーズが駆け寄ってくる…。

「ああ…丸腰の奴に手をだす気は無え。」

「甘いな…ホント…」

ディケイドBの答えに呆れたような声をだすオーズ。

ズズ…

そんなことをしていると3人の前に銀色のオーロラが現れる…。

「やれやれ時間か…。」

「スプリング行きたかったけど…残念だな…。」

銀色のオーロラに向かって歩きだすオーズとフォーゼ……。それはそれぞれの世界に戻るということを意味していた…。

「いつちまうのか？」

「仕方ないね。僕たちには僕たちの物語があるから…。」

デイケイドBに残念そうに答えるフォーゼ…。

「それとお前の会うべきオーズは俺じゃない。だが、いずれ…また機会があれば会うだろう…。それまで死ぬなよ？」

「じゃあね〜」

そう言って2人はオーロラの先へ消えていった…。

「さて、俺も戻るか。」

デイケイドBもワインレッドのオーロラを出現させると風都への帰路についた…。

助太刀（後書き）

唯「おいテメエー！！前回、名前間違えやがったな！！」  
ガブリユ  
―装備

四季「うああ！？と見せかけてバカガード！！」

キルバット「ぐわああ！？」

昴（）ササ… 四季の後ろに隠れる。

キルバット「オニギリ！！テメエもグルか！？」

前回あとがきで唯オイスの名前が間違っていました…。

×斑目唯

織斑唯

だそうです…。



十河さんすいませんでした…。

Ｔの拾い物・決戦の夜明け（前書き）

WVS 武装錬金篇

そろそろ終わりが近いかも…？

そして少しだけティアナの出番も…？

それでは始まります…。

## 丁の拾い物・決戦の夜明け

3ヶ月前…

風都大学研究室…

「おお…このままいけば暴走してしまう…！」

ドームのような広い部屋で機械をひたすらいじる男が1人…。

「ええい！ここで諦められるかアア…！」

今、部屋の中心にある沢山の機器に繋がれたフラスコは凄まじい光を放っていた…。男は必死に機械をいじっても光は凄まじく輝き続ける…。

そこへ…

「父さん…！」

1人の黒髪の女性が入ってきた…。

「ミ、ミチル!? な、何故!?!」

その女性は男の娘であった…。

「よくも母さんの一周忌を忘れてよくもこんな…!!」

「ち、違う!! ミチル!! 話を聞いて…」

ガチャ…

この時… 男は謝って機器のレバーに触れ…

キイイイイイイイイ…

辺りを光が包みこんだ…。

その後駆けつけた研究者たちが見たのは…

「アア…アア…アア…アア…」

動かない娘を抱えた炎を背にガラクタの山の上に立つ男であった…。

現在…

「！ミチル！！」

早乙女は広いドームのような研究室で目を覚ました…。

「…夢…か…？」

どつやら自分は机に突っ伏して寝ていたようであることに気づいた…。

「『機嫌よう早乙女博士…？』」

そこにサングラスをした男がやって来る…。コーウエンであった…。

「ふん…何のようだ。」

「決まっているだろう…。『計画』が夜明けと共に実行する。」

「ということは『切り札』の回収に失敗したようだな。『F』のよ  
うな代えを使えば良かったものを…。」

「そももいくまい。いくら『私のメモリが特別』でもオリジナルT  
2は出来るだけ集めなければ失敗する可能性もある。」

「フン…」

早乙女は鼻を鳴らすと部屋の中央の巨大なフラスコに目を向ける…。

「ミチル…待っておれ…。」

そのフラスコには彼の娘、ミチルが浮かんでいた…。

そして、それには醜悪な笑みを浮かべるコーウエンの顔が反射していた…。

風都…

鳴海探偵事務所前…

「ふう…。」

2人の異世界の増援により危機を脱した四季…。  
彼は銀色のオーロラをくぐり抜け何とか帰還を果たした…。

「四季さん…！」

オーロラを抜けるとカズキらが駆け寄ってくる…。

「良かった。無事で。」

安堵の声をだすカズキ。

「悪いな…心配かけたな。」

笑顔で返す四季…。そこに頭の変身を解いたジョーカー…翔子が歩いてくる…。

「…無事で良かったわ。ここで朗報。あなたが留守の間に敵のアジトが解ったわ…。こつちも消耗してるし体勢を整えて明日…仕掛けるわ。」

「ほう…でもジョーカーはWのパワーの半分じゃねえか。大丈夫なのか?」

不安そうな言葉をだす四季…。しかし翔子は…

「大丈夫。何て言ったって文字通り一発逆転の『切り札』だからね。」

と自信ありげに笑っていた…。

「さうして!隼人のお見舞いにもいこうかしらね。」



「俺もブラボー心配だ！」  
「そうだな…」

ここで翔子、カズキ、斗貴子の3人は隼人、ブラボーの搬送された病院に行くことにする。

「じゃあ、俺は戻るか…（竜馬たちにも声かけとくか…）」

同時に四季もスプリングに戻ることにした…。

その頃…

カフェ『スプリング』…

「クロスミラージュ、アンタも大事な相棒だからキツチリ手入れしてやらないとね…。」

オレンジ髪の少女が【x】印の模様がついた白い銃を磨いていた…。  
竜馬と共に地獄兄弟を撃退した『仮面ライダーバース』こと『ティ  
アナ・ランスター』である。

今、彼女はバースになるより前から彼女の相棒を務めた銃『クロス  
ミラージュ』をハンカチで磨いていた…。

「アンタじゃ怪人相手はキツイからね。」

彼女のクロスミラージュは場合によっては近接にも対応できる優れ  
物だが、出力やその他諸々が怪人を相手するにはとても心細いので  
現在、彼女は戦闘はバースで済ましクロスミラージュをサポートと  
して運用している…。

「んん〜…!!一旦外出るか…。」

ティアナはクロスミラージュを収納し、伸びるとスプリングの外に  
出る…。

「ぶつ〜…」

ボキツ…ボキボキ…

首と肩を鳴らすティアナ…

そこへ…

ヒュルル〜…

ゴチン

「痛っ!?!」

何かが彼女の頭に当たった…。

「ちよつと〜何なのよ〜!?!」

そう言いながら彼女は自分にぶつかった『ソレ』を見た…。

「え?…これって?」

『ソレ』は明日の戦いの行く末を左右する重要な物であった…。

風都病院…

313号室…

「いやすまない。迷惑をかけたな…。」

小綺麗な病室のベッドで隼人は入れられていた…。

ブラポーは体に余りにも負担がかかり過ぎたのだから集中治療室  
にあり、斗貴子はそれに付き添っている…。

「隼人さん凄いですね！アレだけボロボロになってもこれだけ元気  
だなんて！」

「はは…頑丈で石頭ぐらいしか取り柄が無いからな…。」

カズキの言葉に苦笑する隼人…。

(全く…痩せ我慢しちゃって…)

翔子は壁に寄りかかり隼人の痩せ我慢を見抜いていた…。

「どれ…ジュースの1つでもおごってやるか…。」

「い、いえそんな…！」

「育ち盛りが遠慮するな。」

カズキが引きとめられながらもベッドから立ち上がる隼人。

「仕方ないわね…。ほら肩貸してあげるわよ。」

「ああ…大丈夫だ。問題無い。」

隼人は翔子に付き添われながら廊下を歩いていく…。

(いいな…俺だったら斗貴子さんと…)

後ろに妄想している奴がいたが気にしない。

カタン！！

「う…！」

その横で1人の青年が倒れる。

「あ！大丈夫ですか？」

あわてて助けに入るカズキ…。

「！」

そして、倒れた青年の顔を見て隼人は驚愕した…。

翌日…

風都郊外…

「フフ…とうとうこの時が来た…」

『エターナル!!』

寂れた研究所の屋上でまるで舞台を演じるが如く声をあげる早乙女  
…。彼はロストドライバーを身に付けエターナルメモリをスロット  
すると腕に赤い炎の様が入った白い三本角の異形、エターナルへ  
と変身する…。

「ああ…この時をどれほど待ちわびたことか…。妻を失い、娘を失  
い…余りにも多くの犠牲を払ってきた…。鍊金戦団<sup>レッキンノセンタン</sup>を追われひもじ  
い思いをした我々は今、贖罪をしなくてはならない…。それは鍊金  
戦団の連中…や地球の記憶を弄び我々に楯突いた奴らも同罪…そし  
て…それらを糧としてミチルは新たな誘い手となり蘇る…。さあ…  
愚かなる者共よ最後の夜明けに懺悔せよ!!!ムハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ  
ハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

「つるせえぞジジィ！！それはてめえらだけがやる事ダアアア！！」



丁の拾い物・決戦の夜明け（後書き）

さあ問題、最後の台詞を言ったのは誰でしょう？

1 四季

2 竜馬

3 キルバット

4 翔子

答えは次回。お楽しみに！

突入！！早乙女研究所！！（前書き）

今回と次回はバースさんからのコラボ！しかも2人！いや、3人かな？

一名は悪の科学者にとんでもないことをされました。

突入！！早乙女研究所！！

「うるせえぞジジイ！！それはてめえらだけがやる事ダアア！！」

「！？？」

響く声に驚くエターナル。頭上を見るとトマホークを振り上げたゲツトイクサが真っ直ぐ落下してきていた。

『ユートピア！！マキシマムドライブ！！』

「ぢっ！？？」

すかさずメモリを専用武器のナイフ『エターナルエッジ』にスロットしトマホークを受け止めるエターナル。

「ぐっ…ぐっ…」

トマホークはメモリの効果でギリギリの所で届かず見えない壁に押しあてられたかのようにうごかず呻き声をもらすゲツトイクサ…。

「ぶん…！」

「！？グワアアア！！」

エターナルはエターナルエッジを軽く振ると弾かれたかのようにゲツトイクサは吹き飛ばされる。

「が！ぐふっ！？」

彼はそのまま地面に叩きつけられた。

『アイスエイジ！！マキシマムドライブ！！』

「失せる！！」

さらに追い討ちをかけるべくエッジのメモリを変えるエターナル。そして右手を天に向けると巨大な冷気の塊が形成される。それは倒れたゲツトイクサに容赦なく放たれ…

ビキキキ…

巨大な氷の塊を作りだした…。

「…」

沈黙がしばらく流れ…

「チエエエンジン！！フォームスリー！！」

ガシヤアアン！！

新たな姿をしたゲットイクサによってそれは破られた…。

黄色く染まった鎧はさらに厚くなり足にはけたたましい音をたてる  
キヤタピラの足がついたその姿…

ゲットイクサ・フォーム3

機動力を犠牲にパワーと防御力に秀た形態である…。

「甘いわー!!」

『ウエザー!!カクガネドライブ!!』

今度は紅い稲妻の塊が襲い、その中にはエターナルの使用した核鉄カクガネの変形した武装錬金の刃が混じっている。

「うおおおおおおおおおオオオオオオ!!」

それでも直進するゲットイクサ…。

だが…

『シャアアアアアアアアアアアアアアアアア!!』

「何!?!」

ガン!!

突如現れた影に弾き飛ばされ元の姿に戻ってしまつ竜馬…。

「ダーク…キバだと!？」

コウモリを思わせる意匠の紅い鎧に緑の複眼…。背中に悪魔のような翼や目玉がついた尾が生えているなど『野獣』のようなライダー…。

しかし、竜馬の記憶にある元々のダークキバはマントをなびかせた紅い鎧のまさに『帝王』の名がふさわしいライダーであつた…。しかし、今彼の目の前で醜悪な外見をしているそれはまるで『野獣』…その身体の随所が肥大しておりそこから目玉がギョロギョロしている…。その名はダークキバ・ビースト。

(くそ…もう一度変身!?)

ここで竜馬は致命的なことに気がつく…。なんとベルトが先程の攻撃で大破していたのだ…。

『シャアアアアアアアアアアアアアアア!』

(マズイ!!)

危機に陥る竜馬にダークキバビーストの鋭い爪が迫る…。

しかし…

バンバン!!

『シャアアア!?!』

それは遠くから飛んできた弾丸に防がれた…。

ブオオオオオオオオ…

弾丸の飛んできた方向にはバイクが三台…

四季が乗る『ブラックデイケイダー』…

もう一つは翔子の乗る黒にメタリックな緑のラインが入った『ハー



ドボイルダー』…  
その背にはカズキが乗っている…。

三台目はクロスミラージュを構えるティアナと彼女の後ろに斗貴子  
を乗せた黒に黄色いラインの入ったバイク、『ライドベンダー』…。

「『変身!!』」

『KAMEN RIDE DECADE BLOOD』

『ジョーカー!!』

『カポーン』

四季、翔子、ティアナはそれぞれディケイド・ブラット、ジョーカ  
ー、バースに変身する。

「おのれ…懲りずにまたきおったか…。いや、ここはあえてよく来  
たと言わせて貰おう…。この愚か者めが!」

エターナルはそう言うつと建物内部へ戻っていく…。

「待ちなさい！おりゃー！！」

ハードボイルダーをスライディングさせ乗り捨てるジョーカー…。

ズカツ！！

『ギャ！？』

それはそのままダークキバ・ビーストに直撃する。

「翔子！！一瞬、くすぐつたいぜ！！」

『EVOLUTION RIDE JOKER』

「え？」

デイケイドBが一枚のカードをバツクルに装填するとジョーカーの身体に変化が起きる。

『サイクロン！！ヒート！！ルナ！！メタル！！トリガー！！』

ジョーカーのベルトに新たに5つのスロットが形成されメモリがスロットされる…。  
するとジョーカーの右腕は赤、右足は黄色、左手は青、左足は銀色に染まり、首からスカーフがなびき、さらにメタルシャフトやトリガーマグナムなどWの専用武装が装着される。

「仮面ライダージョーカー…フルスロットフォーム!!」

ここに6つの力を使いこなす更なる切り札『仮面ライダージョーカー・フルスロットフォーム』が見参した…。

「いくわよ…。」

『ジョーカー!!マキシマムドライブ!!』

早速、トリガーマグナムにロストドライバーからジョーカーメモリを引き抜きトリガーマグナムにスロットするジョーカーFF。

『サイクロン!!マキシマムドライブ!!』

『ヒート!!マキシマムドライブ!!』

『ルナ!!マキシマムドライブ!!』

『メタル!!マキシマムドライブ!!』

『トリガー!!マキシマムドライブ!!』

それに呼応して他のメモリの出力も上がる…。

「ライダー…プリズムシューティング!!」

狙いを定めトリガーを引くジョーカーFF…。するとトリガーマグナムから凄まじい虹色のエネルギー弾が放たれるとダークキバ・ビーストを弾きとばしエターナルの消えた建物へ大穴を開ける。

「よっしゃ!!」

そのまま内部へ突入するジョーカーFF…。それにカズキも続く…。

「よし、俺らも!!」

それに続こうとしたディケイドBたちだったが…。

『かかったな…。』

「!?!」

不吉なダークキバ・ビーストの声と共に地面のシャッターが開いていく…。そして現れたのは…

「ホムンクルス…!?!」

何ということかかつてカズキらが倒し、最早地球にいるはずの無い（一部例外がいるが…）存在『ホムンクルス』であった…。これには思わず斗貴子は驚く。

今回のホムンクルスは人形にかなり近くまるでミイラ男のようだった…。おそらく『ホムンクルスの中では』雑魚の部類だろう…。しかし、仮にもホムンクルス…。人間の通常の兵器は通用しない…。

『セルバースト』

そう、通用の兵器は…

ドゴオオオオン！！

「何？この程度？」

あっさり爆破されたホムンクルス…。離れた場所には胸部にプレス  
トキャノンを装備したバースが仁王立ちしていた…。

301

『中々やるね？そうだね？コーウェン君？』

『そうだね？ステインガー君？しかし、雑魚一匹倒した程度で凶に  
乗らないことだ…。』

「！」

ダークキバ・ビーストの言葉と共に更に更に地面からシャッターが開き

先程同様、ミイラタイプのホムンクルスが次々現れる…。

「ま、まずい…」

雑魚のドーパント程度の相手なら生身でできると踏んでいた斗貴子だが流石にホムンクルスの相手は無理があり他のライダーも物量の前に彼女を援護する余裕は無い…。

『シャアアアアア！！』

「！」

そしてダークキバ・ビーストが斗貴子に襲いかかろうとした…

その時…

プオオオオオオオオ…ン…

何処からか汽笛が聞こえ…

ガン!!

『『ぬあ!?!』』

そう思った瞬間にはダークキバ・ビーストは突如、空間を裂いて現れた謎の列車にはね飛ばされた…。

「…」

斗貴子は電車が現れたこと以前にそのデザインに驚愕する…。

金色の骸骨を模した先頭車両…

所々にあしらってある金色の装飾…

極めつけは『リア充撲滅!!』と書かれたラクガキ…

これは果たして電車なのだろうか…。



ウィーン…

「さあ、皆さんHello!Hello!ショッピングの時間ですよー!」

そう言いながら電車のドアから黒づくめの男が現れる…。商 喜助である…。

え?誰かって?数話前にカズキにとんでもないモノを売り付けようとしたあの変態強欲商人である…。

「ええ…津村 斗貴子様。津村 斗貴子様はどちらでしょう?」

「あ、はい私です…。」

彼女は嫌な予感がしながらも商の呼び掛けに答えてしまった…。

「ええと…貴女様にお届けものが届いているのですが…。いや〜ね。」

「?」

「配達手数料を頂くつもりかと思ひまして…」

「は？」

この場においてもあくまでもビジネスに走ろうとするこの男…。流石に斗貴子も呆れてしまう…。

「おい、とつとと渡してやれ！この強欲商人！！」

『そつだよー！』

すると商の後ろに黒いライダーが現れる…。

「W…！？いや、ジョーカー？」

そのライダーはWやジョーカーにあまりにも酷似していた…。しかし、左右を分けるラインは鋼色でありそして背には同様の色の大剣。黒いボディに赤と白のラインが映えている…。

『そう言えばトモ、ここって翔太朗さんたちとは違うWの世界何だっけ…？』

「そつらしいな…。この強欲商人の話によればな。」

右の複眼がチカチカと光る様子はWを彷彿させるが明らかにWより

とてつもない力を感じさせる…。

「あの…」

「ああ…ごめんごめん。僕『ら』は仮面ライダークロガネ…。また別世界のライダーさ。」

クロガネと名乗るそのライダーは商を足蹴しながらダークキバ・ピーストを見る…。

「あ、あれ…」

『ダーク…キバだよね？』

『シャアアアアアアア！！』

ダークキバの余りの原型の留めていなさに驚くクロガネ…。まあ、翼や尾や目玉を見れば仕方ないが…

『お〜い四季！！』

「！キルバット！！」

その脇で戦うディケイドBに飛来してくる銀色の影…。キルバットである…。

『四季！！あのダークキバの中に何かが入ってやがる！それが奴を暴走させてるんだ！！』

「何！？」

『俺が何とか引きずりだすから奴の動きを止めてくれ！！』

キルバットの指示でダークキバ・ビーストを取り押さえようとする  
ディケイドB。

「おい！！商！手伝え！！」

「嫌です。そんなことしても私には一文の得も無い……。」

クログネもそれに加わろうとし商も促すが彼はあっさり拒絶する。

「手数料だ。受けとれ。」

そんな彼に銀色のメダルをなげわたすクログネ……。

「ほう……ハグルマのセルメダルですか……。中々のレア物ですね……。良いでしょう。協力してあげましょう。」

商は懐から小包を斗貴子になげわたすと被っていたシルクハットから装着式のライダーベルト『電王ベルト』をとりだし腹に巻き付ける。

「変身。」

『G O L D f o r m』

パスをかざすと黒いスーツと仮面が纏われ、金色のデンカメンが装着される。知る人ぞ見れば『NEW電王』に近いと感じるだろう…。しかし、その尖った金色の複眼は本人の悪趣味さを主張しているかのよう…。

「貴方の価値…いくらですか？」

そして彼は『仮面ライダーゴールド電王』へと変身を遂げた。

「仮面ライダー？」

流石の商が仮面ライダーだったことに驚く斗貴子。しかし、そんなことはどうでも良いので小包の中身を開ける…。

中身は…

「核…鉄…？」

その六角形の物体は砕かれたはずの自分の刃…。『相棒』だったモノ…。

「また…一緒に戦ってくれるのか？」

こう語りかけた時、斗貴子は脈打つかのような鼓動を感じた気がした…。

「武装錬金…！」

高らかに声をあげ核鉄を掲げる斗貴子。

しかし…

カチユン

「え？」

核鉄はバルキリースカートにはならずベルトのように装着されただけであった…。

「な、何で!？」

焦る斗貴子…。そこへ…

「オイ、ガキイイ!!コイツを使え!!」

竜馬が自らの破損したイクサナツクルを斗貴子に投げる。

バシッ!!

斗貴子は無言でそれをキャッチすると迷いなく右手にはめ、ベルトの核鉄に接続した…。

突入！！早乙女研究所！！（後書き）

四季「なんとバースさんの『ダブルクライン』から仮面ライダーク  
ロガネが来てくれたぞ。」

クロガネ「ねえ…明らかにうちの身内大変なことになってない？」

もう1人のゲスト紹介は次回！！

そして斗貴子が新たに手に入れた力とは…？

次回『華麗なる女騎士』



華麗なる女騎士（前書き）

あと一話ぐらいで武装錬金篇終わるかも…

展開無茶苦茶だけど…

四季「細かいことは気にするな。」

そしてバースさんとのコラボ回第二回…!!

## 華麗なる女騎士

「変身！！」

斗貴子は反射的にそう叫び核鉄カウガネのついた六角形のベルトにイクサナツクルを接続した。

すると徐々に細かい粒のようなモノがパーツを形成していき鎧となる…。

「なっ！！…あれは…」

驚くディケイドB…

西洋の騎士を思わせる鎧…

顔の鎧の淡い青色の十字架…

仮面ライダーイクサに似たその姿は肩アーマーが無い、淡い青色のラインが入っているなど違いがあり全体的にシャープに見えとても凛々しい…。

「ハラワタをぶちまける！！」

彼女が叫ぶと同時に太ももあたりのパーツからアームが伸び、枝分かれすると鋭い刃を形成する…。

ブウン！！

「！」

彼女の変身が終わると同時にディケイドBのライドブッカーからカードが一枚飛び出す。

「ほう…『ヴァリキュリア』か…。」

それは彼女の変身した姿のカード…。その名はヴァリキュリア…『女戦士』と刻まれていた…。

「あれが新しいライダー…。」

『セリフが野蛮すぎない…？』

ヴァリキュリアの姿に驚くクロガネ…。

『シヤアアアアアア！…！』

「あー！やべー！？」

その一瞬の隙からクロガネとゴールド電王の包囲から抜けヴァリキ  
ユリアに飛び掛かるダークキバ・ビースト。

「はっ!」

しかしヴァリキュリアはアーム巧みに操作するとその刃できりつけ  
る。

『シヤアアア!』

『『こんなもの!』』

なぎはらおうとするダークキバ・ビーストだが…

ジャキ!!

アームはかつてのバルキリースカートのように脆くはなく折れるこ  
とは無い。

「はあああ!」

さらに仕返しと言わんばかりにアームできりつけるヴァリキュリア  
…。徐々にダークキバ・ビーストの随所がボロボロになっていく…。

「はあ！」

ザシユ！！

更に刃を精製し右手で持つとダークキバ・ビーストの右側の翼を切り飛ばすヴァリキュリア。

『ギヤアアアアアアアアアアアアアア！！』

悲鳴をあげながら転がるダークキバ・ビースト…。

そこに…

「おいさ。」

ザシユ！！

『ギヤア！？』

ゴールド電王が尾にデンガツシャー・ソードモードを差し…

「はあ！」

ズバツ！！

『『ぐう！？』』

クロガネが左側の翼を大剣で切り取った…。

『よし、今だ！！ガブツ！！』

身動きの取れないダークキバ・ビーストの千切れた翼に噛みつくるバット…。

『！！、ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！』

『！！』

「うわああアアアアアアアアアアアアアアアアアア！？」

3人の悲鳴を発しながら身体がボロボロとくずれていくダークキバ・ビースト…。その中から1人の気絶した少年とキルバットと色違いの赤いコウモリが現れる…。

『ふん…私の力に同類でも無い奴らが耐えられる訳も無い…』

キルバットは誇らしげに周りを飛ぶ…。

しかし…

『『まだ終わりだと思っなアアアアアア！』』

「「「！」「」」

剥がれ落ちた黒いそれは翼などを取り込むとスライムのようになり  
建物の中に姿を消した…。

「あ！待ちやがれ！？」

それを追おうとするディケイドBの前に大量のホムンクルスが立ち塞がる…。

「くそ！こんな時に…！？」

身構えるディケイドBだったが…

「チエエンジ！！ブラックフォーゼ！！」

『ガトリング ランチャー』

『リミットブレイク』

『セルバースト』

ズカアアアアアン！！



「!!!」

一瞬にしてそれは焼き払われた…。

「四季！先に行け！！」

「ここは私達に任せて！！」

そしてディケイドBの前に降り立つ竜馬の声の黒いライダーとバース…。

「悪い！！ここは任しておくぜ！！」

そう言つて建物の中へ入るディケイドB…。

「おい！商！！ここは手伝えよ！！」

『クロガネ！！マキシマムドライブ！！』

「全く…雑魚は鑑定する価値も無いというのに…」

『Full cherge』

またクロガネとゴールド電王もそれぞれ武器を構えホムンクルスを  
なぎ払っていった…。

その頃…

建物内…

早乙女研究所実験室…

「待っておれミチル…もうすぐ…」

愛娘の入るフラスコに手をあてるエターナル…。その周りには囲む  
ように核鉄が設置されコードが伸びている…。

「さあ…今こそ悲願が成就を迎える時！！」

「ちよつと待ったアアアアアアアアアア！！ジョーカーアアアアアアアアアア  
ンディング！！」

『ジョーカー！！マキシマムドライブ！！』

ズガン！！

エターナルが行動しようとした刹那…  
天井をつき破りジョーカーFFFがエターナルにメタルシャフトで殴  
りかかる。

「！」

『ユートピア！！カクガネドライブ！！』

すかさずメモリをスロットした核鉄で受け止めるエターナル…。

「むぐぐ…」

しかし徐々に押されていく…。

「爺さん？いい加減観念したら？」

「年寄りを甘く見るな!!」

すると後ろにあった核鉄を手にとるエターナル…。

『ユニコーン!!カクガネドライブ!!』

それは西洋式の槍に変化するとジョーカーFFを勢いよく突く。

「がはあ!」

突かれたジョーカーFFは宙を舞つと壁に叩きつけられ変身が解けてしまう…。

「ぐっ…まだまだ…」

もう一度変身しようとする翔子…。T2ジョーカーメモリを再度構えるが…

「ふん!!」

エターナルはそれを奪いとり翔子を蹴り飛ばす…。

「愚かな奴よ…。黙っていればあと少し長生きできたモノを…」

エターナルはそう呟くとT2ジョーカーメモリを核鉄にスロットす

る…。

『ジョーカー！！カクガネドライブ！！』

その核鉄を台座に置くと他の核鉄を取り出し他のメモリをスロットする…。

「さあ…成就する…。」

『ゾーン！！マキシマムドライブ！！』

『アクセル！！バード！！サイクロン！！ダミー！！インベーター！！ジーン！！ヒート！！インベーター！！ジョーカー！！インベーター！！ルナ！！メタル！！ナスカ！！オーシャン！！インベーター！！クイーン！！インベーター！！スカル！！トリガー！！ユートピア！！インベーター！！エクストリーム！！インベーター！！マキシマムカクガネドライブ！！』

他の核鉄にスロットされたメモリの出力が上がりそれらの核鉄はエターナルに取り込まれる…。

「はあ…はあ…」

『エターナル！！マキシマムカクガネドライブ！！』

最後にエターナルエッジにエターナルメモリをスロットするエターナル…。

「フハハ…！！残念だったな仮面ライダー…！！計画はここに成就した…！！冥土の土産に教えてやろう…！！」

高らかに勝ち誇った声をあげるエターナル…。

「T2コア計画…。これはワシの武装錬金の力で錬金術とT2ガイアメモリを融合させた力で最強のホムンクルス…『T2ホムンクルス』を作ることが目的なのだ…！！そして器には生身の人間が必要…。ワシはそれを目覚めぬミチルを選んだ…！！こうすればミチルも目覚め計画も実行できる。まさに一石二鳥じゃ…！！アーハッ…！！ハッ…！！ハッ…！！ハッ…！！」

「あなたそれで良いのか…！！」

「！」

突如、エターナルの声を遮る声…。

その声の主はカズキであった。それと同時に彼はサンライト・ハート+を構えジョーカーの開けた降りてくる…。

「あなたはそれで良いのか！！娘を化け物にして…色んな信じてきた人達の思いを無駄にして！！」

「ふん…ワシを信じる者など…」

「いるよ！あの大学の大学生の人とか！！」

「！」

昨日、カズキが隼人の見舞いにあつた青年がいた…。それはステインガーとコーウェンにアイスエイジDに変えられたあの大学生だった…。

「あの人はアナタの無実を信じてた！！利用されているだけだと信じてアナタを助けてほしいと言っていた！！その思いを裏切るのか！！」

「黙れ…」





それは狂った電子音声を出すと碎けてしまった…。

「あら？案外気付かないモンね…。」

得意げな笑みをする翔子…。

「本物のT2はこっち。そっちは私が前から使ってた方よ。」

そう言っ取り出したのは奪われたはずのT2ジョーカーメモリ…。現存しているライダーの使う純正のメモリとT2メモリは外見的には接続する箇所の色しか違わないので翔子は自分のメモリを塗装しそれを利用したのだ…。

「お、おのれええ!!！」

再度T2メモリを強奪しようとするエターナル…。しかし翔子は動かずフラスコを指差す…。

「もう止めなさいよ…。あなたの娘さんが泣いてるわよ…。」

「ほざけ…!？」

エターナルは無視して斬ろうとした…

だが彼は見た…

フラスコの中で自分の愛娘が目元にはうつすらと涙を浮かべているのを…

「ミ、ミチル…!？」

思わずエターナルエッジを落とし狼狽するエターナル…。

「さあ…お前の罪を数えろ…。」

翔子はエターナルの前に立ち告げた…。

「ああ…アア…」

そのままエターナルは戦意を喪失してしまった…。

『『』』で終われるかアアアアアアアアアア!』』』

「！」

しかし、そこへ黒い異形が現れエターナルの体内へ侵入する。

「が！？ああ……」

『エターナル・ビーストモード!!』

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

悲鳴をあげるエターナル……。

「な、何！？」

「なんだこれ！？」

思わず距離をとる翔子とカズキ……。

数秒後……

『ここで終われるか……』

『我らが悲願は潰えてはならぬ…』

エターナルから響くのは早乙女の声ではなくコーウエンとステイン  
ガ―の声…。

『『仮面ライダー！！錬金の戦士！！ここで始末してくれろ！！』』

『インベーター！！マキシマムドライブ！！』

華麗なる女騎士（後書き）

予想すらしてなかった…。

このままいけばクロガネとダークキバのコラボで終わりそう…。

四季「という訳で2人目のゲスト、バースさんとの仮面ライダー  
ダークキバこと登オトヤだ。」

オトヤ「ふう…めっちゃ酷い目にあつた…。」 ついさっきまでス  
ティンガーとコーウエンに取り付かれてた…。

四季「さして、次回のクライマックスまでの見せ場まで休んでろよ。」

オトヤ「ふあゝいず。」

次回『FFR』

ダキバット・キルバット

『次回も絶対見てくれよ！でない俺達は絶望にゴールだ！！』

バースさんもうちよい2人借ります…。

FFR(前書き)

長い…

そして長い…

自分でも今まで最長の長さを書いた…。

そしてバースさんコラボ有り難うございました。







「どろろしてこじなつた?」

少年オトヤは自身の記憶を辿ってみる…。

???分前…

とある街中…

少年、登 オトヤは母に頼まれお使いをしていた…。母は妊娠中なため無理はさせられないと家族総出で協力していた…。

「でもカフェ『スプリング』の『スイート詰め合わせセット』て何だよ…。」

『知らん。まあ、他の奴が手が開いてないから仕方ないだろ。』

「はあ…。カフェ『スプリング』って何処だよ…。」

オトヤは愚痴りながらも大事な母のため相棒、『ダキバット』を連れトロボと歩いていた…。

ズズ…



『奇遇だなオトヤ。私もだ。』

その後、見覚えのある人がいたような…グラスンと異形の科学者2人に何かされた気がするが気にしない…。

「それより…何このカオス…。」

オトヤが辺りを見渡すとバイザーがオレンジ色に光るバースと黒いマントをつけた凶悪な外見のライダー…

それとNEW電王の色違いの金と黒のライダーと見たことの無い黒いライダーが大剣を振り回し、ミイラのような異形と戦っていた…。

「何この黒の割合の多さ…。」

『いやいやそこじゃないだろ。』

オトヤの観点の違いに突っ込むダキバット…。

「まあ、とにかくあのミイラ達をどうにかすれば良いんじゃないかな。行くよダキバット!!」

『仕方ない…：光栄に思えミイラ共!!絶滅タイムだ!!ガブリ!!』

ダキバットを手にとると噛みつかせるオトヤ。

同時に彼の顔にステンドグラスのような模様が浮かび上がり、腰に鎖が巻き付くとそれはベルトになる。

「変身!」

『絶滅せよ!』

そしてオトヤは紅き帝王、仮面ライダーダークキバへと変身した。

「さて、行きますか!」

黒いマントをなびかせ次々と愛剣『ザンバットソード』でホムンクルスを切り捨てるダークキバ。

「あつちのダークキバは復活したみたいだな。」

安堵しながらホムンクルスを斬るクロガネ…。

そこへ1人の青年が現れる…。

「すこし遅かったかな?」

『え!?! フィリップ君?』

現れたのはWの右側ことフィリップ・ライト。それに右側の複眼をチカチカさせながら驚くクロガネ。

「おや? 見たことないライダーだね…。 実に興味深い…。」

『え? 何言ってるのフィリップ君?』

クロガネを舐めるように見るフィリップ…。 クロガネは戸惑いを隠せない。

ドゴオオン!!

「んん？」

それと同時に爆発が起き4つの影がフィリップの前に転がってくる。

「ぐはっ!？」

「ぐふっ!？」

最初の2つは無様に転がる四季とジョーカー…。

「だ、大丈夫かカズキ？」

「あ、ありがとう斗貴子さん。」

もう2つはカズキを抱え着地するヴァルキュリアだった…。

「おや？翔子、苦戦しているようだね。」

「うるさいフィリップ!!あんたいつまで待たせてんのよ!!」

「いてて!?!翔子よせ!!」

軽い調子のフィリップにボディブローをかけるジョーカー…。フィリップは悲鳴をあげる。

『え?しよ、翔太郎さん!?!』

「私は翔子だ！！パチもんジョーカー！！」

ガン！！

「『あふう！？』」

未だに驚愕続きのクロガネの顔面を蹴るジョーカー…。クロガネは痛さに顔を手で押さえる…。

「おい！！んなことしてる場合じゃねえだろ！！」

とうとう怒る四季。

「見る！！何かあつちの2人は桃色空間作ってんじゃねえか！！」

四季が指差す先は…

「斗貴子さん…こうしているのも久しぶりだね…。」

「ああ…そうだな。」

イチャイチャしているカズキとヴァルキュリア…。何故か顔を背けたくなる…。

この2人にゴールド電王が「リア充撲滅！」と叫び斬りかかってきたがもれなくバースがライダーキックで叩き落とした。

「さて、構えろお前から来るぞ!!」

竜馬の声が響くと突如、地鳴りがはじまる…。

そして…

ズガアアアアアン!!

『『うおおおおおおおおおおお!!』』

地面を突き破り目玉を大量につけた黒い異形を纏ったエターナルが姿を現す。

『『我々の邪魔はさせん!!』』

エターナルの叫びと共にホムンクルス達の変形を初め戦闘機のような形態になる。

「ホムンクルスが…」

「合体していく…」

そしてライダー達の直上で合体していき球体を形成するホムンクルス…。これには今までホムンクルスを相手にしてきたカズキとヴァルキュリア(=斗貴子)も驚く…。



『セルバースト』

「ファイナル!!ザンバット斬!!」

球体に向けて必殺技を放つバースとダークキバ…。しかし、今一つ効果は見られない。

『『愚かな!!失せろ!!』』

球体から目玉の大量についた触手を伸ばしライダー達をなぎはらうエターナル。その拍子にバースの変身が強制解除されティアナに戻ってしまう…。

『『ふん…』』

「がは!」

エターナルは右腕を変形し伸ばすとティアナの首にそれを巻きつけ彼女を手元へ持つてくる…。

『『愚かな奴だ。見てみぬ振りをすれば良かったものを…。いつの時代も馬鹿馬鹿しい正義感にとりつかれ愚行に走り身を滅ぼす者がいる…。貴様ら仮面ライダーなど良い例だな…。得にならんことをして自己満足を押し付け弱者を助けるとの名目で様々な野望を潰してきた…。』』

「ガア…アア…」

『『まあ良い…生まれかわれば少しは欲望に忠実な生き方ができる  
かもしれんな…?』』

そう言うとエターナルは苦しむティアナに開いている左手を向ける。  
すると左腕は肉を裂くような音と共に巨大な牙のように変形させる  
…。

「やめろおおおおお!!」

ダークキバの叫びが虚しく響きティアナは貫かれ…

『あぶね!』

ガン!!

無かった…。

エターナルの腕を受け止めていたのは銀色のコウモリ…。キルバットだった…。

『くぐく…』

無理にでも貫こうとするエターナルだがキルバットの牙の強度と力は予想外に強く拮抗していた…。

「くつ!!」

ドカツ!!

その際にティアナはエターナルを蹴り脱出するティアナ。それを確認すると空高く飛ぶキルバット…。

『さあ…お説教タイムだ!!』

キルバットに続き喋りだす四季…。

『ステインガー、コーウエン…。確かにお前らから見れば愚かに見えるだろうな。誰かのために戦ったり…誰かの泣く顔を見たくないとか言つて戦つたり…はたまた大義名分振りかざして戦つたりと救えねえ奴らばかりだろう…。だがな、俺達ライダー…いや、本当に強い奴らは『信じるモノ』や心の底から『守りたいモノ』があるからどんなに挫けそうになつても戦えるんだ。例えそれがただの自己満足だろうと、称えられなくてもお前らのような自分の欲望を振りかざし理不尽を与える連中と俺達は戦うんだ!!』

『『ふん…』』

煩わしくなったのかエターナルはエネルギー弾を発射するが四季は怯まない。

「例えてめえらが人の思いを踏みにじり欲望を満たすことが許されようとな…俺が…俺達はお前を許しはしない!!」

そう高らかに宣言しエターナルを指差す四季…。

『『貴様…何者だ?』』

「ただの仮面ライダーだ……。通りすがりのな!!」

そしてブラックディケイドライダーを装備する四季。

「変身!!」

『KAMEN RIDE DECADE BLOOD』

カードをブラックディケイドライダーに装填すると仮面ライダーディケイド・ブラットへ変身する四季。

ブウン!!

するとライドブッカーからカードが5枚飛び出る。

ディケイドBはその内の1枚のカードをバツクルに装填する。

『EVOLUTION RIDE DARK KIVA』

「一瞬、くすぐったいぞ。」

「え?」

そう呟くとダークキバの背に触れるディケイドB…。

「…こねって…」

するとダークキバの刺々しいパーツが丸くなりマントが弾け飛ぶと  
紅い翼が生え『ダークキバ・フェニックスタイプ』へと姿を変える  
…。

「私たちもいくわよフィリップ!!」

「そうだね翔子…。」

変身を解きロストドライバーからWドライバーを装着する翔子…。  
同時にフィリップの身体にWドライバーが出現する。

『翔太朗さんの女バージョンだあアア…!?!?』

ちなみにクロガネはまだ翔子に驚いていたとのこと。

『ジョーカー!!』

それに構わずT2ジョーカーメモリのスイッチを押す翔子…。

フィリップもサイクロンメモリを…

『クワッ!!』

取り出さず、左手に小型の恐竜ロボットを乗せるフィリップ…。

「いくよ… 『ファング』。」

『クワッ』

フィリップの声に反応し飛び上がると空中で変形し『F』のメモリ部分を露出させるファングと呼ばれた小型ロボット…。実はこれこそがWの7本目のメモリ… 『ファングメモリ』であった…。

『ファング！！』

そしてファングメモリのスイッチを押すフィリップ。

翔子はそれを確認するとWドライバーにT2ジョーカーメモリを差し込む…。するとT2ジョーカーメモリはフィリップの方のWドライバーに転送される…。

『ファング・ジョーカー！！』

そしてファングメモリをWドライバーにスロットするフィリップ。

ファングメモリはロボット形態の時の部分が変形しケラトザウルスの頭のような形になる。

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！

木枯らしが吹き荒れWへ変身するのは翔子ではなくフィリップ。逆に翔子は倒れる。そしてフィリップの姿は右側が白、左側が黒でデザインが刺々しいWの7つ目の姿…『ファンゲジョーカー』に変身する…。

「さて、いくぞー!」

「はい!」

『りょーかい。』

デイケイドBに続きエターナルに飛びかかるダークキバとW。

『『ええい!』』

デイケイドBをエターナルエッジで

ダークキバとWは球体からの触手で受け止められる。

『『おのれ…貴様らも気に食わぬ奴らを排除する我々とそう変わらないでは無いか!』』

「『『違つ!』』」



「まあ、そうだな。」

「『『『『『え？』』』』』」

エターナルの言葉を否定したダークキバFとWだがあるうことか説教たれたディケイドBが肯定。

「でもな、自己満足でも誰かのための満足と自分だけの満足の違いはあるんだぜ？」

『A T T A C K    R I D E    B L A S T』

フリースする奴らを放っておきライドブッカーをガンモードしてぶっ放すディケイドB。

ズガガガガガ！！

『『ぐわああ！！』』

全弾着弾しそのまま球体から落ちるエターナル。

「よし！っおお！？」

しかしそれと同時に変形を始める球体……。WとディケイドBは振り

落とされるがダークキバFは自らの翼で舞い上がる。

「おお！やべやべ！！」

『FINAL ATTACK RIDE DA DA DARK K  
IVA』

デイケイドBは落ちる最中バツクルにカードを装填するとスカーフが弾けとびダークキバF同様の紅い翼が生え飛翔する。

「あ！てめ汚ねえ！！」

しかしWはそのままエターナルを追って落下する。

「うわあ……」

『……』

一方、ダークキバFは変形した球体の様子を見ていた…。

『シャアアアアアアアアアアアア！！』

今やそれは黒く禍々しい翼を広げた翼竜と言っても良いだろう。そこからじゅつに目玉がついてることを覗けば…。

『フェニックスネオの方がまだ可愛げがあったな。』

「冗談きついでダキバット…。」

目の前の異形『インベーターワイパーン』とザンバットソードを構え向き合うダークキバF。そこへディケイドBが飛翔してくる。

「よう！ダークキバ。タイミング併せる！！」

「え？あ、はい！！」

この人何で飛べるんだろうとかWはどうしたんだろうなんて思いながらダークキバはライドブッカー・ソードモードを構えるディケイドBと同じ構えをする。

（確かに今まで戦ってきたことは自己満足かもしれない…だけど！！）

ダークキバは思いを乗せザンバットソードを構える。すると刀身が徐々に光を帯びる…。

（けど！！これからも仮面ライダーとして…1人の人間として…大切な人達や誰かを守る事にはかわりはしない！！）

「双撃！！スーパーファイナルザンバット斬！！」

頭に思い浮かんだ技の名を叫びとてつもない大きな斬撃を放つディ

ケイドBとダークキバF。

『グゲエエエエエ!?!』

インベーターワイパーンも汚物のプレスで応戦しようとしたが呆気なく三枚に卸される。

『『うぐぐ…おのれ!!』』

「余所見してる暇は無いわよ!!」

『アームフアング!!』

悔しさに唸るエターナルに容赦なく右腕の刃できりつけるW。

『『おのれ!!』』

「おっと。」

苦し紛れに腕から触手を飛ばすエターナル。Wはこれをかろうじてかわすが

「!!」

その先には無防備なカズキが…

「バルキリースカート!!」

ズバババババ!!!

しかし、触手はヴァルキュリアのアームの刃により細切れにされる。

「さあ!!!ハラワタをぶちまける!!!」

ヴァルキュリアが叫ぶと同時に彼女前にカズキのサンライト・ハート+の色違いの帯のついた淡い青色の突撃槍『ヴァルキュリア・ハート』が精製される。

「うおおおおおおおおおおお!!!」

アームの刃もヴァルキュリア・ハートの切っ先もエターナルに向け突撃するヴァルキュリア。

ズカン!!!

『『グギヤアア!!!』』

ヴァルクユリアに撥ね飛ばされ転がるエターナル。

『ま、まずいよステインガー君!?!』

『う、うん!?!そうだねコーウエン君!?!』

エターナルに取り付いた異形『インベーターD』はエターナルを棄て逃げようとするが…

「逃がすか!?!」

早乙女の意識で動くエターナルが2体の異形を掴み動きを止める…。

「仮面ライダー…そして未来を創る若者たちよ…。年寄りの尻拭いをさせて悪かったな。今、私にできるのはその尻拭いだけじゃ…。さあ…やるんじゃ!?!」

『『は、放せエエ!?!?』』

必死にもがくインベーターD…。しかし、エターナルは離さない。

「いくぞお前らー!!」

『FINAL FORM RIDE W FANG JOKER』

Wの横に降り立つデイケイドB。同時にカードをバツクルに装填する。

「細かいことは気にするな。」

「『えっ?ぐふ!?!?』」

デイケイドBがWに触れるとWの身体が左右に別れ2人になる。

『ファング・サイクロン!!』

「しよ、翔子?」

『ファング・ジョーカー!!』

「フィリップ?」

右側はフィリップの意思の左側がファンゲジョーカーと色違いで緑のWファンゲサイクロン。

左側は翔子の意思だけのWファンゲジョーカーとなる。

「よし！いくぞー！」

『FINAL ATTACK RIDE D D W』

『『ファンゲ！！マキシマムドライブ！！』』

「『『トリプルストライザー！！』』」

ディケイドBがさらにカードを装填すると同時に足首に刃が出現したWFCとWFJは両者共にファンゲメモリの出力が上がる。

そしてWFCの緑の疾風を纏った回転蹴りが向かって右側のインベーターDに

WFJの紫の炎を纏った回転蹴りは向かって左側のインベーターDに

ディケイドBの紅く輝く回転蹴りはエターナルのマキシマムスロットに当たる。



「ふふ…さらばだ…ミチル…」

そしてエターナルは最期の言葉を残し2体の異形諸とも爆発の中に姿を消した…。

グチュグチュ…

しかし主無くしても触手を生やし逃走を謀るインベーダーメモリ…。地面を這いずり難を逃れようとしたが…

『クログガネ!!マキシマムドライブ!!』

「はあ!!」

バキン!!

残っていたクログガネとゴールド電王の手により破壊されたのであった…。

## FFR（後書き）

次回…

『WVS 武装錬金篇』 最終回…

そしてバースさんとのコラボ回は今回で終了。

バースさんありがとうございました。

翔子の逆鱗・Nの世界へ（前書き）

前回のバースさんとのコラボ内容に関する展開がありますね…。

そしてあの3人がレギュラー入り…

さらに!？

## 翔子の逆鱗・Nの世界へ

戦闘終了後…

鳴海探偵事務所…

そこには事務所の机に座りタイプライターで報告書を纏める翔子の姿があつた…。

報告書

『T2コア事件』

今回の事件は元々別件のドーパントを追っていた時、明らかになつた『T2コア計画』。錬金術など信じがたいことが多かったがこの街を訪れたカズキ、斗貴子、ブラボーこと防人により私達の知らない『錬金戦団』レンキンノセンダンなどについて明らかになった。

そして、この事件に至る経緯は『錬金戦団』を裏切ったコーウェンとステインガーが早乙女 賢博士の妻と娘の不安定な状態を竜馬し

彼の『武装錬金』で錬金術と『ガイアメモリ』を併せた『T2ホームクルス』と呼ばれる生物兵器を産み出そうとしていた物だった…。しかし、この計画は異なる世界：恐らく『次元世界』ではなく『並行世界』の仮面ライダーと思われる者達とWとカズキ達の活躍によって阻止された…。

この時、仮面ライダーバースことティアナ・ランスターとも遭遇した。恐らく彼女も何らかの事情を知ってると思われる…。

そして、何より気になる存在は『紅蓮の破壊者』と呼ばれたライダーのことだ…。彼は一体何者だろうか？Wにも作用するあの力は一体…。

「はあ…」

ここで一旦休み、椅子に寄りかかり溜め息をつく翔子…。しばらくして彼女は再びタイプライターを打ち出す…。

この事件の後、ステインガーとコーウエンは刑務所に送られ早乙女は意識不明のまま眠り続けている。恐らく肉体に負担がかかりすぎたのだろう…。そして、皮肉と言うべきか彼の娘である『早乙女ミチル』もあのあと目を覚ました…。出来ることならステインガーやコーウエンの考えた『T2コア計画』のおかげだとは思いたくない…。それと彼女は父『賢』が目覚めるまで面倒を見るつもりだよだ…。

その後、並行世界のライダーは数名を残し風都を去った…。現在『紅蓮の破壊者』の存在はまだ確認されているためこの報告書が纏ま

りしだい話をしてみようと思う…。

追記…

警察が表だつて動く前に事件が沈静化したためステインガーとコー  
ウエンはガイアメモリ使用の罪で投獄、後『錬金戦団』に引き渡さ  
れるようだ…。そして、この事件を切っ掛けに出来た新たな友人、  
3人とまた逢える日を願う…。

「ぶっ…」

報告書を仕上げ伸びると椅子から立ち上がり窓に寄りかかると窓か  
らこの街のシンボルである巨大風車『風都タワー』を眺めていた…。

場所は変わり風都外れ…

「…」

斗貴子は新たな力を宿した相棒『バルキリードライバー』を持ち空を見ていた。バルキリードライバーは核鉄にイクサナツクルが一つになった形状を現在はとっており2つにそれぞれ切り離すことは出来ないようだ…。

(私の…新しい力…。きつともう使われることが無いだろう…。それでも、また私の所に再びきてくれたんだ…。ありがとう。)

斗貴子はバルキリードライバーを優しく握る。ちなみにバルキリードライバーは四季が商に斗貴子の核鉄の修理を依頼した時、商が「面白そうだから」との理由で改造したため出来たらしいということを知り、クロガネと呼ばれたライダーから聞いた。まあ、イクサナツクルが無ければ変身出来ないのは想定外だったら嬉しいが…。それと元々イクサナツクルの所持者であった竜馬も快く譲ってくれたこともあったので彼女は所有権の心配はしていない。

そして、ブラボーも回復したため現在荷物をカズキが車に纏めていく。

風都拘置所…

「ひっ…ひい…」

そこでは破壊された牢屋の隅でスティングーとコーウェンが黒づくめの男に命乞いしていた…。

「ここまで大きな失態を犯すような輩は必要無いのですよ…。」

しかし、男は袖から灰色の触手を伸ばし…

ザシュ！！

「「ぎゃあ…。」」

スティングーとコーウェンの胸を貫いた…。すると2人の身体は青い炎をあげながら灰となり崩れ落ちる…。

「我らが『大シヨッカー』に栄光あれ…。」

男はそう言うと彼の後ろに出現した異形が蠢く黒いオーロラの中へ去っていった…。

風都タワー…



風都のシンボルである巨大な風車…『風都タワー』。その風車の影から写真を撮る四季を望遠鏡で眺める少女…。

「ダーリン、こんな所にいたのね」

少女は金色の鷲が刺繍された黒い帽子を被り銀色の長い髪をなびかせていた…。

「まあ、ここにあるお宝も頂いたし会うのは次でいつか」

少女は望遠鏡を外すと澄んだ蒼い瞳が露にする。そして、少女は脇に置いていたトランクに手をかけ開けるとそこには核鉄と四季たちによって破壊されたはずのT2ガイアメモリが入っていた…。

「近いうち会おうねダーリン」

彼女はトランクを閉じると背後に出現した蒼いオーロラへ消えていった…。

別の並行世界…

黒いヘリコプターから身を乗りだし双眼鏡を覗きながらゴツい男は携帯をいじっている…。

「おい大将！あれが例の『クロガネ』って奴ですかね？話聞く限り

かなりの大物らしいじゃねえですか？…」

『…』

「はっ！ご冗談を！！余りに楽しみで武者震いしてますよ！！」

『…』

「大丈夫ですって！俺の『サイガ・スローネ』はそう簡単に落とされやしませんよ…。何せ『新しい牙』もつけましたからね…。」

『…』

「了解でっさ！んじゃ…」

男は携帯を切ると赤毛の髪と髭を揺らし狂暴さを現す眼光を走らせ舌なめずりをする。

「さあ…楽しませてくれよ…『仮面ライダークロガネ』。」

P…P…P…

そして、男は携帯を3、1、3と入力するとエンターキーを押す…。

『standby ready』

「回りに敵影なし…」

男は周囲を確認するとヘリコプターから飛び降り…

「変身!」

『complete』

電子音声の鳴り響く携帯を巻き付けていた機械仕掛けのようなベルトに挿入した…。

すると男は赤いフォトンブラットの輝きに身を包み深紅の弾丸となると地面を這うように飛んでいった…。

カフェ『スプリング』…

どうしてコイツらがいるんだ?

四季はそう思った…。彼の視線の先には…

困った顔をするオーナーと…

土下座するシュテルと…

正座しているレヴィとロードであった…。

鳴海探偵事務所

上機嫌のレヴィとロード。

そこには大量にピザなどのご馳走が並んでいる…。

「王様…どうしたんですかこれ？」

恐る恐るきくシュテル…。

「ふふ…今回事件が片付いたからな。そのお祝いじゃ…！苦しゅう無い、たらふく食え…！」

ロードは偉そうに答える。

「で？代金は？」

「「アレ」」

そう言ってレヴィとロードが指さしたのは破壊された日々の生活費が貯金されている金庫……。中身はすっからかんである……。

「王様！！あれはマズイです！！！」

「大丈夫、バレやしない……」

「ほじっ?」

「「「!」「」」

シュテルの叫び虚しくすでに彼女らの前に翔子がいた…。これには  
ロードも焦る…。

「お前ら今回は依頼じゃないから収入無いってのに…」

翔子は青筋を浮かべながら壁に手を突っ込むとメダガブリューを取り出す。

「何しとんじゃ!?!でてけ!?!」

そして…

「ぬお!?!」

「あう!?!」

「何で私まで!?!」

ロード、レヴィ、シュテルの順番で事務所を締めだされたのである

…。  
そして、宛の無い3人は再び『スプリング』を訪れたのである…。  
「お願いします!!! お願いします!!! お願いします!!!」

土下座タイフーンのシュテル…。さすがにこれには哀れみを覚える。

『ゲヘヘ〜良いじゃねえか四季…。可憐なレディが3人も増え…』

「失せる変態コウモリ!」

下心丸出しのキルバットを鷲掴みにして壁に叩きつける四季…。しかし、すぐ彼はその行動を後悔した…。

その壁紙は絵が描かれておりそれは並行世界によって違う絵になる。そして今それはキルバットの当たったショックで上から新しい絵が降りてきた…。

つまりそれは…

新しい世界に四季たちは移動したことを意味していた…。

翔子の逆鱗・Nの世界へ（後書き）

今回は『BLEACH・クウガ篇』開始

といってもほぼ原作関係ないけどね。

次回もお楽しみに！

ティアナ「それでも私がバースだ。」



喧嘩（ブリーチ・クウガ篇開始）（前書き）

WVS武装錬金篇おわり、ブリーチ・クウガ篇。

まあ、ブリーチの設定とはほぼ無関係なので単純にクウガ篇と見てくれれば良いような気がします。

喧嘩（ブリーチ・クウガ篇開始）

「ここは…何処だ？」

四季は気がつくともた荒野に立っていた…。

そこにはディケイドBを囲むライダーと様々な戦士たちの姿があった…。

そして、その戦士たちの先頭に立ち率いる女性…。

それは…

「シュテル…？」

午前8時3分…

カフェ 『スプリング』…

起床した四季は寒さに凍えながら自室かへ出る…。今回の世界は冬でクリスマスが近いのだらしく外は雪が降っている…。

普段のスプリングならその流れに応じてクリスマスの飾り付けをする…

のだが…

「嫌アアダアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

「嫌じゃアアアアアアアアアアアアアア!!」

「…」

イレギュラーが3人…

Wの世界から誤ってついてきてしまったレヴィとロード、そしてシユテルである…。この3人は世界が変わってしまったては行く宛も無いため仕方なく居候させている…のだが…

「「嫌アアダアアアア!!」」

四季はタダで飯を食わすつもりは毛頭に無く店の仕事を手伝わせようとしたらレヴィとロードは激しく嫌がりシユテルは呆れている…。

「ツリー出すだけ…」

「「嫌だ!」」

「店にこの飾り…」

「「嫌だ!」」

オーナーも色々条件をつけてみるが2人はことごとく拒絶する…。

「全く…塵芥風情が…我を働かせようとは何事ぞ!」

「そつだ!そつだ!僕達だって好きでここにいる訳じゃないんだから!」

「お二人共、居候という身分を理解していますか?」

完全に立場を理解しない2人にさりげなくツッコミを入れるシュテル。

そこへ…

「良いぜ。何もしなくても…」

「「え?」」

意外なことにそう言ったのは四季だった…。困惑するレヴィとロード。

「レヴィ・ザ・スラッシュャー ロード・アーチェ 雷刃の襲撃者なり闇の王だの大層な名前つたて名前負けだよな

」?」

「「んん？」」

「所詮いくら大層な名前をしてようと態度や文句ばかり言って何もしないんじゃない役立<sup>ず</sup>も良いところだぜ…。」

「ちょ！？四季さん！！」

「これじゃ寄生虫だぜ…。」

「「…」」

シユテルの静止も聞か<sup>ず</sup>レヴィとロードを挑発する四季…。

「良かろう…。」

とつとつ拳を震わせながら立ち上がるロード…。  
続いてレヴィもムツとした表情をして立ち上がるレヴィ…。

「王としての誇りにかけて…見せてやろう。我らを侮辱した者の末路を…！」

こつして四季vsロード&amp;mp・レヴィの戦いの火蓋が切られた  
…。

一方…

とある街角…

「なんだてめえ？」

たむろしていた不良の群たちがオレンジ色の髪少年を取り囲んでいた…。少年は屈強な体つきで目付きも良くない。服装はグレーの制服から高校だと思われる…。

「質問、1…あれは何でしょう？そこの臭そうなお前！」

「え？俺？」

少年は不良のうちのヒゲの濃い1人を指差す…。

黒崎 一護

職業：高校生

髪の色：オレンジ

瞳の色：ブラウン

特技…

少年は電柱の近くで倒れている小さなビンの花瓶を指差す…。

「ええつと…それは俺たちがスケボーして倒しちゃったか…」

「大正解!!!」

バキッ!!!



「みっちゃん!？」

不良の1人はそれに答え終わらないうちに少年に殴り飛ばされ仲間の不良が悲鳴をあげる。

黒崎 一護

職業：高校生

髪の色：オレンジ

瞳の色：ブラウン

特技…

「質問その2…悪いことしたら何しないといけない？」

少年はさらに新たな質問をする…。

「そ、そりゃ謝らない…と…!？」

不良たちは言葉を言い終える前に顔がひきつる…。

「そうだよなあ〜？謝らないといけないよなあ〜？」

黒崎 一護

職業：高校生

髪の色：オレンジ

瞳の色：ブラウン

特技…



幽霊の少女の声を聞くや否や凄まじいスピードで逃げていく不良たち…。少年はそれを見送る…。

「これでしばらく寄り付かねえだろ。悪かったな。こんな真似させて…。」

『ううん。私もあの人たちには迷惑してたもん。それに手伝って貰ったんだもん。これくらいいしなきや。』

少年は幽霊の少女に優しい声をかける…。幽霊の少女の方も虚な表情から笑顔になり少年に笑みを向ける。

「わりいな…。本来なら『生きてる内に』助けられりや…。」

『ううん…お兄ちゃんは悪くないよ。お兄ちゃんだって頑張ってくれたじゃん。』

「でも…」

『良いよ。それより生きてる人を助けてあげて。私のように不幸な死に方をする人がこれ以上増えないように…。』

少女は落ち込む少年を慰める…。しかし、死人のためか腕はすり抜ける…。

「そつだよな…。凹んでる場合じゃねえよな。悪かった…。」

少年は吹っ切れたように立ち上がる…。

『頑張つてね。』4号のお兄ちゃん『!?!』

「おう!お前もとつと成仏しろよ!?!」

少年、『黒崎一護』は幽霊の少女に見送られながらその場を後にした…。

しかし…

「あれが『クウガ』か。前は『クロガネ』を仕留め損ねてポーナス逃したからな…。」

2人は離れた電柱から見ている携帯を構えた男に気が付かなかった…。

一方…

カフェ『スプリング』近くの広場…

『KAMEN RIDE DECADE BLOOD』

「セツエトアアアップ!!」

四季はデイケイド・ブラットへ変身。レヴィとロードは黒装束の「スチューム防護服『バリアジャケット』」を装備する。

「翔子から話は一応聞いてはいたが本当に魔法とやらをつかうとはな…。」

「ふん！恐れいったか!!」

得意げなロード。デイケイドBはWの世界にいた時、翔子からシユテル、レヴィ、ロードが『魔法』とやらを使うという話は食い逃げ騒動で反省をさせた時間いた…。しかし、実際見るのは初めてである。

「ほらやってみるよエクスペクト・パトローナ？」

「ご希望に応じて!！」

ディケイドBは軽く挑発するとロードは何やら分厚い本構えると三角の白い魔方陣が形成され砲撃が放たれる。

ズドン!!

「うお!? あぶねえ!! 『魔法』じゃなくて『魔砲』じゃねえか!」

「余所見してる暇ある?」

砲撃をかわしたディケイドBだがその背後にレヴィが素早く回りこむ。

「それぞれ!!」

ガンガン!!

「う!？」

レヴィの構えたシアン色の刃の鎌がディケイドBをきりつける。ディケイドBにとって威力は大したことは無いが素早さと手数が多さは厄介である。

(ロードはおおざっぱだからいいがレヴィは厄介だ。なら…!)

デイクライドBはライドブッカーからカードを取り出す。

『KAMEN RIDE ACCEL』

デイクライドBはそれをバツクルに装填するとブラックデイクライドライバー以外の姿が変わり仮面ライダーアクセルの姿をかりた姿DBアクセルへと姿を変える。

「隼人と同じアクセル!？」

DBアクセルに驚くロード。その隙を突かれ…

『ATTACK RIDE JET』

DBアクセルがバツクルから取り出したエンジンブレードから放たれた蒸気のプラズマ弾を食らうロード。

「王様!」

それに気おとられるレヴィ…。その内に新たにカードを装填するDBアクセル。

『FORM RIDE TRIAL』

P…P…P…PPP!!



DBアクセルは電車音のカウントが鳴ると黄色い装甲に一瞬変わる  
と4回目の電子音で青い装甲に変わる。変化はそれだけではない。  
頭部もバイクのヘルメットのように銀色のフレームが付き、バイザ  
ーもオレンジ色になる。さらに胸部の装甲も機械のそれようになり  
肩パーツも丸くなる。

「さあ！！振り切るぜ？」

ついでに背中の中のバイクのタイヤもぶっ飛びDBアクセル・トライア  
ルへと姿を変える。

「はっ！！！」

ズガガガガガ...

DBアクセルTは素早く動きでレヴィの後ろに回りこみマシンガン  
のような拳の嵐を放つ。

「くっ！？」

レヴィもガードをして対抗を試みる。確かにトライアルは通常のア  
クセルに比べればパワーも防御も劣る...

だが...

ズガガガガガ…

「うっ…」

その代わり…

ズガガガガガ…！！

「うっづく…！！」

手に入れたのは…

ドゴシ…！！

「ぐふ！？」

速さであった…。

「あっうっうっうっ…！！」

DBアクセルTの拳を受けロードの隣に転がるレヴィ…。

「さて、お仕置きの手骨タイムだ。」

『FINAL ATTACK RIDE ACCEL』

ビュン！！

そして必殺技のカードをバツクルに装填したDBアクセルTは風を切る！！

「ハアアアア！！」

ズガガガガガ！！！！

その勢いのまま2人の間に立ち同時に拳をいれるDBアクセルT…。そして、彼の姿に青い拳の残像が「T」のオーラをかたどる…。

「7・9…大体それくらいがテメえらの絶望までのタイムだ。」

DBアクセルTは拳をうちやめそう告げるとそこに爆発が起こった…。

喧嘩（ブリーチ・クウガ篇開始）（後書き）

黄色いアクセル（ノット、ブースター。トリアルまでの途中の奴）は『幸運のアクセル』と呼ばれるのだらしい。

何でだろう？

隼人・照井「俺に質問するな！！」  
Wアクセル

伊達（前書き）

クリスマススイブだけど普通の話。

ゲストはタイトル見ればわかるよね？

答えはきいてない

## 伊達

レヴィとロードをぶちのめした四季は2人をシュテルに任せ街をブラブラしていた…。

街はクリスマスが近いためかライトアップされておりカップルもちらほらと目立つ…。

悲しいことに四季には彼女はいない。流石にどこぞの強欲商人などのように『リア充撲滅!!』とかやるつもりは無いが…。

「はあ…」

それでも独り者にとってはカップルたちの熱々クリスマスは何だか心にすきま風がふくような思いである…。

四季もまた例外ではない…。まあ、彼は元々、パラレルワールド並行世界を行き来するため仕方ないのだが…。

(一緒に旅についてきてくれる娘がいればなあ…)

そんなことを思う四季。もちろんそんな奴はそういるわけない。一瞬、シュテル、レヴィ、ロードが浮かんだが彼女らは元々Wの世界の住人のため無理である。

レヴィとロードは性格上問題ありだが…

そんなことを考えている四季…。

そこへ…

「四季ちゃん!!」

「!」

話かける人物が1人…。

若いピッチピチの女の子…

ではなく浅黒のサンタの格好をしたおじさんだった…。

「伊達さん!?!」

四季はその人物を知っていた。格好は違っがかつて四季が旅の途中で助けられた『戦う医者』『元祖、仮面ライダーバース』こと伊達明であった…。

「いや、クリスマス近いからさこれくらい稼ごうと思って。」

といて右手の人差し指を立てる伊達。ここで四季は伊達の後ろにおでんの屋台らしき物とその隣で大量の『MG仮面ライダーバース』を売っている若い2人のトナカイの着ぐるみを着た男とサンタ装備のティアナの姿があった…。

「何で俺がこんなことしてんだよ!?!」

「師匠、まだノルマは先ですよ。」

「仕方ないです。とっとと仕事して下さい。」

トナカイ男はづいぶん文句を言っているようだがティアアナともう一人のトナカイ男がそれを宥める…。

「俺帰る！フェイトちゃんとデートして…。」

トナカイ男妄想中…

「凄いわアキラさん！！これどうしたの？」

トナカイ男の前には金髪の美女が…

「フフ…ちょっと奮発したんだぜ？」

トナカイ男は美女の座るテーブルにご洒落た料理を置く。

「お味はどうかかな？」

「うん！！おいしい！！！！」



「なら俺はフェイトちゃんを頂こうかなアアアアア!?」

『『トリルアーム』』

「ギヤアアア!?」

トナカイ男の妄想は唐突に終わりを告げた…。なぜなら欲望垂れ流しのトナカイ男の顔にティアナともう1人のトナカイ男が装備した顔に直撃したからだ。

「何しやがるティアナ!!後藤!!今良い所だったじゃねえか!!」

『『ブレストキャノン』』

「すみませんでした。」

トナカイ男の頭の装備がとれ浅黒い若いアジア系の顔立ちが明らかになる。

「伊達さん…あの人は？」

四季は伊達に妄想トナカイ男について聞く。

「ああ、アキラちゃんって言ってね…。フルネームはアキラ・G・ダイソンって言ったっけ？他の世界の同業者かな？」

「成る程…。」

何やら頼りない説明をする伊達。一応、四季も納得はしたので問題ない。

「もうやってられかアア…！」

「あ！待ちなさい…！」

アキラと呼ばれた青年は猛ダッシュで逃走しティアナがそれを追う。もう1人のトナカイ男は呆れているだけだ…。

「後藤ちゃんに行かないの？」

「俺はあの馬鹿師弟に関わるつもりはありません。」

伊達に後藤と呼ばれたトナカイ男は頭の着ぐるみを外すと白く端正な顔立ちの日本人であることがわかった…。

「自己紹介まだだったな。後藤 慎太郎だ。仮面ライダーディケイド・ブラット。」

「こちらこそ西門 四季だ。よろしく。」

後藤と握手をかわす四季…。

その時…

「キヤアアアアアア！」

「「「！」「」」

悲鳴が響き渡った…。

とあるショッピングモール…

そこでコウモリのような怪人が暴れ回っていた…。その怪人をとり囲む警官隊…。銃を発砲するも大した効果は見られ

ない。

「怯むな！奴をここで逃がせば更に被害がでるぞ！！」

警官隊の先頭に立つ女刑事が必死に声を張り上げ指揮をとるが突破も時間の問題は明らかであった…。

(くっ…一護は何をしている！？)

女刑事はとある少年を思い浮かべるも無い物ねだりしてもどうしようもないため銃を構え直す…

『シャアアアアア！！』

「！！」

怪人はそれより早く彼女に襲いかかった…

「おら！！」

ズカ！！

それは新たに現れた赤い異形の手によって防がれた…。

『く、クウガ！！』

怪人は殴り飛ばされ起き上がると自分の殴りつけた異形に向け叫んだ。

同時にその場に駆けつけた四季と後藤と伊達…。彼らの見たのはコウモリ怪人と対峙するライダーを見たのであった…。

「仮面ライダークウガ…」

ふと呟く四季…。彼は赤いライダーについて知っていた…。金色のクワガタのような角に赤い複眼に人間の身体のフォルムに近い鎧…。

彼はこの世界のライダー『仮面ライダークウガ』であった…。

「おら！」

バキッ！！

容赦なくコウモリ怪人『ズ・ゴオマ・グ』を蹴るクウガ。

『ぐえー！！』

めげずに飛び上がり滑空攻撃を仕掛けるゴオマ…

バキッ！！

『ぐええ!?!』

しかし、それもクウガの蹴りが顔面に直撃し無様に転がる…。

「3号…確かお前光が苦手だったよな？」

『ギエ?』

ゴオマの首を掴みながら訪ねるクウガ。ゴオマは目の前にある出入口を見て全てを理解した。

「オラ!オラ!オラ!オラ!オラ!オラ!オラ!」

『ギエエエエエエ!?!』

そのままゴオマをひきづり外へ飛び出すクウガ。

『グヒヤ!?!』

地面に放りだされたゴオマは突如苦しみます。何故なら彼は日の光が苦手でありその代わりシヨッピングモールで暴れていたのだ…。

「さーて、決めるか。」

そう言うと姿勢を低くするクウガ…。

「はあああ…」

すると徐々に右足に電撃が纏われていく…。

『！』

ゴオマも危険を悟り飛びたとうとするが…

「オラアア！！」

クウガの必殺技のライダーキック『マイティキック』の直撃が早かった…。

『グエエエエエエエエエエエエエ！？』

ドカアアアアーン！！

そして背に見事に決められたゴオマは蹴られたあとに封印の紋章を浮かべ爆発した。

一方…

とある路地…

『…』

不気味な雰囲気を纏った女が鎌を構えていた…。

『これよりゲゲルを始める…。』

女は不気味な言葉を残すと目の前にいるサンタの格好をした女性との距離を積めていき…

『振り向くな…』



伊達（後書き）

クリスマススイブにガリマ姉さん登場。恐ろしい…

クウガは誰かは…バレバレだ。

『振り向くな…』

振り向いたらまど ギのママさんの仲間入りです。

まど ギ見たことないけど…

師弟（前書き）

今回、ティアナバース再び…

2人のバース…

片方は赤色にバイザーを光らせ、片方はオレンジ色に光らせる。

そして、互いにバースバスターを構える…

仮面ライダーディケイドと紅蓮の破壊者

このあとすぐ…！

## 師弟

『振り向くな…』

鎌を持った女性はまるでただすれ違ったかのように目サントの女性の横を通りすぎた…。

「え？」

女性は思わず振り向いて…

ゴトン

しまつ前に首が落ちた…。悲鳴をあげる間も無かった…。

『まず…一人…』

鎌の持った不気味な女性は鎌についた血を振り払うと次の獲物を求めて歩きだす…。

サントの姿をした女性を殺すこと…

これが今回の彼女のゲゲル…

グロンギ、ガリマのゲームのルール…

そして首を無くしたサンタの女性の体は辺りを服と同じ真っ赤に地面を染めていた…。

一方…

「あはは…」

クウガはゴオマを撃破した…それまでは良かった…。だがもれなく警官隊に取り囲まれ中だった…。仮面ライダーと言えどこの世界の怪人『グロンギ』と人々の認識は何ら変わらない。そのため警官隊に攻撃の対象と見られてもおかしくない。

(さ…って…どうすっかな…)

クウガ自身としては人を傷つけるつもりは毛頭ない。出来れば強硬突破は出来れば避けたいのが彼の願いだが…

「どうする四季ちゃん？」

この状況を見かねた伊達は四季に意見を聞こうとしたが…

『KAMEN RIDE DECADE BLOOD』

その時、隣に四季の姿は無かった…。

「つあつ!!」

「「「!!」」」

突如、クウガを囲む警官隊の真っ只中に突っ込むディケイド・ブラット。彼を目にしたクウガ、警官隊に衝撃が走る!!

「な!何だお前!?!」

『KAMEN RIDE ACCEL』

『FORM RIDE BUASTAR』

「細かいことは気にするな。」

動揺するクウガをよそにバックルにカードを装填するディケイドB。彼は一旦DBアクセルに姿を変えるとさらにカードを装填、青いバイザーにはシャッターが降り、装甲も深紅から黄色に変化し背中のタイヤのパーツが吹き飛びブースターとなる。そして姿はDBアク

セルブースターへと変わる。

「いくぜ……。」

「ちょ！？人の襟首掴むんじゃ……」

DBアクセルブースターはクウガの襟首を掴み……

「ういつとー!!」

バシユウウウウウ!!

「うおおおおおおおおおおおおおおおおお……  
!?!」

クウガを引つ提げたままブースターを点火し空へ消えていった……。  
その場には煙とクウガの虚しい叫びが尾を引いていた……。

「あじやや……」

少し離れた所から伊達はその様子を見ていた…。

「四季ちゃんたまに無茶するね。まあ嫌いじゃないけど…」

そんな事を言いながらその場を後にしようとした伊達だが…

「すいませんがお話をお聞かせ願えませんでしょうか？」

「え？俺？」

女刑事に呼び止められてしまった…。彼女はゴオマと戦っていた警官隊を率いていた女刑事であった…。

午後2時4分…

どこかの路地…

ガリマは新たな獲物を見つけた…。オレンジ色の髪の毛のサンタの衣装を着た女性…。自分よりも頭一つ分くらい小さいくらい背で首を刎るにはちょうど良い具合だった…。

『お前で…4人目だ…。』

ガリマは静かに距離を摘めていく…。早足ぐらいの速度だが足音は聞こえず女性も気づく様子も無い。

(もらった…)

彼女は獲物を仕留められると確信し、鎌を振り上げ…

『振り向く……!?!』

彼女は首を刎った…そのはずだった…。

だがガリマは手応えに異常…いや、手応えを感じなかった…。まるで空を切ったかのように…

振り向いてみれば倒れていく首が離れた女性の死体…

一瞬、思考に入る彼女だったが…



チャキ…

「振り向くな…てか？」

『！』

彼女はここで自分の背後の存在に気づいた。しかし、時既に遅し…

バンバンバンバンバン！！

『！！ぐっつ！？』

彼女を無数の金色の弾丸が襲う。

「全く…クリスマスにサンタの可愛い娘ばかり狙うとは悪趣味な奴だぜ。」

弾丸の飛んできた方向…

そこにはバースバスターを構える浅黒いアジア系の顔立ちの青年の姿…。

彼は先程、伊達の屋台から逃走した『アキラ・G・ダイソン』その

人だった…。

『ク、クウガ…!?!?』

「違うぜ、冥土の土産に覚えときな…俺は…」

アキラはジャケットの懐に手をつ込むと緑色のガチャポンのカプセルが埋められたような変身ツール『バースドライブ』を取り出す。

「バースだ!変身!!!」

『カポーン』

彼ははいていたジーンズのポケットからメダルを取りだしそれを右手で弾き上にあげるとそれを右の人差し指と中指で挟みそのままドライブへ投げ込みネジを回す。

すると『カポーン』という音共にカプセル部分が展開、アキラは薄い緑色の球体に包まれると機械のような装甲が形成されその姿を『仮面ライダーバース』へと姿を変えると黒いバイザーを赤色に光らせる…。

「俺様…:参上!!!」

バンバンバンバン!!

変身と決めセリフを終えると容赦なくバースバスターを乱射するバース。

『くっ！』

ガリマも緑色の虫を模した怪人態へと姿を変えるとバースバスターの弾を鎌でなぎはらっていく…。

「あらマジで？でもおんなじような奴こっちにあるぜ！！」

バースは別にそれに焦ることなくベルトのバースドライバーへメダルを入れネジを回す。

『チェンソーアーム』

電子音声がすると機械の部品がバースの左手に装着されていき2つの刃を持ったチェンソー型の武器（CLAWS）、チェンソーアームが現れる。

「オラ！」

ギギギギギギギギギギ…！！

ガリマの鎌を受け止め激しく火花を散らすチェンソーアーム…。

「イヤッホー！」

バンバンバンバン！！

さらにバースは空いた右手でバースバスターを構え至近距離でぶつ放す。

『ぐええ！？』

思わすのげぞるガリマ…。

「そつち行つたぞティアナ！！」

それと同時に声をあげるバース。

『！』

ガリマが振り向くとそこにはもう一体のブレストキャノンを構えたオレンジ色にバイザーを光らせるバースの姿があった…。

『セルバースト』

「ブレストキャノン…シユート！！」

この後、ガリマの視界は真っ赤に染まった…。

数秒後…

「中々ナイスだったぜティアナ!!」

喜びながら変身を解除し、元の姿に戻るアキラ…。

「師匠も腕が鈍ってないようで安心しました。」

オレンジ色にバイザーを光らせたバースも変身を解除しティアナへと姿を変える。と言うより戻る。

「しかし、まあ良くこれできてんな…」

そう言いながらアキラが突つつくのは先程、首をはねられた女性の死体…。それはティアナと瓜二つであった…。

「クロスミラージュ、もう良いわ。」

『オーライ、マスター。』

ティアナはの中に『x』白いカードらしきモノを取り出すとそれは言葉を発すると同時に死体が色素が抜けるように消えていく…。

「いやはや、流石に『幻影』は弟子には敵わないね…。」

「師匠はそれ以外も私に何も敵わないですがね。」

「んだと!?!」

喚くアキラをティアナがあしらいながらその場を立ち去っていった

…。

「まずいな…バースが4人もいるとは…チャツチャと依頼をこなすか。」

物陰からそれを見る男に気が付かず…

## 師弟（後書き）

次回は正月くらいかも…

クリスマスはリアルには終わってるけどまだこっちの小説ではクリスマス。

アキラ・G・ダイソン

ティアナのバースの師である青年。リリカルなのはのフェイトとある経緯で出逢い良き同僚、ストーリーカーが3対7の付き合いをしている…。

彼はいずれ作者が連載する予定のオーズの小説で活躍する予定です。

**特別篇 謹賀新年・驚愕信念？【何かおかしくね？】（前書き）**

特別篇です。

特に面白い訳ではないですが…

そして十河さんのISと再びクロス！！



特別篇 謹賀新年・驚愕信念？【何かおかしくね？】

カフェ『スプリング』

「墮とし玉？」

「違いますお年玉です。」

四季の誤字（？）にシユールに突っ込むシユテル…。  
理由は…

「お年玉ちよーだい！」

「塵芥が我にお年玉を渡すことを許してやろう。」

お年玉をねだるレヴィとロードである…。

「おまえらな、店番サボるは食い逃げするはクーデター起こすは何  
一つ善行をしてん癖にいい歳ぶっこいて脅し玉をもらおうとは…。」

「お年玉です。」

四季の誤字をまたシユールに訂正するシユテル…。まあ四季とって  
は『お年玉』も『脅し玉』も『こし玉』も同じようなもんだが…

「クリスマスはプレゼントあげたじゃん！」

「シユテル縛りあげて俺にぶん投げただけだろ。」

レヴィとロードは先日のクリスマスに確かにプレゼントは渡した…。  
まあ、シュテルをラッピングして四季にぶん投げただけだが…

「分かった、分かった。俺様がためえ等には勿体ないほどの由緒正しいお年玉をくれてやるよ。」

「「ヤッター!!!」」

(用意はしてたんですか…)

それを見かねた四季はおもむろに懐に手を入れる。レヴィとロードは大喜びしシュテルは意外な表情をする…。

「ほらよ。」

そう言って四季が出したのは…

「「「?」」」

立方体の箱だった…。

(「こねって中にプレゼントがはいってるのかな?」)

(わ、解らん。だが期待はできそう…)

しかし中身は…

「「餅?」」

鏡餅を一段とったかのような丸い餅…。期待をしていたレヴィとロードは戸惑う…。まあ、シュテルは元より期待など毛頭にしていないので顔色一つ変えない。

「元々お年玉っていうのはこんな丸い…」

バキッ!!

「何をする!?!」

数秒後、四季の顔面にレヴィとロードのパンチが炸裂した。

「ブッー!!ブッー!!」

(お二人とも…大人げないです。)

外見はほほいい大人だが完全中身の子供レベルの精神丸出しのブーイングをする2人…。シュテルは口には出さないが(出すと面倒だから)あきれている…。

「わかったよ…出せばいいんだる出せば…」

そういつてだしたのはまた先程と同様の箱…しかも何やら黄色いオラを発するほどの異臭が…

「こし玉だ。」

ちなみにとあるモンスターを狩るゲームのアイテムのうちの1つで通称うこ玉と呼ばれるアイテムだ。何でそんな物があるかって?細かいことは気にするな。

「ほら玉だぜ…」

「ふん!?!」



一時間後…

汚物の処理も終わったスプリングに鏡餅のようなコブを作った四季…それをシュテル、レヴィ、ロードは怒りの形相を浮かべ睨む…。

「落ち着こうか3人共…。」

一応、なだめようとはするものの3人娘の形相は険しい…。

「ほらこれやるよ。」

そしてまたもや箱を出す四季…。

「」「」「」

流石にその手は食わぬと睨む3人…。

中身はまたまた玉…。黒いくす玉のようだ…。

「ロード、お前はここを持って。シュテルとレヴィはヒモを持つんだ。」

四季の指示に従いロードは玉をつるしレヴィとシュテルはヒモを持つ…。

「いいか？3、2、1で引くんだぞ？3…2…1…」

カチッ

四季の合図と共にヒモを引っ張るシュテルとレヴィ……。  
何やらカラクリ的な音がしシュテルはその瞬間、素早くサングラス  
をかける四季を見て全てを理解した…。

謀られたと…

カッ！！

「「「！？」」」

凄まじい閃光がくす玉から炸裂し怯む3人。

「今だ！！」

四季はその隙に外へ飛び出るとブラック・ディケイダーにまたがり  
エンジンをふかす。

「ま、まで…」

ロードもフラフラしながら追跡しようとしたがすでに四季の姿はそ  
こに無かった…。

「ふう…」

街をブラブラする四季…。3人を何とか巻いたことで一息つこうと  
辺りを見渡す…。

するど…

「お年玉」



ギユイイイン!!

『グワアアア!!』』

「!」

緑色の虫と赤い右腕にドリルアームでお年玉という名のセルメダル徴収を行っているバースを見たり…

『ガメル、これが初詣よ。』

『わかったよメズール。』

神社の住職でヤミーを作ろうとしたグリードを見たり…

「メダル入らないよ」

「あんまりふざけるな火野。」



数分後…

「で？俺のところに来たと？」

目の前には片方の目が金色の1人の少年。かつて、ダークアクセルとルナDときフォーゼの少女と共に四季の危機に助太刀に入ったオーズ、唯である。

「頼む！！このままじゃ新年こしちまう！！」

「まあ、構わないが…ウチの連中はどうした？」

何やら土下座して頼む四季にふと思った疑問を言う。

「ああ…それなら…」

四季が指さした先に…

「これ美味しいー！！」

「た、食べ過ぎてはいけないのですが…手が勝手に…」

「むむ…中々の美味だ。」

「茶菓子に最適だ。」

「美味しいわ。そして私がバースだ。」

「鈴！？アンタナニツテンダ！？」

「お前もな。」

すでに四季の持参したお菓子で買収されていた…。

「…（良いんだろうか？ウチの学園に勝手に部外者入れて…）」

「細かいことは気にするな。」

半ば啞然とする唯。四季は無論、録に気にしていないようだが…

「まあ、取り敢えず頼んだぜ？」

彼は黒い生地をそこに置くとしばらくそこを後にした…。

月面…

ラピットハッチ…

「やつほ〜皆!」

1人の少女が扉を開け入ってくる。こちらも四季の危機に助けに入ったライダーの1人、フォーゼこと昴である。

「ん?何か良い匂いがするな?」

本来ならするはずのないご馳走の匂いに気がつく昴…。何やら焼ける音がする方向を見ると…

「お肉は飲み物でぶう〜。」

「そうそう、お肉は飲み物……ええ!？」

そこには髪を七三にしたデブがいた……。そのデブがキッチンを持ち込みフライパンや多彩な料理器具を駆使しご馳走を作りあげていた。さすがにあり得ない光景に驚愕する昴。

「よう!久しぶりだなフォーゼ少女!！」

「!あなたは……」

彼女はここでテーブルに腰かける四季と商の存在に気づいた。

「な、何でここにいるんですか？それと僕の名前は昴です。」

「あ、そうか。わりい、わりい。」

頬を膨らます昴に軽い返事をする四季。

「それより、この方たちは？」

まず目の前の大きな疑問をぶつける昴。それに対し簡略な説明をする四季。

「紹介してなかったな。黒いずくめのコイツは変態強欲商人こと『商 喜助』。仮面ライダーゴールド電王だ。」

「ムム…失礼ですね。」

「んでその料理をしているデブは『ミスターボブ』。コイツ（商）の仲間でピカールのコックデブだ。」

「料理の出来ないデブはただのデブでぶっ〜。」

ある意味凄い人なんだろう。そう感じた昴は次の疑問を言う。

「あの…僕の友達たちは…」

「ああ…それなら…」

四季が指さした先は…

「」「」「蝶・サイコー!!」「」「」

「!?!?」

ボブの料理を食べテンションがおかしくなっている彼女の友人たちの姿があった…。

「お嬢ちゃんも飲むでぶうか?ドーング・コンソメスープ?」

「いや遠慮しときます。」

ボブの誘いも丁重に断る昴…。恐らく料理の危険性を肌で感じたからだ…。

「まあ、良い昴!!お前に頼みたいことが…」

そう言って四季は黒い生地を取り出した…。



数時間後…

カフェ『スプリング』

「帰ったぞー！」

四季はスプリングに帰宅する。そこには…

「T O S H I D A M A ! ! 」

未だにお年玉をねだるレヴィとロードの姿があった…。

「お、おまえら…仕方ない…。」

そう言って自分のズボンに手を突っ込み『何か』を引っこ抜いた四季…。同時に激しく吐血する。

「え？四季！？」

レヴィとロードが何とか倒れる寸前で受け止める。

「み、見るよ…最高のお年『金』玉だぜ？」

「うっ…四季…僕らのために…」

「じ、塵芥…」

四季の文字通り身を裂いたお年玉に涙するレヴィとロード…。

「んな訳あるかアア!!」

訳もなく四季をライダーキックをお見舞いするシュテルとレヴィとロード…。

四季はそのまま壁にめり込んだ。

「ふう…貴方という人は…見損ないました!!」

シュテルが軽蔑した目で見下す。

そこへ…

「まあまあそこらへんにしてやれ。」

「あちゃー派手にやられたね。」

何と唯と昴が現れる…。

「頼まれたもん仕上がったてのに…」

そう吹き引つ提げていたトランクを開ける唯。

「え?」

「い、いれ…」

「おっ」

その中には黒い生地の3つのエプロン。

一つは夜桜のような桜色の刺繍のエプロン。

一つはシアンの雷の模様の刺繍が3筋入ったエプロン。

もう一つは白い剣十字が刺繍されたエプロンだった…。

「四季さんがね、1人じゃキツイし女の子の意見も聞きたいって言うたから僕らも協力したんだ〜。」

これまでの経緯を簡単に説明する昴。四季をぶっ飛ばした3人は驚きの表情を浮かべる。

「まあそついう事だ。大事に着てくれよ。」

「じゃあね〜。」

来訪者2人はそのまま去っていった…。

ちなみにこのあと3人がエプロンを身に付け後日、バリバリ働きだしたのと、唯と昴以外の協力者は実は『仮面ライダー』のあの人を落とす753の方法』で買収されていたのはまた別の話である。

特別篇 謹賀新年・驚愕信念？【何かおかしくね？】（後書き）

それでは皆さん、

良いお年を！！

今回は通常運行だ。

エプロン製作風景…

ディケイドB

「分身すれば作業効率も上がるというわけだ。」

シャル「でもここに何人もいても邪魔なだけだよ。」

ラウラ「多ければ良いという物ではないからな。」

ディケイドB「あ、そっか。」

## 事情（前書き）

今回は戦闘なしですね…

しかも短くてすいません…

それと紅蓮の破壊者オールライダー企画が始まります…。

お楽しみに!!



## 事情

「げふ!!」

シュタツ

警官隊の包囲網から脱出したDBアクセルブスターとクウガはスプリングの近くの路地裏へと着地する。

まあ、クウガは尻からの無様な落下だったが…

「いつてエエエエ!!」

尻を押さえ悶えるクウガ…。中々シユールな光景である…。

「おい…大丈夫か?」

「て…てめえ…」

四季は変身を解き、クウガも変身を解除した…。

「お前…何者だ!」

痛みに涙を浮かべ睨むクウガだった青年……。髪はオレンジ色で目付きも少しきつくまるでヤンキーのようだ……。

「ただの仮面ライダーだ。礼ならいらん。」

しかし、四季は青年を特に気にせず去ろうとした……

「さて！お前は未確認か？」

青年の言葉に歩を止める四季……。

(未確認…グロンギのことか……)

四季は溜め息をつくと青年に向き直り……

「俺はグロンギじゃねえし人を襲う気もさらさらない。一応、お前の同業者だ。」

一瞬、間を明け……

「味方…なのか？」

『同業者』という言葉に戸惑いをみせながらきく青年……。

「さあな……。」

四季はその答えをぼかすとその場を去っていった……。

「あ！おい…！！」

彼を追おうとした青年だが…

『　　』

「こんな時に電話かよ！？」

青年はポケットから携帯電話をとりだし、電話にでる。

『もしもし、一護！！』

「どうした啓吾か？今取り込み中なんだが…」

電話をかけてきた声の主は何だか軽そうな男の声…  
青年は面倒な顔しながら応対する。

『授業抜け出したからって先生めっちゃキレてんぞ！早く戻ってこい！！』

「ああ…わかったよ…。」

『てかお前、何して…』

ガチッ

『ツ…ツ…ツ…』

青年は電話をかけてきた声の主の質問をきかれる前に電話を切った…。

「たく…」

青年はぼやきながら腹に両手を当てるポーズをとる…。すると銀色で丸い宝玉『アマダム』のついたクウガへの変身ツールのベルト『アークル』が現れる。

「超変身!！」

青年が叫ぶと『アマダム』が青く輝き、青い鎧が形成されていく…。

そして先ほどのクウガとは胴体の鎧が微妙に鎧に近くなり、複眼や鎧も青くなる…。

これはクウガの特徴の1つ…フォームチェンジでありこの携帯はドラゴンフォームと呼ばれている。俊敏さと身軽さに秀た携帯だ。(因みに先程のゴウマ戦の赤い形態はマイティフォームと呼称されており素手での肉弾戦へ特化している。)

「ふっ!！」

クウガDは壁を蹴り建物の屋上に出ると屋上を飛び移りその場を後にした…。

数分後…

カフェ『スプリング』…

四季が戻るといつものおバカ3人（シユテル、レヴィ、ロード）とオナー…そして、1人の少女と顔がひきつった伊達さんの姿があった…。

「ごめん四季ちゃん!!」

「?どうしたんすか伊達さん?」

四季を見るやいなや手を合わせ謝罪する伊達さん…。何があったのかはテーブルに置かれている『プロトバーストライバー』と少女の言った言葉で全て理解できた…。

「お忙しい所すいません。警視庁、未確認生命体対策本部所属、  
朽木ルキア』警部だ。」

黒髪の可愛らしくも見えるがこの堂々とした態度の少女がだした警察手帳…。つまりそれは…

「バラしたのか伊達さん…。」

「あはは…許してちょー!!」

このおでんオヤジ…

四季は心から彼をぶん殴りたいと思った…。

まあこんな時に機転のきく後藤やティアナがいないのだから仕方ないのだが…

アキラ？誰だそいつは？

「貴方方が未確認と同様の力を行使しているのは確認されています。」

話を聞きたいので出来れば抵抗することなく署までのご同行を願います。」

「イエス・サー……」

こうして四季と伊達は渋々連行されていきシュテルはそれを心配そうに見つめていた…。

一方…

とある高校…

「はっ…！はっ…！ぜえ…ぜえ…」

黒崎 一護はグレーの制服を着て廊下を走っていた…。そして、自分の教室の引戸をあける。

「すみません！！黒崎 一護ただいま戻りました…」

バキッ！！

「おう!?!」

その途端彼の額にチヨークが直撃する。

「遅い!! 便所でもとっと戻ってこんかい!!」

チヨークを放つたのは眼鏡をかけた女教師:「ごせんのやん みをポニーテールにしたような外見だ。ちなみに彼女は一護のクラスの担任である。」

「すみません!! ほんと、すみません!!」

頭を下げ必死に謝る一護:「」。

「全く:「これで成績が学年で23位てのは驚きだよ:「。まあいいや、座れ!!」」

「はい!!」

女教師は一護を許すと一護は窓際の奥の隅にある自分の席に着席した:「」。



数時間後…

午後12時46分…

昼休み…

屋上…

「ふう…」

一護は売店で買ったお気に入りの焼きそばパンをかじりながら手すりに寄りかかっていた…。この時間は彼の数少ないリラックスできる時間である…。

「お〜い！い・ち・護〜〜〜〜〜〜！！！」

そこへ何やら軽そうな青年がやって来る…。

彼の名前は『浅野 啓吾』一護のよくつるむ友人の1人で持ち前の明るさが特徴だが悲しいことにあまり頭は回らない…。

「どうした啓吾？いつになく楽しそうじゃねえか？」

「フッフッフッフ…これを見よ！！一護！！！」

そう言って彼が取り出したのは週間雑誌…何やら胡散臭い記事でしかもほとんどが未確認生命体の根も葉も無い内容の記事で埋められている…。さらに今回は『特集！！4号の正体！？』とでかかど

表紙に印刷されており、その脇にクウガの写真と『4号は本能的に仲間を殺している?』『いずれは人に牙を剥く!?』などと書かれている。

一護からしてみれば気分が良くない…

「で、見ろよ!この今人気のアイドル、いのりちゃんの…」

と言いながら彼が見せたのは全く未確認生命体とは関係ないグラビアコーナー…。

(…)

これにはコケる一護…。この愉快的友人は身の回りの怪人のことなど興味は無いのだろうか…。いや、彼にとってはいつ現れるかわからない未確認生命体よりグラビアのほうが大事なのだろう…。

「一護…。」

「?」

しばらく騒いでいた啓吾だが突然真剣な顔になる…。

「な、何だよ…」

思わずたじろく一護…。

「お前が学校脱け出して何してるのかは知らない。だけどお前のそ

んときの顔はただ事じゃねえ顔してる…。何か抱えこんでんなら相談してくれよ…短い付き合いだけど友達だろ？俺にやれることがあるんなら何でも力になる…!!」

「…」

流石に驚いてしまっ一護…。しかし、すぐ落ち着くと…

「わりい、これは俺じゃねえとどうにも出来ねえことなんだ…」

そう呟くとその場を後にした…。

一方…

警視庁前…

「さて、拘束を解いて貰おうか？」

「「!？」」

四季はルキアに信じられないことを言い放った…。

「貴様…何を言って…」

「やあ、やあ!!四季くんじゃないか!!」

彼女が驚ききる前に警視庁の出入口から中年の眼鏡をかけた男がでてくる。

「対策室課長!!」

ルキアはそれが自分の上司と知るのはほぼ一瞬と言っても良かった…。

「ルキアくん!!わざわざ御苦労様!まさか君が『彼ら』を連れて

来てくれるとは…」

「彼ら？」

男の言葉に疑問を覚えるルキア…。それを見かねたように四季と伊達はポケットから警察手帳と似た物を取り出す…。

「未確認生命体対策本部動向系対策課、西門 四季！！」

「同じく、未確認生命体対策本部医療系対策課長、伊達 明！！」

「「ただいま出向しました！！」」

この言葉にルキアが驚愕したのは言うまでもない。

事情（後書き）

戦闘は次回かな…

アキラとティアナは良いとして後藤はどこにいったのか…？

多分まだ屋台にいるんじゃないすかね…。

後藤「誰も戻ってこない…」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5171w/>

---

仮面ライダーディケイド～紅蓮の破壊者～

2012年1月4日11時49分発行